
Fragments of the necessity.

Yvon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fragments of the necessity .

【コード】

N5209M

【作者名】

Yvon

【あらすじ】

世界的な不況と治安の悪化により、貧富の差がより激しく、失業者や犯罪率が増加傾向にある近未来。

全てが謎に包まれた殺し屋 アサシン が世界を脅かす存在として真しやかに囁かれている。

任務達成率100%を誇るアサシン・川崎の代理人として彼と過ごす事となった僕は、やがて想像を絶する真実へと辿り着いた。

prologue (前書き)

この小説には、殺傷行為、薬物使用、性的行為といった過激な描写がある為、15歳未満の方の閲覧はご遠慮願います。

この小説に登場する人物や会社名はフィクションです。

prologue

ひんやりとした爽やかな空気が漂う秋晴れの昼下がり。人々が何処かよそよそしく、何かに追われる様に足早に行き交うオフィス街の一面に、そのビルはある。寂れた雑居ビルの2階、磨り硝子が嵌められたドアには、「(有) MEDICATION」と印字されたプラスチックの看板が張られている。

特別気負う場所でもないが、風で乱れた髪を手梳で簡単に整え、咳払いひとつ。そして、ノブを回してドアを開けた。

「失礼します……」

開けたドアの隙間から、鼻を刺激する強烈な煙草の臭いが飛び出し、開口一番「うっ」と呻きそうになる。何度となく此処を訪ねてはいるが、この臭いにはどうにも慣れない。室内は壁に隙間なく書類を収めた棚が敷き詰められ、窓側には来客を迎える為の革張りのソファと大理石が嵌められた背の低いテーブル、その横には最新のコーヒーメーカーが備わっている。中央に鎮座する木目調のデスクに、座り心地の良さそうなチェア、そのどれもがそれなりに値を張る代物である事は素人目にも判断出来る。しかし、その高級感はこの煙草の臭いで台無しである。

「おう、来たか」

その男はチェアに深く腰を沈め、此方に柔らかな笑みを浮かべて口を開いた。彼の名はウィリアム章大、推定30代半ばだろうか。太く凛々しい眉と鋭い目付き、彫りが深く高い鼻が印象的な男である。恐らくは女好きしそうな顔立ちなのだろうが、輪郭を覆う無精髭と伸びっぱなしの猫毛が何ともむさ苦しい。他人の目とファッションに全くといって良い程関心がなく、いつも皺だらけのYシャツとジーンズを着ている。彼がこの室内に漂う強烈な臭いを放つ原因である煙草は、聞いた事のない銘柄である。彼と煙草はイコールで結ばれる程のチェアースモーカーなのだ。

こんなに彼の粗探ししてしまう位、僕は彼を嫌っている。これと
いって決定的な理由はないのだが、人間的に受け付けない存在では
ある。出来れば生涯で関わりたくはないのだが、僕も生きる為には
彼を頼る他ない。

「何度も言うようだが、態々（わざわざ）そうビシツとスーツなん
て着て来なくても良いんだぞ？もっとラフな格好でもしたらどうだ」
背も高くその顔立ちからして、欧米人とのハーフなのかも知れな
い彼は、巧みに日本語を話す。見知らぬ人が彼に道を尋ねようとす
れば、恐らく最初は英語を使うのであろう。僕ならどんなに困つて
も、彼のような人物には声を掛けないが。

「一応、仕事なので」

もっと自分の見映えを気にしてくれと、内心毒付きながら、僕は
素っ気なく返した。彼は「そうか。」と、苦笑混じりに呟く。

「これが今回の案件だ」

デスクを隔て、パイプ椅子に腰掛けた僕に、彼は煙草を左手の指
に挟み、その手で机上の書類を差し出して来た。僕はそれを無言で
受け取り、内容を目で追った。

書類はクライアントとターゲットの個人情報、合意書、請負人の
承諾書の4点。一応、細部に迄目を通す。

「ターゲットは女、か。不倫関係の纏れかな」

「俺達が知るべき事ではない」

僕の独り言に、彼は間髪入れずにトゲを刺して来た。いつもの調
子とは違い、体を貫く様な鋭い口調だ。僕は、威圧的な無表情で此
方を見下ろす彼と視線を合わせた。この道3ヶ月、まだまだ駆け出
しの身ではあるが、その位の事は十分承知している。クライアント
とターゲットの個人情報、案件の内容、及び業務内容やそれに関わ
る人物の情報は一切他言無用。加えて案件に対する詮索も固く禁じ
られている。これは業務の初歩的な必須項目である。単なる独り言
に対して、そんなにムキにならなくても良かるうものだが。僕は言
い返す気にもなれず、視線を書類へと戻し、更に読み進めた。案件

の期日は設けられていない。つまり、任務達成の為なら期日は求めないという意味であろう。注意事項はどれも当たり前前の事しか記載されていない為、態々読みはしない。大抵は“極秘”、“被害の拡大の防止に努める事”なんて所だろうか。

書類を隅々迄読んでみたものの、それ程重要な任務ではない様に思えた。しかし、クライアントの名前と多額な報酬に、それがどれ程世間を揺るがす重大な事なのか容易に理解出来る。

「だから川崎に……」

僕は納得して数回頷いて見せると、脇に置いていた鞆に書類を収め、それを手に立ち上がった。

「吉報を期待してるぜ」

彼は怪しげな光をその目に宿し、不敵な笑みを浮かべて煙草の先端を灰皿の底に押し付けた。僕は不本意ながらも、その場で軽く一礼してから、其処を後にした。外界の空気が、一段と澄んで感じた。

ビルから歩いて約20分、オフィス街に隣接するスラム街の入口には、地下通路に続く階段がある。と言っても、其処は10年程前に爆弾テロがあつて以来、一帯は地下鉄の機能を停止し、今やホームレスや家出した若者、ジャンキーの巣窟と化している。確かその頃から此処は地下鉄の経路から除外され、立地も相俟って復旧工事がされなかった。異様な臭気が漂い、暴力沙汰や犯罪も日常茶飯事といったこんな危険な場所への立ち入りは、当初心底嫌であった。

それが今や僕もこの辺では名の知れた存在。擦れ違ふ人の殆どが顔見知りだ。

政府から見放されたこの地区には、規則や条例なんて通用しない力のある者が権力を握り、いつ死人が出ても不思議はない様な場所である。実際、行き交う人間はジャンキー特有の目付きをしていたり、常に凶器を身に付けていたり、何処か危なっかしく、それでいて虚勢を張っているだけの拳動の不審さが目立つ。死と隣り合わせの生活に疲弊している様が見取れる。そんな場所に危険を顧みず、

僕がこうして足を運べるのには理由がある。いつしかこの地下通路の住人と化したある青年が居るからだ。その青年は、何故かこの一帯では脅威と恐れられており、誰も逆らおうとはしない。僕は虎の威を借る狐、という訳だ。

階段を下り、割れた硝子の代わりに段ボールを張って防寒対策のされたドアを潜ると、左右に広々とした通路が伸びている。何処からか電気は通っていて、天井の照明が辛うじて周囲を照らしている。コンビニ弁当やファーストフードのゴミが散乱する通路を右に少し歩く。出会った目の血走った体格の良い大男も、僕を前に背筋を曲げ、軽く頭を下げながら、すすすごと立ち去って行くのだ。

やがて、かつてはカフェだったとされる小さな店舗跡地に辿り着いた。通路や他の跡地と違い、此処だけはその場所に相応しくない程に掃除が行き届いている。L字のカウンターテーブルに、整然と並べられた椅子がかつての面影を唯一表している。店舗の奥には正方形のテーブルが隙間なく並べられ、薄汚れた厚手の布が敷かれ、簡素なベッドの役割を果たしていた。其処に青年は壁に凭れ、膝を立て、頭（こうべ）を垂れた姿で踞っていた。

「川崎」

僕の呼び掛けに、青年は微動だにしない。眠っているのだろうか、辛うじて肩が呼吸に応じて動いているのだけは遠目にも確認出来た。

「川崎、仕事だ」

「聞こえてる」

声のポリウムを上げ、再び声を掛けると、今度は間髪入れずに返事があった。酒焼けでもしたかのような様な、低く掠れた声には、何気無い一言にも威圧感がある。聞いているだけで物怖じしてしまいうな程だ。

青年はゆつくりと膝に当てていた額を離し、顔を上げた。長い睫毛で縁取られた灰色の瞳に、薄く血色の悪い唇、整った細い眉と、モデルでもやっつていそうな化粧映える程の中性的な顔立ちである。青みがかったミディアムショート黒髪で、鼻先を越す長い前髪か

ら覗く力強い眼光は、見る者を圧巻させる凄まじさを秘めている。細身のVネックシャツとパンツは黒で統一され、彼の内から滲み出される禍々しい不穏なオーラを引き立たせている。

青年の名は川崎。下の名は知らないが、それでも不憫はない。

僕は鞆から先程ウイリアム章大から受け取った書類を、川崎に手渡した。それを手に取ると、彼は顔色ひとつ変えずに黙読し始めた。僕は川崎の無表情しか見た事がない。何にも動じない冷静沈着な性分でもいうのだろうか。表現力に乏しいというよりは、感情そのものを持ち合わせていないのだろうかとさえ思わせる。過去に何か苦労したり、苦境に立たされ、辛苦を味わったのである。その様子から窺えるが、直接問い質した事はない。何せ業務以外の話をした事がないのだ。人付き合いが好きではなく、干渉される事を好しとしないのは、その雰囲気からも感じ取れる。

「愚問かと思うが、この案件、請けても良いか？」

僕はスーツの胸ポケットに挿してあるボールペンを抜き取りながら訊ねた。敢えて「愚問」と前置きしたのは、川崎が依頼を断った事が一度もないからである。彼は書類に視線を落としたまま、小さく、しかし確実に頷いて見せた。その目には、既に任務達成にかける強い意志が感じられる。流石（さすが）は任務達成率100%を誇る、当社随一の逸材だ。的確で俊敏に、そつなく任務をこなす。あらゆるイレギュラーにも臨機応変に対応出来る柔軟性、冷静な判断力と分析力、並外れた身体能力を持ち合わせ、主に最重要任務を任されるのが川崎である。

川崎は立ち上がり、此方へと近付いて来た。僕がボールペンを渡すと、請負人の承諾書をカウンターテーブルに置き、サインをしてからそれを僕に返した。そして、椅子の背凭れに掛けてあったグレーのジャケットを羽織ると、高らかに靴音を鳴らし、外へと向かう。線の細い体軀からみなぎる異様な雰囲気、またも任務達成の期待と後ろめたさが込み上げ、僕は顔をしかめた。

青年の名は川崎。今や世界を脅かすアサシンである。

近未来は世界的な不況と治安の悪化により、貧富の差はより激しく、失業者や犯罪率は増加傾向。様々な国や地域、場所が秩序のない無法地帯と化した。

生きる為には金が居る。失業者や低所得者の中には、犯罪に手を染める者が後を絶たず、彼等を手玉に取り、金や物資を交換条件に犯罪を誘発する富豪も少なくなかった。

「アサシン」はそんな現状から生まれたとされる。依頼を請け、ターゲットを殺害し、報酬を得る。業務内容は他言無用。請け負ったアサシンもターゲットが何故命を狙われるのが判らないのだから、当人は尚の事、何も知らぬ間に殺されるのだ。

ウィリアム章大が代表を務める「(有)MEDICATION」は、表向きは一般的な経営委託業務となっているが、実際はアサシンへの依頼を請け負う仲介業である。依頼は彼の元へとやって来て、その内容に応じて適切なアサシンへと引き継がれる。実は彼、直々にアサシンの育成も行っている裏ではかなり名の知れた凄腕なのだそう。

川崎に任される依頼は、僕を通じてやって来る。アサシンの中には、仲介者との間に僕のような代理人を挟んで任務を請け負う者も居て、必要最低限の他者との接触を避けるパターンもある。

僕がアサシンの代理人を始めたのは3ヶ月前の事。交通事故に遭い、暫く入院していたお蔭で勤めていた会社から首を切られ、貯金も底を尽き掛けていた頃だ。就職先を求めて躍起になっていた僕に手を差し伸べて来たのがウィリアム章大だった。アサシンの代理人としての業務。間接的にも人殺しの手助けをするという内容に、当初は新手の詐欺かと疑った。或(ある)いはアサシンという存在に腰が引けて、怖じ気付いた。しかし、川崎が任務を達成すれば報酬の10%が支払われる。10%といっても、莫大な額だ。書類を受け取り、川崎に渡し、任務を終えたら事後報告書を提出して終わる何とも単純な流れで、その莫大な報酬が手に入る。恐ろしくも後ろ

めたさもあつたが、僕は酷く悩んだ末、ウィリアム章大の手を掴んだのである。

一週間後の新聞に、見覚えのある名前を見つけた。小さく取り上げられた記事には、30代の女性が自宅のベランダから転落死したと書かれている。以前、川崎が請けた依頼のターゲットだ。

「『事件性はなく、警察は自殺と見て捜査を進めている。』……か」
川崎らしい、と僕は思った。加害者が居るといふ見解をさせず、自殺が事故に見せ掛け、任務をこなすのは川崎の得意な手口だ。一体、どんな手を回せばそんなに上手く事が進むのかは判然としないが、アサシンの中でも群を抜いて手際が良いとウィリアム章大が絶賛していた。

「お高くとまったあの浮気性の政治家も、さぞ安心してるだろうな」
僕はテレビで見た事のあるクライアントの顔を思い浮かべながら、温（ぬる）くなった珈琲を喉に流し込んだ。

これは近未来の話。全てが闇に覆われたアサシンが潜む世界。次の依頼が、貴方の殺害ではない様、日々の行いにご注意を。

アサシンが依頼を請けてから、任務完了に至る迄の流れを簡単に説明しよう。

まずは、クライアントとアサシンの仲介者との間で依頼についての説明や書類作成を行う。依頼は仲介者からアサシンへと引き継がれ、任務達成後、事後報告書を仲介者に提出し、クライアントと確認。報酬を受け取るといった流れである。

店舗の委託業務という名目で設立された「(有) MEDIA TION」。その実態はアサシンへの依頼を請け負う仲介業だ。代表を務めるウィリアム章大(しょうた)が自ら選出し育成されたアサシンが在籍している。どのアサシンも引けを取らず有能な人材だが、中でも群を抜いてその実績を誇るのが川崎だ。その世界でも一目置かれる存在……と言いたい所だが、アサシンという存在自体は世界に広く知れ渡り、恐れられてはいるものの、彼等自体の動向や素性は一切謎に包まれている。アサシン同士が接触する事もない為、その実績は社内のみの評価で決まる。

僕は川崎の代理人として、彼への依頼をウィリアム章大から伝える役割をしている。人殺しの手助けと言えば気が引けるが、僕にも生活がかかっている。こうして彼等と共に業務にあたるのは、苦肉の策という訳だ。

滅多に起こらない事とはいえ、雪でも降りそうな程に凍て付く風が吹く午後のオフィス街。空には、ここ数日厚い灰色の雲が翼を広げた様に留まっている。最近、地上を照り付ける太陽を見たのは、いつの事だっただろうか。

僕は厚手のコートを纏い、吹き付ける冷えた風に身震いしながら、ウィリアム章大の待つビルへと向かっていた。もうすぐクリスマスだ。こんな不況にも屈せず、街は赤や緑、金色のきらびやかな装飾が施されている。いずれは家族や恋人との細(ささ)やかな幸せを

胸に、人々は嬉々とした表情で行き交うのだろう。そんな世界的なイベントとは無縁の生活を送っている上に、これからあのむさ苦しさ極まりない男に会わねばならないと思うと、どうにも気分が上がらない。仕方無い事とはいえ、もう少し見映えや煙草の臭いを何とかしてはくれないかと切に願いながら、僕は事務所へと辿り着いた。

「失礼します」

「ひっ…!？」

ドアを開け、室内に入ろうとした僕と、中央に鎮座するデスクの前に置かれた椅子に腰掛けていた先客との視線がぶつかった。酷く痩せ細った体躯に、怪しくギラギラとした眼光を放つ大きな目が印象的な、貧弱そうな男である。初対面の相手にはとても失礼だが、危険度の高い妙な雰囲気醸し出している。

男は幽霊でも見たかの様に目を剥き、顔を強張らせ、肩を竦めて怯えている。見覚えのある顔だが、さて何処で見ただろうか。僕は怪訝な表情を浮かべて首を傾げた。

「早かったな。あ、ご安心下さい。彼はあるアサシンの代理の者です」

男と対峙して革張りのチェアに座っていたウィリアム章大が、そう言っただけで僕を紹介した。恐らく、クライアントなのだろう。こうしてクライアントと面と向かって会ったのは初めてだが、僕はそれよりウィリアム章大の姿に驚かされた。

普段は四方に寝癖を散らせた無造作ヘアという名の一切手入れされていない髪が、今は全て後ろに撫で付けられ、皺だらけのYシャツとジーンズではなく、黒のスーツ姿に身を包んでいるのだ。いつも煙草の臭いが漂っている室内も、窓を開け、新鮮な空気を取り入れている。一応、来客のもてなし方は心得ている様だ。

「ああ、そうでしたか…」

ウィリアム章大の言葉に、男は度が過ぎる程に安堵の溜め息を吐き、ホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、途端に大きな瞳を輝かせ、怪しげな笑みを浮かべた。

「という事は、アサシンにより近い存在、そういう事ですね？」

何故か僕がアサシンの代理人という部分に食い付いたらしく、男は席を立ち、背中を丸め、膝を若干折り曲げた不自然な歩き方で、足早に此方へと近付いて来た。何なんだ、コイツは。僕はつい眉間に皺を寄せ、何をされるのかと身構えた。

「アサシンとは、具体的にどの様な人物なんですか？」

「は……」

「例えば見た目とか、名前、性別、生年月日、出身：何でも良いんです」

「ちよつと……」

「アサシンと接する機会はあるんですね？人殺しとっては言葉が悪いですけど、まあ、会う事に恐怖心とかはないんですか？」

「……」

「お願いします、教えて下さいよ、ねえ」

突然、矢継ぎ早に質問攻めを食らい呆気にとられた僕を余所（よそ）に、男は異常に興奮した様子で捲し立てて来る。鼻息も荒く、まるでAVを見ている思春期の少年の様だ。男にじわりじわりと詰め寄られ、あまりの不快感に、僕は疑心の眼差しで男を睨み付けた。

「篠田さん、依頼書の記載に不備が」

あからさまに険悪な雰囲気を滲ませる僕を見兼ねてか、ウィリアム章大が仲裁に入ってくれた。眉尻を下げ、苦笑気味の表情には、心なしか楽しげなものも見え隠れしている。

「す、すみません。つい……」

篠田と呼ばれたその男は、ハツと我に返り、申し訳なさそうに後頭部を掻きながら、及び腰で再度椅子に腰を下ろした。篠田？まさか……。

「……有り難う御座います。では、結果は此方から追ってご連絡致しますので」

「何卒（なにとぞ）……、宜しくお願いします」

ウィリアム章大は一通り書類に目を通してから、落ち着き払った

口調でそう言った。先刻の勢いは何処へやら、篠田は緊張しているのか妙に体を揺らしながら、何度か頭を下げてから立ち上がった。背後でふたりのやり取りを傍観していた僕へと向き直ると、ゾツとする程の不気味な微笑を浮かべて見せてから、その場を去って行った。後を引く様なその表情に、僕の背筋に悪寒が走る。

「篠田栄鬼、小説家だよ」

「…やつぱり」

程無くして口を開いたウィリアム章大の一言に、僕は深々と溜め息を漏らした。

篠田栄鬼と言えば、数々のベストセラーを世に送り出している有名なミステリー小説家だ。奇抜で斬新な文章力と、リアリティーに富んだ表現力の持ち主で、度々世間を賑わせている。創作者には奇人が多いと言われているが、あれ程の奇人はそうそう居ないであろう。

「まさか、今回の依頼は…」

「ご名答。はい、依頼書」

話の流れから大体の予想はしていたが、ウィリアム章大は僕の問題に満面の笑みで頷き、依頼書を差し出して来た。何と無く、憂鬱な気分である。あの篠田の依頼という事も、彼のこの愉快げな顔も、僕は書類の内容を目で追った。ターゲットは早坂真弓、出版社に務める若い女だ。

「篠田と男女間の付き合いがあった…なんて事はないよな」

正直な感想だった。ターゲットの早坂真弓は、利発そうで綺麗な顔立ちをした20代後半程の女である。それに反し、篠田は40代といった所だろうし、見た目もお世辞にも釣り合うとは思えない。出版社に務めるターゲットと、小説家のクライアントという事での接点はあるそうだが。

「彼奴（あいつ）に請けるかどうか、訊いて来てくれよ」

ウィリアム章大は窮屈そうにネクタイを緩めながら、口に啜えた煙草の先端に火を点けた。それ迄、外の凜とした清々しい空気に包

まれていた室内に、苦手な臭いが紛れ込む。僕は手早く書類を鞆に収めると、彼に一礼してから、その場を立ち去った。

僕はその足で、川崎が住処としているスラム街の地下通路へと向かった。ゴミ溜めの様なその場所を進み、かつてはカフェであった店舗跡地に入ると、L字のカウンターテーブルに据えてある椅子に腰掛け、暇を持て余している様子の彼が居た。

「依頼か」

僕の存在に気が付くと、川崎は酒焼けしたかの様な低く掠れた声で呟いた。何気無い一言にも威圧感のあるこの声は、今でも慣れない。つい全身に緊張が走る。

僕が此処に来るのは依頼があるから。それ以外に来る用事は特にないからだ。川崎とは親しい仲でもなく、業務以外の話をした事がないのである。

僕は鞆から書類を取り出して川崎の眼前に翳（かざ）して見せた。彼はそれを受け取るうとはせず、机上に肘を置き、頬杖をついて此方を見つめている。虫の居所でも悪いのだろうか。

「どうかしたのか？」

そう声を掛けると、川崎は視線を外さずに、漸（ようや）く此方へと手を伸ばして来た。しかし、その手は書類ではなく、僕を指差した。一体、何を伝えたいのだろうか。不可思議な行動に疑問を抱き、首を傾げる僕に、彼は訊ねた。

「誰だ」

川崎がそう言った途端、背後から走り去る足音が聞こえた。反射的に僕は慌ててそちらへと駆け寄り、足音のする方向へと視線を向けた。地下通路の入口目掛けて走るあの丸い背中と痩せ細った貧弱そうな体……。間違いない、篠田だ。

「待て！！」

僕は篠田を追い掛けた。尾行されていたのだ。事務所で会った時、やけにアサシンに対して興味を示していたが、まさか後を着いて来る程の好奇心を抱いていたなんて。ひ弱な体躯とは裏腹に、篠田

は逃げ足が速く、互いの距離は縮まらない。しかし、逃す訳にはいかない。クライアントであろうと他者に川崎が目撃されてしまったのだ。おまけに相手は小説家。ネタにでもされたらたまったもんじやない。僕は強迫観念にも似た衝動に駆られながら、懸命に走った。篠田が階段を上り始めた所で、僕は背後から強い力で肩を掴まれ、足止めされた。振り返ると、川崎が涼しげな無表情で立っていた。一気に疲労感が込み上げ、荒い息を吐きながら、僕はその場に座り込んだ。

「あの男は」

「今回の案件のクライアントだ」

川崎はその答えを予期していたかの様に、表情ひとつ変えずに小さく頷くと、此方に手を差し伸べて来た。

「……」

立ち上がるのを助けてくれようとしているのだろう。僕は少々驚いた。僕の中での川崎のイメージは、ひとりで勝手に立てと目もくれないのだ。それが、こうも予想に反する態度をされると、あまりのギャップに頭が着いて来れず、暫くその細く綺麗な指先を眺めるしかなかった。

「場所を移そう」

「あ、ああ……」

しかし、初めて触れた川崎の手は、予想通りの冷たさであった。

クラブミュージックが必要以上の大音量で流れ、重低音が床を揺らす地下通路の奥深く。決して広くはない空間は敢えて照明を減らし薄暗く、色とりどりのセロファンによって、妖しげな光が周囲を照らしている。此処はスラム街に住み着いた者達がクラブとして使っている場所だ。様々な年齢の男女が音楽に合わせて踊ったり、酒を酌み交わして語ったり、ドラッグでラリったり。そんな中、初めて川崎がやって来たものだから、誰もが不安に怯え、或いは無理に愉快さを取り繕い、楽しんでいるフリを見せているのが容易に感じられる。この地下通路では、彼は何故か脅威として恐れられて

いる。その禍々しい不穏なオーラを、皆が感じ取っているからかも知れない。

「篠田栄鬼なら俺も知ってる。あれだけ世間に取り沙汰されてる位だ、嫌でも情報は入って来る」

川崎は壁に凭れ、書類を見ながら抑揚のない口調で言った。

篠田栄鬼、本名は篠田耕輔。その名を轟かせる様になったのは、一昨年位からの事。それ迄は無名に近かった篠田は、その頃を境に突然ベストセラーを連発する様になった。作品はどれも発売当日に完売し、増刷が追いつかない事態が続いているとか。このご時世に小説が売れるというのは、異例の事である。名だたる地位のある小説家達も舌を巻く程だという。彼の作品を読んだ事がない僕には、全く判らないのだが。

暫く書類と向き合っていた川崎を横目に、僕はふと、こうして彼とあのカフェの店舗跡地以外で肩を並べたのは初めてだと思っていた。普段は大した会話もなく顔を合わせるだけの、謂わば第二の事務所でもあるあの場所から離れ、不思議な感覚に捕われていた。まるで社員同士のプライベートの付き合いだ。

「川崎」

「何だ」

思わず、声を掛けていた。彼は書類から目を離さずに返事をする。僕は間を取らずにこう提案した。

「良かったら、一杯どうだ？」

此処には何処から仕入れたかも判然としない多種多様な酒が充実している。遠くのバーカウンターで酒を酌み交わして楽しげに話している人々を見て思い立ったのだが、何故敢えて川崎を誘ってしまったのか、それは自分にも判らなかつた。

川崎はゆつくりと此方に視線を移した。無表情からは胸中は見透かせない。何を考えているのだろうか。暫く無言のまま互いに見つめ合っていたが、やがて彼は目を伏せ、小さく溜め息を漏らし、承諾書を差し出して来た。

「代筆しておいてくれ」

相変わらざるの表情に声色。僕の提案はすっかり聞き流されてしまった様だ。まあ、断られる事は十分承知の上で口にしたのだから、気落ちもしないが。僕が書類を受け取ると、川崎は一步前に足を踏み出した。

「これが終わったら、な」

「え……」

ゆっくりと歩き出した川崎の返事に、僕は間の抜けた声を上げた。まさか、了承してくれるだなんて思ってもみなかったのだ。

「これが終わったら」というのは、「この任務が完了したら」と捉えて良いのだろうか。その場凌ぎの発言なのかも知れない。しかし、僕は妙に胸が熱くなった。どうして川崎を飲みこみ誘ったのかは判らない。あの時、手を差し伸べて来た川崎の、僕が知らない一面を見たい。そんな好奇心からなのだろうか。

僕は川崎の背中を見送りながら、そんな事をぼんやりと考えていた。

その後、僕は暫く経ってから承諾書を持って事務所へと戻った。篠田に尾行されていた事を伝えると、ウィリアム章大は渋い顔をしながら、啗内から紫煙を吐き出した。

「やけにアサシンに関心があるかと思えば……。厄介なクライアントだな」

同感だ。ミステリー作家には興味深いネタではあるのだろうか、任務遂行の妨げにもなりかねない。最悪、それをネタにしてアサシンの存在が一般にも広く知れ渡る可能性だってあるのだ。

「彼奴は暫く、あの場所から離れる必要があるな」

そう言って此方に向けられた彼の目には、何らかの期待が込められているのはすぐに解った。チエアの背凭れに深く身を沈め、腕を組み、困った様に眉尻を下げてはいるが、何処か楽しげな表情でもある。

「此処だと他のクライアントやアサシンが来るし、況してやお前の

立場もなくなる。……俺の言いたい事、解るよな？」

要は暫く川崎を僕の自宅で匿え、という事だ。僕は独身で一人暮らしだし、男ふたりでも狭くはないから断る理由もないのだが、どうも彼に良い様に遣われているという状況は好ましくない。

「川崎が良ければ、僕は構いませんが」

「そお？じゃあ彼奴に訊いてみてよ」

まるでその答えを予期していたかの様に、ウィリアム章大は満面の笑みを浮かべ、僕の言葉の語尾に被せて返事して来た。全く、調子の良い男だ。

しかし、アサシンの存在が明るみになれば僕だってただでは済まない。そうなれば、僕だけではない、彼女もまた、どうなる事か。そう考え、僕は川崎との同居を了承していた。彼も二つ返事で了承し、今夜、一度落ち合う事にした。

公共施設街の中でも一際広い面積を持ち、医療設備も有能な医師も充実した総合病院。僕は最低でも週に一度はこの場所を訪れる。その目的は、ただひとつ。

「お兄ちゃん！」

小児科病棟の一室に、愛らしく高い声が響いた。ベッドの上で元氣そうに笑顔を浮かべている彼女は、僕の年の離れた妹だ。3ヶ月前は食事も喉を通らず、点滴と薬に頼っていた体はみるみる内に回復し、今や妹は何処にでも居る健康的な女の子になった。

両親は妹が幼い頃に他界しており、身寄りのなかつた僕達は互いが唯一の家族なのだ。

「あまり大きな声を出すと、看護師さんに怒られるぞ」

「だって、お兄ちゃんが来てくれたから」 差し入れの入った袋を手に、ベッドの脇に据えてあつたパイプ椅子に腰を下ろしながら注意すると、妹は照れた様に屈託のない笑顔を見せた。肩を越す程度の黒髪が、体の動きに応じてサラサラと靡く。白く透き通った肌にふつくらとした赤い頬と唇、優しげな瞳。兄の欲目かも知れないが、まるで絵に描いた様な可愛いその顔と、元氣そうな姿を見るだ

けで、肩に重く申し掛かる嫌な思いがスツと溶けて消えていく様な気がする。

妹は現代の医学をもつてしても治す事の出来ない難病を患っているのだ。今はこんなに元気そうにしているが、いつまた3ヶ月前の様になるのかは、誰にも判らない。それでも、惜し気もなく払っている医療費のお蔭か、何とか持ち堪えている。僕がアサシンの代理人をやっているのは、この為なのだ。

「あ、そうだ」

僕は差し入れを持って来たは良いが、飲み物を用意していなかった事に気付いた。妹が食べ物喉に詰まらせてしまいかねない。僕は妹にそれを渡してから、まだ食べない様にと釘を刺し、ひとりで売店へと向かった。良かった、今日も妹は元気そうだ。

エレベーターで一階へと下り、廊下を歩いてみると、前からやって来た人物が目にと止まった。思わず足を止め、その人物を注視する。この場所での予期せぬ出会いに、僕はきつと驚愕の表情を露にしていた事だろう。

「何をしている」まるで黒装束を身に纏っているかの様に、全身黒づくめの青年は、長い前髪から覗く切れ長の目を此方に向け、威圧的な声で訊ねて来た。見間違える筈（はず）もない。川崎だ。その場に立ち止まり、無表情で小首を傾げている。

「妹の見舞いに」

特に疚（やま）しい事がある訳でもないのに、僕は妙によそよそしく答えていた。先程の予想外な展開に、まだ頭が追いついていないのだろう。川崎は「ああ」と納得した様に軽く数回頷くと、また何処かに向かうべく歩き出す。

「川崎は、何を？」

擦れ違い様に訊くと、川崎は足を止め、此方を見た。彼は僕よりホンの少し背が低い為、必然的に上目遣いになるのだが、近くで見ても綺麗過ぎて怖くなる顔付きだ。彼が此処に居るといふ事は、彼もまた身内や友人の見舞いに来たのだろうか。或いは、彼自身が診

察に……。

「仕事だ」

「……あ、そう」

しかし、川崎は淡白な口調で僕の予想とは裏腹な答えをくれた。彼らしいと言えば、そうなのだが。僕は間の抜けた声で相槌してから、「用が済んだら、ロビーで待ってる」。

「ああ」

どうせ行く先は同じなのだ。一緒に帰宅すれば良い。川崎は低い声で返事してから、また歩き始め、僕も売店へと急いだ。

妹と差し入れたケーキを食べ、手短かに話をしてから人を待たせていると言って早々に別れを告げた。

「お休みなさい」

寂しげにそう言った妹の方が眠そうであった。

ロビーに向かうと、既に川崎が正面玄関の前で待っていた。互いに言葉を交わす事もなくタクシーに乗り込み、住宅街へと向かう。川崎は窓の外の景色をぼんやりと眺めていた。何を思っているのか、その表情からは窺い知れない。僕は特に沈黙を苦とは思わないが、タクシーの運転手の気持ちを考えると、少し申し訳ない。頻（しき）りに此方へと話題を振ってはくれるものの、川崎は気のない返事だけで自滅しているその人を見ると、何ともいたたまれない気分になった。

僕達は15分程で自宅の高層マンションへと辿り着いた。オートロック式のエントランスを抜け、エレベーターで上階に向かい、奥の角部屋へと歩く。2LDKの広々としたマンションの一室は、いずれは退院した妹と暮らす為に探した物件だ。その為、食器等の日用品は既にふたり分を用意しているのだが、一人暮らしで最近は何事もコンビニ弁当で済ませるせいで使用頻度は皆無に等しかった。

先に川崎を通してから玄関のドアを施錠すると、僕は靴を脱いでクッションフロアを歩いてリビングへと向かった。途中スーパーで買い出しした食材の入った袋を手に、リビングの電気を点けた。煌

々とした明かりが殺風景な室内を照らし出す。今日は徒歩での移動が多かった上に、篠田のせいでかなり疲れてしまった。僕は少し休憩するつもりで鞆と袋を床に置き、まずはソファに身を沈めた。しかし、これがまずかった。一気に疲労感が全身を駆け巡り、睡魔が襲い掛かって来た。来客が居るというのに、僕の体は意思に反して動く事を拒んでしまったのだ。

「おい、……」

川崎が何か聞き慣れない単語を発していたが、僕は聞き返す気力もなく、そのまま深い眠りに落ちていた。

目を覚ました時には、もう翌日の夕方であった。西陽がカーテン越しに室内を赤々と染め上げ、何処か遠くから時刻を報せる鐘の音が微かに聞こえる。随分と眠っていたな。着ていたYシャツが、ウイリアム章大の私服の様に皺だらけになってしまっている。

「……ん？」

朦朧としていた意識が現実へと視点が戻っていくにつれて、僕は昨日の記憶を振り返り首を傾げた。

僕は自室のベッドに横になっていた。確か昨日は帰宅して、そのままソファで眠ってしまった筈だが。まさか、川崎が運んでくれたのだろうか。スーツのジャケットはハンガーに吊るされ、壁のフックに掛けてあった。

僕はベッドから起き上がり、リビングへと向かった。どうやら川崎は外出中の様だ。代わりに、ダイニングテーブルには昨日はなかった物が置かれていた。歪な形をした目玉焼きともスクランブルエッグとも見分けのつかない（有り得ない事だが、本当に判断に苦しむのだ）玉子料理に、所々焦げて如何にも固そうなベーコンの乗った皿。大小様々な具材の入った味噌汁と、明らかに水分量を間違えて粥の様になった米の入った椀が、ラップを掛けてあった。

「……」

正直、見映えは酷く悪い。終（つい）ぞ料理なんてした事のない人間が作ったものだという事は一目瞭然である。しかし、不器用な

がらもこれを川崎が作ってくれたという事実には僕は驚き、感激した。きつと、疲れて眠ってしまった僕の為に用意してくれたのだろう。彼にはこんな意外な優しい一面があったのだ。

僕は素朴とも言い難い川崎の手料理に口を付けた。料理は見た目じゃないとは言うものの、これは一切味付けがされていなかった。味付けの仕方が判らなかつたのか、或いは好きに味付けしてくれという意味合いなのかは判然としないが、やはり料理は見た目じゃない、気持ちだと言いつ聞かせ、それを平らげた。まあ、見た目や味はどうあれ、腹は膨れるのには変わらない。

すっかり目が覚めた所で、僕はルームウェアに着替え、顔を洗うと、昨日は出来なかつた分、川崎をもてなす準備に取り掛かった。もてなしといつても、大した事ではないのだが。手料理を振る舞うなんて声を大にして言える程、腕に自信がある訳でもレパートリーが豊富な訳でもない。それでも、川崎よりはまだまだまともなものが作れるとは自負出来る（相手のレベルが低すぎるが）。僕は着々と家事をこなしてから、キッチンに立った。料理なんて、どの位やつてなかつたかな。況してや誰かの為に、料理を作るだなんて。

ダイニングテーブルを埋め尽くす程の沢山の料理が出来上がった頃、川崎がタイミング良く帰って来た。リビングのドアを開けるや、この光景を目にして面食らっている様だ。

「お帰り」

努めて平常心を保ちながら声を掛けると、川崎は居心地悪そうに爪で頬を軽く掻きながら視線を逸らし、着ていたコートを脱いだ。

「あ、有り難う。ベッドに運んでくれただろ？飯も用意してくれてたし」

「礼を言われる様な事はしてない」

何ともぎこちない、まるで思春期の息子と父親の会話（飽く迄想像だが）に、その場の空気が次第に重くなる。川崎はソファの背凭れにコートを置くと、此方へと歩み寄り料理を一つ一つ眺めている。何とかその空気を払拭しようと、取り敢えずは食事を摂る事にした。

ダイニングテーブルに向かい合って座り、川崎が作ってくれた料理を食べていた僕は軽く摘まむ程度で、彼の動向を見守っていた。食の好み判らない為、取り敢えず和食を並べてみたのだが、彼は何一つ言わずに、手近な物から黙々と口に運んでいる。かなり腹を空かせていたのか、そのペースが早い。単に早食いなのかも知れないが、見る間に皿が空いていくのだ。肉じゃが、煮物、焼き魚、酢の物、味噌汁、白米……。念の為に多めに作っておいたのだが、それらはあるだけ川崎の胃袋に収められていった。その細い体の何処にそれだけのものが入るスペースがあるのかと疑問を抱く程だ。凄まじい程の食欲に呆気にとられ、僕は目を丸くし、口をポカンと半開きにして、その様を傍観していた。そうして全ての料理を平らげると、（相変わらずの無表情だが）川崎は満足げに膨れた腹を擦り、溜め息を吐いた。そして、再び沈黙がふたりに訪れる。

作った側としては面白くない。安いバイキングレストラン並みの「質より量」感覚で作った訳ではないのだ。川崎への感謝の気持ちを含めて、一心に作ったのに、彼は無表情で食べ尽くしたのだ。美味いのか不味いのか、全く判然としない。彼は質に拘（こだわ）らず、ただ胃袋に入れば良いという感覚の持ち主なのだろうか。何だか悲しい気分になって来た。

「久しくなかつたな」

「え？」

突然、川崎が感慨深そうな溜め息を漏らしながら呟いた。頓狂な声で返すと、彼は空になった皿を指差しながら、言葉を次いだ。

「手料理。ホントにアンタがこれを？」

「ま、まあ……」

「前職はシェフか？」

その質問だけで、どれだけ川崎の舌を唸らせる事が出来たのか、おおよその見当がついた。直接「美味しい」と言っている訳ではないが、言葉のニュアンスからそう感じ取れる。不味ければ不味いと面と向かって言う相手でもなさそうだが、間接的な言い回しで評価し

てくれている様だ。それは素直に嬉しかった。

「否、料理は昔からやってたんだ。親が早くに死んでるから」

その反動からか、僕は何の躊躇いもなく川崎に自身の素性を話して聞かせていた。妹が幼い頃に両親が他界してから、生まれながらに病弱な妹の看病をする傍ら、躍起になって仕事をしていった事。交通事故で入院し、以前勤めていた会社をクビにされた事。今の仕事のお蔭で妹の容体は快方に向かっている事。もう受け入れる他ない自身の過去だ。今更振り返ってみても、特別感情的になる事もない。まるで小説を読む様な、他人事の様な口振りで、僕はそれを打ち明けた。川崎はただ、目を伏せ、相槌を打つでもなく無言で聞いていた。

全て話し終えた頃には、食後の珈琲が入った。熱い珈琲を啜りながら、ふたりを包む空気が以前とは違う様な気がしていた。重苦しいものが少しだけ軽減された様な感覚である。ひとつ殻を破り、一歩互いに近付いたのかも知れない。

自身の事を話した以上、やはり川崎の素性が気になった。何処で生まれ、どんな環境で育ち、どういう経緯でアサシンになったのか。少し前の僕なら、そんな事は知りたくもなかった。人殺しの素性なんて、聞く気にもならなかった。業務以外での関わり合いは御免被（ごうむ）りたかった。僕の気持ちを変えたのは、川崎の内に見え隠れする普通の人間らしさに他ならないのだ。

川崎に期待の眼差しを注いでいると、彼は此方に視線を向け、僕の胸中を探っている様であった。彼と違い、僕の感情は手に取る様に見抜かれているのだろう。暫く互いに見つめ合っていたが、やがて川崎がパンツのポケットに手を突っ込み、中をまさぐり始めた。引き抜いた手には、パソコン用のメモリースティック。何を以てそれを取り出したのだろうか。僕は状況が読み込めず、眉を寄せ、首を傾げた。この中に、川崎に関する情報が詰め込まれているとでもいうのか。

後片付けを済ませてから、僕達はソファに肩を並べて腰掛け、口

ーテーブルの上にノートパソコンを置いて起動させた後、メモリースティックを挿入した。中には大量のテキストファイルが保存されている。川崎はその中からひとつを選び、見せてくれた。

「これは…」

僕はパソコンの画面を覗き込み、啞然とした。それは川崎ではなく、今回の依頼のターゲットである早坂真弓に関する情報であった。早坂は富裕層の家庭に育ち、名門大学を卒業後、今の会社に就職。社交的で人当たりが良く真面目な性格から、彼女を慕う人も多い。仕事への意識が高く、入社して僅か3年で主任に昇格。一応、恋人は居ない様だ。

彼女は一年程前から、篠田からしつこく交際を迫られているらしい。今や次々とベストセラーを生み出す彼の要求にハッキリと断る事も出来ず、何度か一緒に食事をする程度で、適度な距離感を保っていた。

しかし、3ヶ月前、篠田に無理矢理押し倒されそうになった時に、キツパリと交際を拒否したという。以来、何事もなく平穏な日々を送っていると、その情報は締め括られている。もし仮にその事がきっかけで篠田が逆上して、早坂の殺害を依頼したとなれば、何とも筋違いな話である。他にも彼女の学歴や身内、友人関係といった情報が事細かに記載されている。

「こんな大量な情報、一体何処から…」

これは僕の勝手なイメージだが、早坂はあまり自身の素性を周囲に話す様な性格ではなさそうだ。況してや篠田の話題に関しては特に職場関係や仕事面での影響を及ぼすのは必至。まさか、当人から直接訊いた訳があるまい。

「中にはチップを渡せば口を割る身近な人間も居る。基本的には足で情報を得るが、ターゲットは相当に秘密主義らしく、生い立ち程度しか得られなかった」

「じゃあ、どうやって…」

僕がそう訊ねると、今度はインターネットに接続し、検索サイト

を通じて紫で統一されたシンプルなブログを見せてくれた。

「これは？」

「ターゲットが管理してるブログだ」

「ホントに？」

「紫が好きな事はターゲットの同期から聞いた。記事を読めば、登場する人物や会社名は伏せていても、大体は判断出来る。その上……」

川崎はそのページ内のプロフィールにリンクした。ブログの管理人の情報が画面に映し出される。彼は続けた。

「ターゲットは東北出身、訛りや方言は未だに抜けてない。普段もそうだが、ブログでも方言が多く遣われてる」

確かに、記事には東北地方の方言が随所で遣われているし、プロフィールの職業の欄にも、出版社の編集部所属と記されている。

しかし、信憑性には少し欠ける。出版社に勤める東北出身の女はひとりとは限らない。好きな色だって、誰とも被らないのも不思議な位だ。これは川崎の憶測に過ぎないのだが、彼は確実視しているのだ。そういった意味では、川崎はかなりの自信家だと僕は思う。

まあ彼の場合、実績が物語る程の並外れた頭脳を持ち合わせているのだから、単なる勘で片付けられるものではない。

「アンタ、篠田の小説を読んだ事はあるか？」

「え……」

唐突にそう訊かれ、僕は面食らった。実はというと、僕は作り話がどうも苦手で、ミステリーに限らず本当にフィクションの小説を読んだ事がないのだ。

「僕はエッセイやコラムが好きだから、それ以外は全く……」

何と無く悪い気がして肩を竦め、上目遣いで川崎を見つめて弁解した。彼は気にするでもなく、背凭れに深く身を沈め、肘掛けに肘を付けて空（くう）を見つめた。「篠田の最新作はネクロフィリア（屍体愛）がテーマで、意中の女を殺し、己の私欲の為に腐る迄屍姦を繰り返す男の話だ」粗筋を聞いただけでも、背筋に悪寒が走る。フィクションとはいえ、私欲の為に女を殺し、強姦するだなん

て。現にそんな男が居たら（実際居るからそういう者達を総称する単語が生まれたのは言う迄もないのだが）、重大な精神異常者だ。流石に僕は友達になれそうもない。

「良くそんな本を読む気になつたな」

僕は少々川崎の神経を非難し、皮肉を込めてそう言った。何かと突つ慳貪な態度で返して来るかと思つたが、彼は考え込む様に目を伏せ、暫く黙り込んでしまった。僕は焦つた。もしかしたら単なる好奇心ではなく、任務遂行の為の情報収集の一環として篠田の作品を読んだだけかも知れないのだ。それを無神経にも咎め立てた事で、シヨックを受けたのだろうか。はたまた、彼にも人には到底理解に苦しむ性癖でもあるのだろうか。僕はあらゆる不安に駆られ、いても立つてもいられない感覚に囚われた。

「中々、表現力に富んだ文を書くと思つた」

やがて、川崎は自ら作り上げた沈黙を裂いて呟いた。僕の不安を余所に、そんな真面目に小説の感想を述べられてもと呆れてしまいそうになつたが、どうやらそうではないらしい。彼は力強い眼差しを此方に向け、薄く唇を開いた。

「読めば解る。本当に素晴らしい表現力だ。あたかも、自らの体験談を綴っているかの様に、だ」

「……何が言いたい？」

川崎の意味深な発言に、僕は戦慄を覚えた。聞き返さずにはいらなかつた。言いたい事は解る。しかし、それを受け入れるだけの許容は、僕にはなかつた。もし仮に、僕の推測が正しければ、それはあまりにも恐ろしいのだ。彼の口から聞いたかつた。彼の予想する展開を、彼の言葉で。

怪訝な表情を浮かべ、懇願する僕に、川崎は澄ました様な顔で、こう返して来た。

「エッセイが好きなら、読むと良い」

早坂のブログを最初から読み返してみると、確かに記事には彼女の生い立ちや現状と合致された点が多く見受けられた。名は伏せて

いるものの、篠田から告白された事や襲われそうになった事も取り上げられ、沈痛な胸の内が綴られていた。周囲に弱音を吐く事のなかった彼女にとって、このブログは自身の心の捌け口として利用しているのだろう。まあ、正直な所、僕が女でも篠田に告白されたらノーと即答してしまうだろうな。職業柄、小説のネタになりそうな物事に於ける好奇心の強さは仕事意識の強さとして評価してやりたい所ではある。しかし、そういった時の彼は、他人に対する配慮に欠ける。僕と初めて顔を合わせた時がそうだ。その一面しか見ていない僕としては、そういった対象としてではなく、人間的な面に於いても信頼出来ないのだ。

早坂のブログの記事に一通り目を通してから、僕はある一点に着目した。辞職する社員の多さだ。2年の間に26人も社員が辞職しているのだ。早坂の勤めている出版社はその業界ではトップクラスの有名な会社らしく、それなりに社員数も多いのだろうが、2年の間でこんなに社員が辞職する会社も珍しいのではなからうか。この不況で就職難に苦しむ人々が増加する一方で、辞めたにしても行く宛てなど何処にあるうか。規則の厳しさや労基法を裕に無視した業務内容、或いは一身上の都合とはいえ、このご時世に就職出来た事だけでも有り難く思ふべきではないのだろうか。その疑問が特に意味を持ったものではないにしろ、何と無く気になっていたのだ。

「へえ、あの川崎がねえ」

ウィリアム章大は、我が子の成長に感慨無量といった様子で、微笑ましげに頷いて見せた。説明せずともお分かりだろうが、我が子といっても彼と川崎が親子関係にある訳ではない。自らアサシンの育成にも力を注いでいる彼にとっては我が子同然の見解なのだろう。僕にはもうひとつ、気になる事があった。川崎が自ら任務にあたる迄の手口を教えてくれた事だ。今迄は、たったひとりで任務をこなし、その術(すべ)は謎であった。僕はてっきり依頼を請けたらターゲットを殺害するタイミングを見計らい、ただそうするものだ

と思っていた。しかし実際は、それに至る迄にターゲットの情報を集め、それを基に綿密な作戦を立て、事に及んでいたのだ。思えば突発的な行動だけで、手際の良いやり方は出来ないだろうな。

しかし、何故今となってそんな事をしてくれたのか、僕には解らなかつた。秘密主義というイメージの強い川崎だけに、いくら代理人の僕であつても今迄は大した会話も交わさなかつた仲なのに。ウイリアム章大の感激した様子からして、昨夜の川崎の行動はまさに異例なのだろう事は窺えた。

昨夜は結局、川崎の素性を訊ける雰囲気ではなくなり、互いにそのまま就寝した。今朝目覚めた時には、既に彼の姿は何処にも見当たらなかつた。どういう訳か焦燥感にも似た不可解な感覚に囚われた僕は、こうしてあの嫌な煙草の臭いを我慢し、ウイリアム章大の元を訪ねたのであつた。

「お前はこつちの人間だから、知つてても良いんだけどな。全く、彼奴は何を考へてるのやら、未だに掴めないな」

デスクに腰掛け、ウイリアム章大は困つた様に眉尻を下げ、苦笑いしながら、啞内から紫煙を吐き出した。彼に解らないのなら、僕には尚更解らない事だ。仮に互いに距離が縮まつた、と考へてはおきたいのだが。

その時、室外からドアをノックする音が数回聞こえた。来客だろうか。僕が窓際のソファに身を沈めたのを確認してから、ウイリアム章大はドアの向こうの人物に入室を促す。すると、開いたドアの隙間から顔を覗かせたのは、怪しげな眼光を放ち、陰湿な笑みを浮かべる貧弱そうな体軀をした、篠田であつた。

「どうも……。その、依頼の進行状況は如何なものかと思ひましてね」篠田は後ろ手にドアを閉めると、背中を丸め、膝をやや折り曲げた格好でウイリアム章大の方へと歩み寄る。一昨日は来客をもてなすに相応しい身形（みなり）に空間であつたが、今回は普段通りのむさ苦しい姿に煙草の臭いが充満した室内。しかし、篠田はそんな事はお構い無しといった様子で、背筋を凍らせる程の憎々しげな笑

みを見せている。

「結果は此方からご連絡を差し上げると申した筈ですが」

対応するウィリアム章大は人当たりの良い柔和な表情と口調でそう返しはしたが、その目は川崎とも引けを取らない脅威的なものを感じさせる。彼を疎ましく思っているであろう事は、それを見れば一目瞭然だ。「そ、そうですよね。否、あのう……。あ！」

ウィリアム章大の眼差しに腰が引けたのか、明らかに怯えた様子で居心地悪そうに次ぐ言葉を探しながら視線を泳がせていた篠田は、僕の存在に気が付くと、目を剥き、大きく口を開け、驚愕した表情を浮かべた。僕は一昨日の彼の悪態を思い浮かべ、顔をしかめ、その様を見据えた。

「いや、あの時はどうも、とんだ無礼を」

篠田は途端に顔中に皺を深く刻み、媚びる様な笑みを浮かべた。両の掌を擦り合わせ、何度か頭を軽く下げながら、此方に近付いて来る。彼に尾行をした事に対する謝意は見受けられなかった。ウィリアム章大とのやり取りに逃げ場を見つけ、安堵している様である。僕としては迷惑極まりない。

「何か？」

僕はあからさまに敵意を示しながら素っ気なく訊ねると、篠田はシヨルダーバッグからメモ帳とボールペンを取り出し、僕の眼前へと立ちはだかった。前述の通り、人の表情や雰囲気を感じ取り身を引く様な配慮が全くない。

「実は、次回作はアサシンを題材に小説を書こうと思ってましてね。少しばかりご協力願いたいのですが……」

何て傲慢な奴だ。僕に憎悪の念を抱かせ、尾行し、そしてこの期に及んで自分の手掛ける作品に協力を求めるだなんて。見掛けによらず、中々に図太い神経の持ち主である。先刻迄ウィリアム章大の脅威的な眼差しに臆していたにも関わらず、今は僕達から注がれる白眼視にも怯む様子もない。単にあまりにも鈍感で、気付いていないだけか。

「一昨日、一緒に地下通路に居た方がアサシンなんですよね？ちょっと顔の方がうる覚えでして…。ほら、何せ彼処は薄暗いでしょう？宜しければ詳しく教えて頂けませんか？」

篠田の目が、好奇心により一層大きくなり、怪しい光を放つ。妙に馴れ馴れしく間延びした口調が、此方の神経を逆撫でする。

無論、答えるつもりはない。アサシンの存在を世に知らしめる訳にもいかないし、況してやこんな危険度の高い非常識な奴に、川崎の料理の下手さだって教えたくもない。下手（したて）に出た所で潔く引き下がる相手ではないのだ。

「話す事はない。用が済んだら帰れ」

僕は険悪な雰囲気を滲ませ、感情のままに冷淡な口調で返しながら、篠田を睨み付けた。しかし、そんな事ですぐに退く様な男ではない。

「そこを何とか！フィクションって事にしておきますし、他言は一切しません。ですから、ね？お願いしますよ」

篠田は声を上げ、自身の胸元でパシッッと小気味良い音を立てて両手を合わせ、尚も食い下がって来る。悪びれた様子は微塵も感じられない。その態度に、僕は込み上げる怒りを遂に爆発させる寸前だった。

「篠田さん、憶えてますか？」

そこへ僕達の動向を傍観していたウィリアム章大が、漸く口を開いた。その目は冷然と篠田を捉え、口許の笑みはなく、僕でさえゾッと鳥肌の立つ様な戦慄を覚える顔付きであった。しかし、篠田はそんな彼の表情から窺える胸中にも気付かずに、陰湿な笑みのまま「え？」と訊き返した。

ウィリアム章大はデスクの引き出しから一枚の書類を抜き取ると、静かに机の上に置きながら続けた。

「先日、サインを頂いた合意書です。此処に弊社及び当案件に関する一切の情報の漏洩を禁ずるとあり、それに同意されましたよね」「えっ……」

篠田は慌てた素振りを見せてウイリアム章大の方へと駆け寄り、書類を手にとって合意書の内容を目で追った。再確認する迄もなくそれがクライアントとして最低限は厳守すべき事と判らないのだろうか。困惑した表情を浮かべ、僕達の顔色を交互に眺めながら、篠田は何か言いたげに何度も口を開閉させている。しかし、弁解の余地もない様である。居るんだよな、内容を確認しないで適当にサインして、後から聞いてないなんて文句を言い出す奴。彼は寧ろ言葉も浮かばない様子だ。

「万一、貴方が出した作品によって弊社やアサシンの存在が明るみになり、公的措置が取られてしまえば……貴方が弊社に殺害を依頼した事も公になってしまふ恐れだつてある。最悪、自分で自分の首を絞める事になりかねませんよ？」

尤（もつと）もらしいウイリアム章大の言い分に、篠田の顔が見る間に青褪めていく。額には脂汗が滲み、眼球が零れ落ちそうな程に目を剥き、齒をガタガタと鳴らし、全身を震わせ、今にも失神してしまいそうである。流石にそれは危惧してしまった。何せあんな貧弱そうな体付きなのだ。

アサシンや仲介業の存在が明るみになる、イコール、クライアントの素性も明るみになるという事だ。金で物を言わせて罪を軽く出されても、篠田のファンや世間からの信頼や人気は、金ではどうする事も出来ない。彼はそういう点に迄は頭が回らなかったのだろう。

「勿論、依頼は遂行させます。しかし、これ以上の介入はご遠慮願いたい。解りますね？貴方の進退にも大きな影響を及ぼす羽目になりますよ」

有無を言わせぬ厳然とした口調に、篠田はすっかり憔悴しきった表情を浮かべ、逃げる様にその場を立ち去って行った。嵐の去った室内には、少しの沈黙が訪れる。

全く、厄介なクライアントだ。もう少し目先よりも後先に視野を広げて行動して貰いたいものだ。まあ、篠田もウイリアム章大の忠告を重く受け止め、これ以上は下手な真似はして来ないものと願う

たい。僕は窓を開け、怒りで熱くなつた体に、新鮮な外の空気を当てた。室内にこもっていた煙草の不快な臭いも徐々に外へと飛び出していく。

「川崎には、今回の案件を是が非でも早急（さつきゅう）に片付けて欲しいもんだな」

ウィリアム章大はチェアの背凭れに深く体を沈めながら、大袈裟に溜め息を吐いて見せる。川崎やターゲットには悪いが、その意見には同感だ。

彼が机上の煙草を持ち上げ、一本を口に啞えたその時、再びドアを叩く音がした。先程よりも弱々しく感じたその音に、また性懲りもなく篠田が戻って来たのではないかと、僕はそちらを注視した。

「……どうぞ」

ウィリアム章大も同じ考えのようで、気乗りしないと云った間延びした口調で一声掛けると、ドアが控えめに開いた。あの憎々しい顔を再び拝む事になるのかと、内心ウンザリしていたが、それは違った。姿を現したのは女である。しかも、その顔には見覚えがあった。白いストラ이프柄が入った黒のリクルートスーツに身を包んだ、シヨートヘアの利発そうな若い女であった。面と向かつて会うのは初めてである。ターゲットの、早坂真弓だ。彼女は静かにドアを閉めると、緊張した様子で姿勢を正し、此方に会釈して見せた。ウィリアム章大に促され、デスクの前にある椅子に腰を下ろすも、落ち着かない様子だ。此方に向けられる視線には、警戒心が見て取れる。

「どうなさいました？」

まるで診察する医師の様な言い回しをするウィリアム章大も、突然の事態に僅かながらも動揺している様である。胸中を探る様な目付きで早坂を見つめている。

「あの……」

何とも弱々しい声である。早坂の容姿から想像するものと違うそれに、よそよそしさが窺える。

「先程、此方に篠田栄鬼が伺ったかと思いましたが……」

その言葉に、僕とウィリアム章大は驚きを隠せずに目を見合わせた。

「恐れ入りますが、此処が如何なる場であるかはご存知ですか？」
彼が訝しげに、しかし紳士的な物腰の柔らかさで問い掛けると、早坂は困った様に眉尻を下げ、目を伏せた。

「篠田が伺ったとなれば……、アサシンに殺害の依頼を請け負う場かと」

僕は驚愕した。早坂は、篠田が此処を訪れ、依頼をした事を知っていたのだ。何故？まさかクライアント自らターゲットに直々に告げたとも言うのだろうか。そして、依頼の取り下げを……？考えられなくもない話ではあるが、だとしたら彼女ひとりではどうする事も出来ない事態である。

「アサシンという存在は何度か耳にしましたけど、この場の所在が判らず、篠田の後を追って辿り着きました」

早坂は一句一句を噛み締める様に、丁寧な口調で言った。気品のある柔らかい声だが、緊張から少し上擦っている。ウィリアム章大は何かを察したかの様に眼前の彼女を見つめている。

「…ご用件を、お伺いします」

早坂が依頼についてどの辺迄を把握しているかは判然としないだけに、此方から下手に話を進める訳にはいかない。ウィリアム章大に発言を促され、早坂は暫くスカートの裾を握り締め、押し黙っていたが、やがて意を決した様に顔を上げ、真剣な眼差しで、唇を開いた。

「篠田の殺害依頼？」

自宅のリビングのソファにゆったりと身を沈め、淹れ立ての熱い珈琲を一口啜ってから、川崎は対峙して床に腰を下ろした僕の言葉に動揺するでもなく問い返した。僕はその話を聞いて思わず腰を抜かしかけたというのに、彼の落ち着き払った様子に、混乱していた頭も、徐々に冷静さを取り戻す。

「ああ、これがその案件の書類だ」

鞆から数枚の書類を取り出して川崎に差し出すと、彼は空いている方の手を伸ばしてそれを受け取り、無表情で内容を目で追い始めた。

早坂が事務所を訪れた理由、それは篠田の殺害依頼であった。

「篠田栄鬼の、殺害を依頼に…参りました」

緊張感に声を震わせながらも、早坂は力強い口調でそう言った。異例の事態だ。ターゲットがクライアントの殺害依頼を出すなんて前例にない。僕は驚いて彼女を凝視した。ウィリアム章大は眉間に皺を寄せ、身を乗り出した。

「篠田栄鬼というと、今や飛ぶ鳥を落とす勢いで人気急上昇中の有名なミステリー作家ですよ」

「ええ。彼の作品は全て私の勤める出版社から出しています」

「彼のような素晴らしい功績を讃える逸材の喪失は、貴社にとってマインナスを生む事になりかねないかと思うのですが」

ウィリアム章大は単純にクライアントからの依頼を請け負う訳ではない。どういった経緯で考えるに至ったのか、それにより今後生じ得る事態を想定し、本当にそれを実行しても良いのか。クライアントの話聞き、そういった部分にも視野を当てていく。他の仲介業にはこういった事が殆どなく、どんな理由であれさっさと依頼を請ける場合が多いという。その点では感心する。後は駄目だが。

「確かに、弊社としては得ではありません。ですが、私はもうこれ以上の犠牲を払って迄、彼の名声も、会社の存続も守りたくない！」

早坂は感情的になり、声を上げた。胸につかえていた怒りや憤りが言葉と共に吐き出された様だ。眉間に縦皺を刻み、唇を噛み締め、スカート裾を握っていた手には更なる力が加わっている。

犠牲を払って？一体、どういう事なのだろう。ウィリアム章大も同じ疑問を抱いたらしく、

「と、言いますと？」

と、質問を投げ掛けてみた。

昂る感情を抑えようと、胸元に手を当て、呼吸を整えてから、早坂は重々しく口を開いた。

「篠田の作品は、よりリアリティーのある表現力を求め、内容とほぼ同じ行動を取って文章を書き上げていきました」

「……、まさか……」

ハツとして僕は声をあげると、早坂は顔を強張らせ、小さく頷いた。

「彼の作品は、謂わばノンフィクションなんです」

「何て事だ……」

まるで川崎が昨夜言っていた事と同じだ。篠田がネクロフィリアをテーマに手掛けた最新作も、現実に起きてしまった事だったのだ。僕の背筋に冷たいものが走った。早坂は一度間を置いてから、話を続けた。

「篠田の作品が売れ出す前、弊社は経営危機に陥り、存続が危ぶまれておりました。今、弊社が危機を脱し急成長を遂げたのには、篠田のある計画があります。私達は……、会社ぐるみで彼の罪を黙認して来たんです」

流石にウィリアム章大も口を半開きにして呆気を取られ早坂の話聞いていた。掛けてやる言葉も浮かばないといった様子である。狂気の創作意欲で殺人を繰り返し、作品を作り出して来た篠田。その様を見て見ぬフリでいた会社。信じ難い事実ではあるが、彼女が嘘を言っている風でもない。目には涙を溜め、苦悶の表情を浮かべる姿に、今迄誰に打ち明ける事も出来ず、独り罪悪感を抱えて来たのだろう。一度言葉を切ると、ついに溜めていた涙が頬を伝う。

「篠田は弊社の社員から手を掛けていきました。元々、人件費を削減する為にリストラを考えていた所にその話を上の者に持ち掛け、以来……弊社は実質、篠田が権力を握る事になりました」

苦肉の策、とでも言うのか。僕は早坂のブログを読んで気になっていた辞職する社員の多さが、こんな形で説明するだなんて思っ

もいなかった。晴れて恐るべき会社から出られた者も居れば、会社の存続の為に犠牲になった者も居るのだろう。早坂の涙には、そういった者への償い切れぬ自責の念も含まれていたに違いない。

「もう、これで最後にしたい」

「…最後？」

すかさず僕が訊ねると、早坂は此方に視線を移し、悲しげに微笑んだ。

「篠田は、私の殺害を依頼している筈です。本人から聞いてます」
「…！！」

知っていたのか。しかも、直接クライアントから。だとしたら、逆に何故ターゲットが此処へとやって来たのか。自身の殺害を依頼された腹いせとでも言うのだろうか。寧ろ、何処かに身を潜めていた方が良さそうなものだが、きつと川崎を相手に無謀ではあるか。

「篠田は、次回作にアサシンをテーマに持ち掛けて来ました。それを聞いて私、これで終わらせなければと、自ら名乗り出たんです」
早坂は胸ポケットからハンカチを取り出し、涙を拭った。胸が締め付けられる思いだった。己の身を犠牲にして、篠田と会社の罪をこれ以上重ねまいと、たった独りで決意したのだろう。その意志の強さが瞳に宿っている。

「しかし、クライアントから依頼の取り下げがない以上、此方も依頼を遂行せざるを得ません」

「解つてます。覚悟は出来てます。篠田が依頼を取り下げるとは考えられませんし、私も…生きて償える罪だとは思ってませんから」

沈痛な面持ちで確認の為に告げたウィリアム章大を見つめ、早坂は此方が驚く程に敢然とした態度で、そう断言した。

手短に事の経緯を聞いた川崎は、書類を手にしたまま細く長い溜め息を吐いた。何を思ったか、その無表情からは窺い知れない。彼と僕との感情の激しい温度差に、予測すら出来ずに、僕は正面から彼をただ見つめていた。

「請けるだろう？これ…」

重苦しい沈黙に耐え兼ね、僕は口火を切った。加えて、川崎が一度も依頼を断った事がないから、訊く迄もないとは思っていた。彼は暫く瞼を閉じ黙考していたが、やがて僕達の前に鎮座するローテーブルに承諾書に乗せると、此方に掌を上腕に腕を伸ばして来た。

「…何」

「ペン」

「……」

それ位、自分で取れよ。僕は召し使いじゃないんだぞ。

内心そう毒付きながらも、声に出すのは怖い為、僕は素直にボールペンを手渡した。が、すぐにはサインせず、僕の顔を覗き込んで来た。

「篠田には、俺達へのこれ以上の関与を禁じたんだな」

「ああ。恐らく、もう接触しては来ないだろうな」

唐突な質問に、僕は面食らいながらもそう答えた。川崎も小さく頷いて見せる。

「奴が次回作のテーマをアサシンとしている。毎回テーマに沿って殺人を繰り返して来たとなれば、奴も此方の動向を追求したい訳だ」

確かに、篠田はリアリティーに富んだ文章が売りだし、それを構成する為に数々の人をその手に掛けて来たのだ。彼が此方から釘を刺してやったとはいえ、テーマを変更しない限りそれが叶わない。まあ、当人だつて川崎によって殺される訳だから、そんな心配をするだけ無駄というものだが。川崎は承諾書にサインを終えてから、空を見つめ呟いた。

「今回は、アンタにも協力して貰おうか」

「え？」

間の抜けた声で返すと、川崎はいつになく真剣な眼差しで僕を捉えた。

3日後、僕は早坂と共に篠田の自宅を訪ねる事となった。かの有名な作家とあって、どんな贅沢な暮らしをしているのかと思えば、

やって来たのは郊外にある築年数も相当に古い平屋の前であつた。

僕は彼女の背後からそれを愕然と眺めていた。てつきり高級住宅街のマンションの一室、或いは持ち家なんかで、セキユリテイもかなり厳しい優雅な生活を送っているものかと……。否、とても失礼だが、あの篠田にはこつちの方が断然似合っているのだが。一応、何かの間違いではないかと早坂に訊いてはみるも、此処ですと断言されてしまった。

「あの……」

早坂は此方を振り返り、鞆の中から茶封筒を取り出し、僕に差し出した。

「弊社の告発文です。事が済んだら、お願い出来ますか？」

そう言う早坂の目には、大きな決意を胸に毅然とした力強さが窺えた。これが、死を覚悟した人間の目付きなのだろうか。僕には全く理解出来ない。ただ、彼女の意志を決して無駄にはしたくない。

僕は封筒を受け取り力強く頷いて見せると、彼女はぎこちない笑みを浮かべた。

アサシンの業務を書類の受け渡し以外に手伝うのは今回が初めての事であつた。今迄味わつた事のない緊張感が全身を駆け巡る。手順を誤れば、任務遂行に悪影響を及ぼしかねない、重大な役目だ。

僕は深呼吸をして気持ちを落ち着かせた。大丈夫、言われた通りの事をすれば良いのだ。

僕は意を決し、家のインターホンを押した。暫くして、立て付けの悪い引き戸がガタガタと音を立てながら開き、隙間から篠田の嬉々とした顔が現れた。

「お待ちしておりました！どうぞ中へ！」

予想以上に興奮した様子で篠田は僕達を招き入れる。僕は面喰らいながらも、促されるがままに、玄関へと足を踏み入れた。

「汚い所ですが、さあどうぞ」

「……」

篠田の言葉通り、中はお世辞にもそれが謙遜とは言えぬ有り様だ

った。床には様々な種類の本が所狭しと積まれてあった。サイズもジャンルも多様な小説や辞書、参考資料と思われる人体や動物、刃物、ピストル等の写真集なんかもある。それらが通路の半分を埋め尽くし、人ひとりが辛うじて通るスペースしかない。ゴミの入った袋も玄関の隅に置かれ、中には腐敗した悪臭がするものもある。これが来客をもてなす態度だろうか。ウイリアム章大よりも質（たち）が悪い。僕達は不快な顔を隠す事なく表しながら、篠田の後に続いた。

通されたのは、居間と隣接する、篠田が仕事部屋に使っている狭い空間だった。弾力の「だ」の字もない絨毯が畳の上に敷かれ、磨り硝子の嵌め込まれた窓から射し込む陽射しはカーテンで遮られている。室内には中央に卓袱台があり、机上には最新式のノートパソコンが置かれている。仕事で使っているのだろう。他にも本や書類、CD-R、メモリースティックが散乱している。僕達はそれらを手足で退かし、座れるスペースを確保し、其処に腰を下ろした。

篠田はリビングに通じる襖を開け、茶の入った湯飲みを乗せた盆を手にやって来た。丁寧にコースター迄敷いて用意してはくれたが、気持ち的には口を付ける気になれず、一応礼は言っておいた。

「それで、お話の方なのですが……」

「まずは貴方の方を先にお聞きしたい」

僕達と卓袱台を挟んで座り、爛々と瞳を輝かせ、憎々しい笑みで両手を揉む篠田の言葉を遮り、僕は言った。いつもと変わらぬ調子で言えただろうか。不安ではあったが、彼は過剰に頭を上下に振りながら、

「ええ、ええ。世はギブアンドテイク、包み隠さずお教え致します！」

と、張り切って返すものだから、不審がってはいないのだろう。寧ろすっかり信じ切っている。僕は内心ほくそ笑んでいた。

川崎から頼まれたのは、篠田の次回作の制作に協力し、アサシンに関する内部事情を極秘で教える代わりに、彼の制作方法を聞け、

というものだった。念の為、今回篠田の依頼を引き受けたアサシンが彼のファンであるという名目付きである。そんな事を聞いて何になるのだろうか。川崎の胸の内は判然としないが、僕はつい承諾してしまった。僕も早坂が言っていた篠田の行動が事実なのか、当人から確証を得たかったのだ。

「私はね、リアリティーに富んだ文章力が売りでして……」

篠田は咳払いをひとつしてから、得意気に語り始めた。事に及んだのは、彼にとって4作目からだという。まずはその作品のテーマを決める。大体は性的なもので、例えば最新作ではネクロフィリア、以前にはDV、近親相姦、同性愛……。テーマを決めると次に早坂の勤める出版社の社員から題材となる人物を選ぶ。最初はリストラの対象だった者からであったが、次第に彼の好みだったり、思い描く登場人物の理想像からだったりと指向を変えていったらしい。そして、テーマや内容の展開に沿って題材を拘束したり、強姦したりして、最終的には殺害に至るといふ。最新作は題材を猿轡で口を封じ、緊縛し、肉体的にも精神的にも苦痛を与え続けた。そして、絞殺しながら尚も強姦を繰り返し、腐敗が始まると、裏の庭に穴を掘って埋めた。

一連の出来事は文や写真で記録していた。ノートパソコンにはそれらが作品ごとに保存されていた。篠田は最新作の題材となった女性社員の写真を何枚か見せてくれた。というよりは、自慢気に見せ付けて来た。恐怖や拒絶、深い絶望にうちひしがれ、顔を歪め変わり果てて逝くその姿に、僕は戦慄した。早坂の言った通りだ。篠田は恍惚とした表情を浮かべて、事細かにその時の状況を熱弁している。

吐き気がした。異常だ。狂ってる。僕は平静を装いながらも、胸の内では篠田への憎悪の念が胃液と共にじわじわと込み上げて来ていた。こんな惨事を繰り返し、奴は罪の意識なんて微塵も感じてはいないのだ。

「…さて、次はそちらの番ですよ。詳しく、お聞かせ願えますか？」

話を終え、陶醉した様子で溜め息を漏らしながら、篠田は此方に陰湿な笑みを向けた。その手は既に僕の話記録しようとパソコンのキーボードに添えてある。僕は顔を伏せ、瞼を閉じ、ゆっくりと息を吐いた。感じる。気配を殺していても、その存在は襖越しに伝わっている。川崎、居るんだな。

僕はその視界に篠田を捉え、口を開いた。

「口で説明するよりも、手っ取り早くその目で確認したいと思わないか？」

その言葉を合図に、通路側の襖が開いた。篠田は視線を上げ、声も出せずに驚愕の表情を浮かべて絶句している。普通の人間とは思えぬ、禍々しく不穏なオーラに包まれた川崎が、冷酷な目付きで此方を見下ろしているのだ。それがアサシンだとはすぐに判断出来ずとも、何やら脅威的な存在ではある事位、誰でも見当はつくだろう。「どの道、アサシンをテーマに作品を作るつもりならターゲットから情報を得てその一部始終を覗き見でもするつもりだったんだらう？」

僕は立ち上がり、一步後退りながらそう言うと、凶星と言わんばかりにハツとした顔で口許を手で覆って見せたが、すぐにこれ幸いといった満面の笑みを浮かべた。「なんてサービス精神旺盛な！そういう事なら早く仰って下さいよ！」

篠田は慌てて机上のデジタルカメラを手に腰を上げた。彼の頭はこれから早坂をターゲットとし、川崎によって依頼を遂行される殺人劇を思い描いているのだろう。すっかり舞い上がっている。カメラにそれを収めたかったのだろうが、それは叶わなかった。

「……っ!？」

篠田がカメラを眼前に翳した時には、其処にもう川崎の姿はなかった。頓狂な表情を浮かべて顔を上げた口は、布が巻かれ塞がれていた。彼がカメラの操作に手こずっている間に、川崎は素早く背後に回り、猿轡をしていたのだ。そのまま川崎は間髪を入れず、脇の下から両手を伸ばし、篠田の腕を後方へと引き寄せ、ロープで固く

結ばれた。その拍子に篠田の手からカメラが音を立て、床へと落ちていった。この間に費やした時間は、僅か10秒未満である。突然の事で状況が把握出来ない様子の篠田は、慌てて川崎から離れようとしたが、足が纏れ、自ら俯せに倒れ込んでしまった。そこに、川崎が馬乗りになる。

「サービス精神旺盛？アンタの為なんかじゃない。刻一刻と迫る死の恐怖に怯えながらも、たったひとりでアンタが作り上げた負のループを断ち切ろうとする、彼女への責めてもの冥土の土産だ」威圧的な凄味のある低い声で川崎はそう言い放つ。僕は早坂を部屋の隅に移動させると、鞆からICレコーダーと一枚の紙を篠田に見せた。

「…んぐう！！」

それを見るや、篠田は目を見開き、脂汗を滲ませた。自身をターゲットとする依頼書と、先程の彼が語った一部始終が録音されたレコーダーだ。すっかり興奮状態に陥った彼は鋭い目付きで早坂を睨み付け、何やら叫び始めた。彼女に対して暴言を吐いている様だ。何とも筋違いな話である。

癪（かん）に障ったのか、川崎はパンツのポケットに忍ばせていた折り畳み式のナイフを取り出し、余っていた方の手で篠田の前髪を掴み上げた。苦悶の聲が情けなく漏れる。「アンタの犯した罪は、到底許される事ではない。……が、交渉次第では何とかしてやらない事も、ない」

「んう…？」

川崎の発言にその場に居る全員が呆気に取られ、彼に視線を送っている。一体、何を言い出すのか。本気で言っているのか？この期に及んで交渉次第で篠田を救済しようだなんて。

僕達の疑念を余所に、川崎は篠田の口に巻いた布を解いた。一番驚いているであろう篠田は、その交渉の内容が何なのか、不安な表情で川崎を見上げている。

「アンタが出した依頼を取り消せ」

「何…!？」

「ちよっ…!!」

「っ…!!」

予想外の提案に、皆一様に驚愕した。特に僕には信じられなかった。それが何を意味するのか、篠田と早坂には解るまい。任務達成率100%を誇るアサシンが、自ら依頼を取り消そうとするなんて自身の誇りを捨てる程に、彼もまた、早坂の強い意志に感銘を受けたのだろうか。この冷静沈着で、他人に関心のなさそうな男がだ。

「どうだ、考える気はないか？」

手に持ったナイフを篠田の首筋へと寄せながら、川崎は至って普段と変わらぬ口調で催促を求める。篠田は暫く視線を床へと落とし、押し黙っていたが、やがて微かに恐怖心を覗かせながらも、不気味な微笑を浮かべて低く笑った。

「貴方は、私を私利私欲の為に罪を犯した冷酷非道な殺人鬼だと思つてらっしゃる」

愉快げに細めた目には、悪意に満ちた光が宿っている。何か目論んでいる様子である。その顔に、僕は粟（あわ）立った。同時に、今にも飛び掛かり、その口を再び塞がなければいけない様な焦燥感に駆られていた。何故そんな気持ちになったのだろう。それは篠田の次ぐ言葉を、何処かで予期していたからかも知れない。

「貴方だって、同じでしょう？」

尾を引く様な、不快な声色で発された言葉に、僕はハッと目を見開いた。頭の先から爪先へと、冷たいものが走り、心臓が鷲掴みされた様な感覚に囚われる。

「貴方も其処の代理人も、ご自身の名誉やプライド、生活の為に依頼があれば人を殺すんでしょう？同罪じゃないですか！」 狂気に満ちた笑みを浮かべ、篠田は声を上げた。こんな奴に、同類扱いされるなんて、と、僕は拳を震わせたが、返す言葉はなかった。

篠田の言う通りだ。どんな理由であれ、結局は人を殺す事には変わりない。僕だってそう、自身の為に、代理人としての任務をこな

して来たのだ。私利私欲の為に。

「確かに罪は罪。でもね、私は決して利己的な理由だけで今迄やって来た訳じゃない。ひとつの会社の経営危機を救ったんですよ？こんな事で私を殺そうだなんて……。会社の奴等だって共犯なんですよ？ねえ！？何なら、社員全員の依頼書でも出しましょうか！？金ならいくらでも……」

「その必要はないわ」

唾液を周囲に巻き散らしながら、自身がさも正しいとでも言いたげに、僕達への皮肉を込めて嘲笑する篠田の言葉を遮ったのは、早坂であった。それ迄、隅で小さくなつて口を噤（つぶ）んでいた彼女が、毅然とした様子で立ち上がり、篠田を見下ろす。

「お前だつて同罪だ。私の殺害を依頼した所で、私は自分が出した依頼を棄却する気はない」

「解つてる。でも本当は、このまま貴方の作家としての人生を、誰よりも全うさせたかった。昔からの夢だったよね、篠田先生」

「……何だと？」

早坂の言葉に、篠田は眉間の皺を濃くし、疑心の眼差しを向けた。何処か遠慮がちな声には、早坂に対する他者とは違う特別な思いが含まれている様な気がした。

「憶えてないでしょうね。私は、貴方が教師だった時の、教え子のひとりに過ぎなかったのだから」

「……！」

優艶さを滲ませる早坂の笑みに、篠田は驚いた表情を浮かべた。

僕も予想外の展開に耳を疑った。川崎は、終始相変わらず無表情でふたりを交互に見つめている。

「いつも何処か自信なさそうに俯いて歩いてて、頼りなくて、少し怖いイメージだったけど……。私が放課後、ひとりで教室に残ってた時に、先生が作家になりたいって、熱く語ってくれた笑顔が素敵で。

……偶然、先生が契約してる出版社に就職してから見掛けた時も、すぐに解った。あの時の目の輝きは、何一つ変わってなかったから」

瞼を閉じ、子供に本を読み聞かせる母親の様な、穏和な口調に、僕はその情景を頭に思い浮かべた。西陽の射す教室に、期待に胸を膨らませ、子供の様に熱弁を振るう篠田。それを嬉しそうに傍らで聞いている早坂。ドラマにありそうな青春のひとコマである。

「当初の先生は、念願の作家として夢と希望に満ち溢れて、生き生きとしてた。でも、会社から売れる作品を作れとプレッシャーをかけられ、長いスランプに陥り、その姿も失い、昔の面影は消えた。そして…、あんな事を」

早坂は声を震わせ、目に涙を浮かべた。会社からかけられた圧力、それをどうする事も出来なかったという、自責の念なのだろう。篠田も困惑した様子で早坂を見つめていたが、顔を伏せた途端、悔し涙を床に零した。

「君は…、私が唯一作家になりたいと話した子だった。どうして…今迄忘れていたんだ…」

嗚咽しながら、苦し気に絞り出した声はすっかり憔悴しきっていた。彼自身、長年夢見て来た作家としての人生を貫く為の、苦肉の策であったのだろう。川崎は篠田の前髪を掴んでいた手を離し、静かに息を吐いた。人間の心理は、こうも読めないものなのか。

早坂はゆつくりと篠田の前へと近寄り、その場に膝を付いた。言葉を変えずとも、ふたりの思いは今やっと通い合ったのだ。

「……アサシンさん」

早坂の呼び掛けに、川崎はナイフを引っ込めながら、彼女の顔を見つめた。彼女の表情からは、己の死を受け入れ、覚悟を決めた清々しさが窺える。

「人には、どんな手を使つてでも、守りたいものがある。それは貴方がたも同じ。彼も、私も」

その言葉で、どれだけ救われた事だろう。僕は目頭が熱くなり、唇を噛み締めた。篠田の表情も、あの頃の夢と希望に満ち溢れ、早坂同様、その身を以て罪滅ぼしをしようという決意が滲んでいる。

川崎、君はどうだろう。

「アンタは出てる。後の始末は、ひとりでやる」

それでも、川崎は相変わらず冷淡な口調で僕に言った。こんな時でさえ、彼は無感情で早坂の言葉に何の重きも感じていないのだ。僕は沸き上がる怒気に、彼を睨み付けた。が、その気もすぐに失せた。其処には、僕の知る彼の姿はなかった。これが、任務達成率1000%を誇るアサシンが見せる顔なのか。

僕は込み上げるものを抑え切れず、踵を返し玄関へと駆け出していた。まともに靴も履けない状態で家を飛び出し、脇目も振らず、目的もなく、その場から逃げたくて、ただがむしゃらに走った。

視界が滲み、真っ直ぐ走る事は、出来なかった。

「突然ですが、これが最後のブログになります。『最後』というよか、『最期』と変換すべきでしょうか。理由は、訊かないで下さい。いずれ解りますから。私は、私の犯した罪を償う為に、この地を離れ、暫く皆様を遠くから見上げる事にします。怖くはないです。ただ、申し訳ない事をしたという罪悪感で胸がいつぱいです。こんな事で償える罪ではない事は解ってる。だけど、これは私なりの決断でもあります。これ迄、私を支えて下さった全ての方々に、直接は言えないけど、心から感謝しています。機会があれば、また来世でお逢いしましょう。有り難う、サヨナラ。」

僕はパソコンの画面を前に深々と溜め息を吐いた。早坂が僕と篠田の自宅に向かう直前に更新されていた、彼女のブログの記事である。遺書と呼ぶに相応しいその内容を読みながら、全身が深い悲しみに包まれていく気がした。

あ後の事は、正直憶えていない。気付けば自宅のマンションのベッドで眠っていた。起き上がってリビングに行くと、川崎が何も言わずに、淹れ立ての珈琲を差し出してくれた。

その当人は今、ローテーブルに置かれた事後報告書の記入欄を、相変わらずの無表情で埋めている。僕はその横で、ぼんやりとテレビで何度となく流れるニュース速報を眺めるでもなく眺めていた。

有名作家と、出版社に勤める女性社員が、遺体で発見されたという内容である。ふたりの間は何等かのトラブルがあり、揉み合っている内に、女性社員は自宅にあった包丁で刺され死亡。後に作家も自殺を図ったのではないかと、警察は捜査しているらしい。

その後、警察に送られて来た出版社の告発文によって、会社は明日にも家宅捜査が行われる方針だとも。

「出来たぞ」

川崎は事後報告書を手に取り、僕の眼前に翳した。それを受け取りながら、僕は彼の顔を見つめた。その無表情の裏に隠された素顔が、今でも瞼の裏に焼き付いている。それ迄、彼は人間としての感情を持ち合わせていないのではとさえ思っていたが、それは大きな間違いであった。彼の体内にも、人の血が通っているのだ。ただそれを、見た事がなかっただけに過ぎない。

あの時、早坂の言葉に悲哀と罪悪感に満ちた顔を浮かべ、頬に一筋の涙を流した川崎の姿。それが、僕が初めて見た彼の素顔であった。そう思いたい。

続

Ally and enemy?

枯れ葉も落ち、細い枝が剥き出しになった街路樹に巻き付けられたカラフルな豆電球。デパートや民家に施されたイルミネーション。駅前広場に設置された巨大なツリー。至る所に見受けられる「Merry Xmas」の文字と、サンタクロースの衣装に身を包んだ洋菓子屋の店員の姿。

12月中旬、いつもは陰鬱な雰囲気につっぽりと覆われた街も、クリスマスを目前に控え、色鮮やかに飾り立てられる。世界的な不況を微塵も感じさせない装いは、この世界全体が現状から目を背け、「喜」の面（おもて）を被っている様な気にさえさせる。日頃から見慣れている暗澹とした気配を匂わず者は少なく、行き交う人々の多くが喜色満面といった様子で、その手にプレゼントの入った袋を提げている。

「自分の妹へのプレゼントは用意したか？」

一時の幸福感に満ち溢れた群衆を縫う様に掻き分けながら、川崎が唐突にそう訊ねて来た。無論、クリスマスプレゼントの事を指しているであろうが、こつも前触れもなく問われると、すぐにその言葉の意図するものが理解出来ない事もある。おまけに、そんな台詞を言う時でさえ彼は感情の読み取れない無表情に、抑揚のない口調なのである。

「何を渡せば喜ぶのか、判らないんだ」

正直、病床に伏す年の離れた少女の望む物など、裕に成人を超えた健康的な男の僕には解せないでいるのだ。食べ物毎回は毎回差し入れしているし、齢を重ねたせいかわ、消耗品よりは長く使える実用的な物にしたいとは思っている。かといって、それは具体的に何かは、未だに頭が回らない。僕は川崎とはぐれぬ様、斜め後ろにピツタリ寄り添う様に歩きながら、声を震わせて答えた。

「良いんじゃないか、フリルをふんだんにあしらったピンクのパジ

ヤマで」

川崎のその言葉に、僕は凍てつく冷たい風に晒され赤くなった頬を更に紅潮させ、反射的に彼の背中を睨み付けていた。それが僕へのアドバースではなく、皮肉だと解っていたからだ。案の定、此方に向けた顔には軽蔑とも捉えかねない冷ややかなものが見て取れる。そんな顔をされる位なら、冗談めかして笑い飛ばしてくれた方がまだマシだ。

僕は厚手のトレンチコートの襟を立て、洗面を浮かべながら赤い鼻を嘍った。全く、極度の寒がりである僕を、こんな陽も落ちて急激に気温の下がった夜に連れ出すだなんて。出がけの川崎に抱いた義理堅い人情深さを撤回してやりたい。

事の発端は今から約2時間前。午前中に家事を終えた僕は、日頃の疲れが体内に蓄積されていたせいか、珍しく昼寝をしていた。川崎との慣れない同居生活に、初めての依頼遂行の手伝いと、毎日決まった睡眠時間だけでは解消出来ない程の疲労が溜まっていたのかも知れない。

おおよそ4時間は眠っていただろうか。日中の寒々とした灰色の空は、時間が経つにつれて夕闇の絨毯が敷かれ、室内は更に薄暗く冷えていく。仰向けの状態から横向きに寝返りを打った僕は、閉じていた瞼越しに突然光を受け、目を覚ました。寝惚け眼の視界に映ったのは、整い過ぎて逆に恐怖すら感じてしまう川崎の顔であった。ナイトテーブルに置かれたスタンドライトの橙色の明かりが、彼の顔の右側を淡く照らしている。朦朧とする意識の中で、視界に映るものが果たして夢か現か、判然としないままに暫く僕は見つめ合っていたのだが……。

「勝手に部屋入って来るなよ!!」

それが現実である事を悟ると、僕は堰（せき）を切った様に飛び起き、込み上げる怒気を露に開口一番で川崎を怒鳴り付けた。床に腰を下ろし、此方を眺めていた当人は、僕の言動に不思議そうに小首を傾げて見せる。

僕は先日的一件以来、同居を続けている。すぐに出て行くと言
う川崎に、この時期にあの地下通路での暮らしは辛いだろうと思
い、説得して引き留めているのである。いくら電気が通つてい
るとはいえ、家に比べたら寒いだろうし、生活するにも何かと不
便である事は目に見えている。僕は彼との同居を苦とは思わな
いし、何より彼の素性を聞き出すには絶好の機会だ。無論、そ
んな思惑なんて当人に打ち明けられる筈もないのだが。

川崎には今、僕の部屋を使わせている。必要最低限の家具類
しかない殺風景な室内だが、睡眠や着替えをするだけなら申し
分ないだろう。

問題は僕が今使っているこの部屋だ。此処はいずれ退院する
妹の為に、既に家具類を揃えている。それが却って今日の様な
失態を生んでしまったのだ。

ベッド、ドレッサー、カラーボックス、テレビ台、デスク……。
室内に置かれた家具は全てピンク。カーペットやカーテン、布
団カバーはハート柄。それもレースやフリル付きである。小物
は猫や犬、薔薇をモチーフにした物で統一し、出窓にはクマや
ウサギといったぬいぐるみを整然と並べ、さながらピンクの
森をイメージさせている。いくら妹の為とはいえ、良い年した
男がこれだけの品々を揃えたなんて、川崎に限らず誰にも知
られなくなかったのだ。

「外から呼んでも、返事がなかったから」

そんな兄心も露知らず、川崎は至って真顔でそう言っ
て立ち上がり、天井から垂れ下がった照明のコードを引
つ張った。他の部屋とは明らかに異なる空間が浮き彫り
となり、僕は肝が潰れる思いであったが、彼はそれでも
平然と親指をパンツのポケットに引つ掛け、此方を見
下ろしている。どうやらこの空間の異質さには関心がない
らしい。この時ばかりは、彼のこつした無頓着さに救
われた。

「…で、何の用だよ」

僕は開き直ってベッドの上に胡座を掻き、腕を伸ばして
スタンドライトの明かりを消すと、頭（こつべ）を垂れ、溜
め息混じりに訊

ねた。実を言うと、僕は寝起きが悪いのだ。それも起こされるのは大嫌いなのである。険悪な雰囲気を滲ませる僕にも、勿論川崎は全く関心を示さない。

「飲みに行かないか？」

「……へ？」

川崎の口から出た意外な言葉に、眠気は一気に吹き飛び、僕は目を丸くし、間の抜けた声で返答していた。何と彼が自ら飲みを誘って来たのである。この何事にも無頓着で、人付き合いを好まず、面倒な事は一切しない様な男が、だ。何の心境の変化なのか、今夜は大雪でも降るのか。全くもって予想外の事態だ。

あからさまに動揺する僕に、今度は川崎が呆れた様に溜め息を漏らした。

「アンタが誘って来たんだろ」

そう言われて、僕は瞬時に先日地下通路でのやり取りを思い出し、あつと小さく声を上げた。クラブを模したあの場所で、僕が一杯誘ってみたのだが、彼は「これが終わったら」と言って断っていた。あれは先日の依頼が終わってからという意味合いにも取れたが、その場凌ぎの社交辞令に過ぎないとさえ思っていたのだ。

「約束したからな。準備しろ」

あの事を川崎は憶えていて、しかも有言実行しようとして僕を誘ってくれたのだ。沸き起こる歓喜に、つい表情が綻ぶ。彼は意外にも義理堅い男なのだ。

「そつえば……」

部屋を出て行こうとドアの方へと歩み寄った川崎が、思い出した様にそう言って立ち止まり、此方を振り返った。何を言われるのか想定も出来ないまま視線を合わせていたが、やがて彼は室内を一瞥した後、

「カーペットは無地の方が良い」

小さく音を立てて閉まったドアを茫然と眺めながら、僕は沸々と煮えたぎる羞恥に、ベッドから立ち上がると、彼が床に敷いていた

ハートのクッションを掴み取り、力任せに投げ付けたのであった。

「女の事は女に訊けば早いだろう」という川崎の意見で、彼の知人が経営するバーを屈指してやって来たのは、この時期より一層のネオンを煌めかせ、雑居ビルが所狭しと建ち並ぶ歓楽街。アルコームの撮取で頬を赤らめ愉快げに笑いながら道行くスーツ姿のサラリーマン。この界限で働いていると思われるブランドの数々に身を包んだ若者。ウィンドブレーカーを羽織り、手当たり次第に男に店を勧めるキャッチ。歓楽街とは無縁の生活を送って来た僕には、目に映る光景全てが目新しい。四方八方に目移りしては、前を歩く川崎を見失いそうになる。キャッチに捕まり困っていると、彼が僕の肩を掴んで向こう側に威圧的な眼差しで「結構だ」と一蹴する。仕事だとは解っていても、罪悪感に駆られ、暫く俯いて彼の足許を見ながら後に続いた。

やがて、川崎は歓楽街の二画にあるビルの前で足を止めた。入口の自動ドアの隣に、地下へと通じる階段が伸びている。彼は颯爽と其処を下って行く。人の動きを感知して点灯するセンサーライトが等間隔で天井に嵌められてはいるが、その明かりは頼りなく、周囲を弱々しく照らしている。注意深く下りないと、危うく足を踏み外してしまいかねない程である。

閉塞感のあるコンクリートの空間の突き当たりには、光沢感のある黒い壁が立ちはだかっていた。鉄の様な重圧のありそうなそれは、この空間の異様な重苦しさを更に引き立てる。ツルリとした表面から壁だと思っていたが、どうやらそうではないらしい。横の壁には「Member's bar S.S」と印字された小さなプレートと、カードの読み取り機が嵌め込まれている。川崎はシルバーの固そうなカードを手に、読み取り機に上から下へ滑らせると、ピーツという甲高い電子音が響いた。黒い壁がゆっくりと右にスライドしていく。カードなしでは入れない会員制のバーという事か。中からは軽快なジャズと暖かい空気が流れ込んで来る。僕は緊張と未知の領域への進入に胸を踊らせながら、川崎に続いて店内へと足を踏

み入れた。

中は割と広々としていて、淡い間接照明に照らされ、お洒落なカフェを彷彿とさせる趣（おもむき）のある空間であった。扉の前方のカウンターと、それを挟んで左右に4人掛けのボックス席が並んでいる。木目調の調度品とアンティークの小物が高級感を漂わせる。多種多様の酒の瓶が整然と並ぶボトル棚が置かれたカウンター内では、見た目の全く異なる女がふたり立っている。ひとりは腰の辺りの長さもあるブロードの髪を緩く束ね、目鼻立ちのハッキリとした妖艶な顔をした大人の女といった雰囲気醸し出し、もう一方は黒髪のボブに穏和で物静かな印象を受ける可愛らしい純和風な顔付きである。店内には4人の男が各々酒を飲んでいるが、どうやら彼女達がふたりで此処を切り盛りしている様だ。

「あら、川崎じゃないか」

金髪の女が此方の存在に気付くと、笑顔で快活な声を上げた。途端、店の客の視線が一樣に此方に向けられた。驚愕や好奇、奇異の入り交じったそれに晒され、僕はその場に立ち竦んでしまった。何だ、この視線は。川崎はこの店では名の知れた有名人なのだろうか。対する川崎は周囲から注がれる視線をもろともせず、着ていた黒のレザーコートを脱ぎながら、さっさとカウンターの右端の椅子に腰を下ろした。金髪の女に促され、僕も慌てて彼の横に並ぶ。トレンチコートを脱いで椅子の背凭れに掛けた時には、パラパラと視線も散っていた。が、此方に向けられた興味がすぐに薄れはせず、体を貫く様な感覚と、聞き取れない迄も穏やかではない小声が立ち、何とも居心地が悪い。

「お名前は？」

金髪の女は値踏みする様な目でじつくりと僕を見つめながら訊ねて来た。近くで見ると、彼女の緑のタートルネックに包まれた体軀は女性にしてはがっしりとしていて、細身ながら豊満なバストが窮屈そうに収まっている。僕は目のやり場に困って顔を伏せ、口を開き掛けた。

「俺の代理人だ」

川崎が代わりに僕を簡潔に紹介した事で、僕は閉口したが、何か得体の知れない違和感が体を支配した。

「同業って訳ね。ま、うちはそれ以外お断りだけど」

「え？」

僕達の前にそれぞれ硝子製のコースターを置きながら、納得した様に数回頷いて見せた女の言葉に、その違和感は掻き消され、僕は小さく声を上げてから、注意深く店内に視線を巡らせた。カウンターの左端の席に座り、ロックグラスを片手に難しい顔付きで黙考しているらしい中年の男も、ボックス席で何かの雑誌を見ながら談笑しているふたりの若者も、煙草を口に啜えたまま瞼を閉じている老人も、アサシンの業務に携わる同業という事か。川崎の名を聞いてあんな反応を示した理由も頷ける。彼は闇の世界でもその名を轟かせるアサシンなのだから。少なからず噂位は耳にしていたのだろう。僕は視線を戻して、渋面を浮かべた。

「大丈夫。此処は絶対不可侵領域、下手な真似はさせないよ」

僕の心情を察してか、女は自信タップリといった笑みを浮かべてウィンクして見せた。というのも、この店は表向きには女ふたりがやっているのだが、裏ではアサシンさえも屈する強者が控えているのだとか。

アサシン同士の争いは、年々増加傾向にあつた。今や彼等の存在は裏の世界では当たり前前のもとなり、依頼を請け負う仲介業も国内だけで30社はあると言われている。世界規模だともう数え切れない。各々在籍するアサシンも数知れず。人が多ければ自身に舞い込む依頼は必然的に減る。一件でも多くの依頼を請けようと、影ではアサシンによる「同業潰し」が真しやかに行われているのだ。とはいえ、任務達成率100%を誇る川崎の様な強者を相手に挑もうという無謀な者も居ないであろう。

「で、今日も義理堅くアタシに感謝しにでも来たの？」

「そんな所だ」

何処からともなく張り詰めた空気に圧され、押し黙る僕を余所に、川崎と金髪の女は話し始めた。彼はこの店の常連なのだろう。相変わらずの無表情の彼と、終始にこやかな彼女とでは対照的に思えるが、心なしか親しげな雰囲気は漂っている。

「そういえば、紹介が遅れたわね」

金髪の女は思い出した様に此方へと顔を向け、申し訳なさそうに眉尻を下げ、胸元で両手を合わせて見せた。

「この子はアルバイトの小夜ちゃん」

名前を呼ばれ、黒髪の女は控えめに微笑を浮かべて会釈してから、一本のボトルをカウンターに置いたのだが、僕はそれを見るなりぎよっと目を剥き、食い入る様に眺めた。酒の知識には乏しいが、その入れ物がバカラデキャンタである事は一目で判る。そんな高級品に入った酒である、中身も相当値を張るものなのだろう。これまた上質そうなロツクグラスに注がれた茶褐色の液体からは、芳醇なブランデーの香りが漂う。

「アタシは片岡リオ。この店のオーナー兼、雇われの『TDP』さ」
酒の入ったグラスを僕達の前に差し出しながら、リオと名乗る金髪の女は聞いた事のない単語を口にした。

「『TDP』？」

「始末屋だよ」

僕が聞き返すと、横から川崎が答えた。始末屋と言えば、その昔、遊廓で無銭遊興を凶った客の取り立てを生業とした者の事である。差し詰めこの場合はクライアントに依頼の報酬を取り立てるのが、始末屋であるリオの役目という事か。

「富豪はケチ臭いのが多くてね。両者合意の上で見積りを出しても期日迄に入金しない奴には、アタシが出向いて徴収するって訳さ」
成る程、これ迄に川崎が請けた依頼の中には彼女の出番もあつたという訳だ。彼女の引き締まった体躯の理由も頷ける。他にも拳を以て事に及べそうな気配はあるが、それを言ったらセクハラで訴えられてしまいそうなので、胸に留めておこう。僕達はグラスを手に、

杯を交わした。小気味良い音が響き、中の酒が小波を立てる。

「そう、川崎の代理人って事は、兄貴とも面識があるのね」

リオはグラスを一気に空けてから、僕へと視線を向けた。かなり肝臓は強そうだ。

「兄貴？」

「代表なんでしょう、君達の所の仲介業の」

「……ええっ!？」

リオの言葉に、僕は驚愕のあまり声を上擦らせ叫んでしまった。今度は自ら周囲の注目を集める事となり、慌てて口を手で覆うと、きまり悪く肩を竦めた。

まさかあのウィリアム章大（しょうた）とリオが兄妹だなんて、予想だにしていなかった。確かにふたり共、日本人離れた顔立ちではあるが、兄妹と聞いて納得する様な似通った部分が見当たらないのだ。それはウィリアム章大の無造作ヘアや無精髭であったり、リオの化粧のせいかも知れない。

「アタシは事実婚って形で名字を変えてるけど、代々ウィリアム家は裏稼業を生業として来たんだ。こう見えて色んな業界に精通してる。何かあったら頼ってよ」

そう言ってリオは得意気に口角を上げ、僕にシルバーのカードを差し出して来た。川崎が持っていたこの店の会員カードであろう。僕は礼を言っただけを受け取り、ジーンズのポケットに入れていた財布に収めた。

「ところで、君には宿り木の下でキスをするステディーは居るの？」

リオはカウンターに肘を掛け、身を乗り出して頬杖をつくど、艶然とした微笑を浮かべて僕に問い掛けて来た。豊満なバストが視界に迫る。僕は困惑して視線を外した。どうやらウィリアム兄妹は英国人らしい事は判った。

「この人はシスコンだからな」

「ちよっ…、おい!」

グラスを手に空（くう）を見つめる川崎からのあらぬ横槍に、僕

は赤面し、彼を咎めようとした。

「良いじゃない。クリスマスは本来、家族と過ごすものよ」

しかし、リオが僕の言葉に被せて感慨深げに口を出す。フォロワーという訳ではなく、本心といった口振りである。否、そんな事に感心しなくても。

「この人を落とそうというのは無駄だと忠告しただけだ」

「嫌ねえ、アタシにだって貞操観念はあるわよ」

川崎は至って真面目そうな言い種である。言い寄られてたじろぐ僕を庇ってくれたというのなら、もっとマシな言い方があるだろうに。僕は込み上げる怒りを酒で飲み下した。

その後の話題は、僕の妹へのクリスマスプレゼントへと流れ、論議と各々の思い出話の末、長引く入院生活には本でもという結果に至った。

翌日、僕は二日酔いの気怠い体に鞭を打ち、事務所へと向かった。ウィリアム章大から依頼が舞い込んで来たとの連絡を受けたのだ。

煙草の臭いが充満した室内は、僕を憂鬱とさせた。おまけに胃から何やら込み上げて来そうになり、所（しょ）に入るなり、有無を言わず窓を開け放つ。

「リオから聞いたぞ。昨日、川崎と飲みに行ったんだってな」

ウィリアム章大は此方に気を遣うでもなく煙草を口に啜えながら、革張りのチェアに深く腰掛け、意味深な笑みを浮かべて言った。見れば見る程、彼がリオと兄妹という認識が難しい。その寝癖じみた長い癖毛と無精髭を整えれば、きつと少しは納得するのであるが。「どうだ、俺に似て美人だろ？」

「依頼書はこれですか？」

鼻を鳴らし、自慢気に胸を張る彼の言葉を無視して、僕はデスクの上にある書類を手に取った。

「お前、シカトかよ」

不満そうに眉間に皺を寄せ、唇を尖らせる彼を更に無視して、僕は依頼の内容を目で追った。クライアントは大手IT関連会社の専

務、ターゲットはその社長、か。仕事上のトラブルだろうか。特別重要視する点もなし。まあ、川崎なら余裕だろう。

書類を鞆に収めている間、ウィリアム章大は含み笑いを浮かべて僕を眺めていた。その意味ありげな視線には気付いていたが、体調不良の僕にはその理由を問う気力はなかった。

「意外だな。川崎が誰かと連れ立って何処かに行こうだなんて」

川崎の名が挙がると、僕はついウィリアム章大へと視線を送っていた。同感である。実際、同居してからまだ日は浅いにしろ、彼と接する様になり、こうした事は初めてであった。自ら飲みを誘う事をせず、ひとりカウンターに座り、グラスを傾けているイメージは未だに払拭出来ない。僕から誘った事とはいえ、どういふ風の吹き回しだったのだろうか。幸い、昨晚も今日も大雪は降っていない。

「川崎と飲みに行かれた事はないんですか？」

「ああ、俺はない」

僕の問いに、ウィリアム章大はまた意味ありげな言い回しで答えた。彼の知る人物と川崎が飲みに行った事はあるらしい。僕はそれ以上は追及せず、手短に挨拶を交わし、その場を後にした。

事務所を出て、そのまま直帰するつもりだったが、気付けば足は自宅から少し離れた大きな書店へと向かっていた。妹のプレゼントを買わなければという思いが無意識にそうさせたのだろう、思い出した時には書店の入口に居た。内心、先程のウィリアム章大との会話について考えていたのだが、良い機会だと自動ドアを潜る。

店内には天井に届きそうな程に背の高い本棚が立ち並び、大量の本が整然と敷き詰められている。それらはジャンルや作者名、出版社名等で分別されているが、僕は棚の前を行ったり来たりして頭を抱えていた。

昨晚、川崎やりオ、小夜と共に考え抜いた本という結論。しかし、入院中の妹が好む内容が解らないのだ。年頃の女の子が読む本といえば、やはり恋愛小説だろうか。そう思って棚を移動してみたら、否、と思ひ留まる。閉鎖的な病院で恋愛に於ける感情を高めるのは

如何なものか。況してや何処の馬の骨とも知れない誰かに恋心を抱いてしまいかねない。それは断固避けたい所だ。言っておくが、この考えは僕が兄であるが故の妹へと気遣いである。素性も知らない男に、妹を傷付けさせまいとする兄心なのだ。確かに妹の事は自分の命よりも大切だが、決して恋愛感情を伴っている訳ではない。そう、飽く迄、兄心だ。断じてシスコンではない。

…恋愛小説は止めよう。どうせなら読んでいて勇気の湧く様な内容が良い。例えば、青春小説やエッセイなんてどうだろう。しかし、学校はNGワードだ。妹が学校に行きたいと言いつつも出すかも知れない。家族愛をテーマにしたのも駄目だ。僕達に両親は居ないのだから。病気に關するものはもつてのほかだ。ホラーやミステリーにした暁には、夜に独りでトイレに行けなくなってしまうかも知れない。

消去法で候補を絞っていきながら、最後に行き着いたのはファンタジー小説の棚であった。ちよつと子供じみてはいるが、これが一番僕の理に叶っていると言えよう。とはいえ、ひとつのジャンルだけでも膨大な数の本が、手に取られる時を今か今かと待ち侘びているのだ。一冊ずつ確認しては、到底一日では探し出せないであろう。愈々（いよいよ）本そのものを諦めかけて来たその時であった。

「どうぞ」

変声期を未だ終えていないであろうその声に、僕は背後を振り返った。其処には妹よりもまた少し幼いかという年齢の少年が立っていた。明るい栗色のショートヘアに、ターコイズブルーの瞳、フランス人形のような可愛らしい顔に微笑を浮かべ、一冊の文庫本を持った両手を此方へと伸ばしている。見た目でも判断は出来るが、流暢な英語を話す欧米の子である。アーガイル柄のセーターと深緑色のショートパンツ姿に、藍色のダウンコートを羽織っている。

僕は何事かと首を傾げた。人並みに英語は通じているが、その本が一体何なのかと不思議に思いつながら、取り敢えずそれを受け取る。「探してるんでしょう？そういう本」

「え？」

少年の言葉に、僕はその本の背表紙に書かれてあるあらすじを見て驚愕した。それは小さな村に住む青年が化け物に連れ去られた妹を救うべく、決死の旅に出るというファンタジー小説であった。まさに僕が探していたものだ。喜び勇んで少年を褒めてやりたい気持ちもあつたが、僕はそれ以上の不審さを募らせていた。何故、少年は僕の探していた本が判つたのだろうか。口に出したつもりはなかつたが、無意識に呟いていたのだろうか。

「ボクは他人よりも人の感情に敏感なだけです」

少年はそう言つて屈託なく笑つた。本当に、それだけだろうか。まさか、これが読心術というやつか。そういつた科学的根拠のない現象や存在を信じない僕としては、その可能性は否定したい所である。僕は怪訝な表情を浮かべて少年を注視していた。

とはいえ、目的のものが見つかり、内心助かつてはいた。少年のお陰で妹へのプレゼントが手に入ったのだ。そこは素直に感謝すべきである。

「有り難う、助かつたよ。君、名前は？」

僕はその場に屈み込み、少年を見上げて礼を言つた。少年は心底嬉しそうに満面の笑みで大きく頷いて見せた。

「リック」

「リックか。礼に何かあげるよ。何か欲しい物はないかい？」

書店に居るといふ事は、目当ての本があるといふ事なのだろう。僕は謝意のつもりでリックと名乗る少年に訊ねた。ただ、本ではない違う物をせがまれてもしたらどうしよう。高貴な印象を受ける少年だ、ブランド物なんて頼んではいけないだろうか。もしくはやたら高い蔵書なんて事も有り得る。いくら一般よりも高所得とはいえ、出会つたばかりの名前しか知らない少年に高額な物を買ひ与える程、僕もお人好しではない。少年の親御さんがどう思つかはともかく、川崎に知れば何と馬鹿にされるやら…。

そう思つた途端、リックの顔から笑みが消え、目を見開き少々驚

いた様に僕を見つめて来た。どうしたのだろうか。僕が英語の文法を誤ったのか、発音が悪かったのか、問いに答える様子はない。しかし、その一瞬後、少年はまた頬に笑窪を浮かべ、踵を返して走り出した。呆気にと取られていた僕は、出遅れながらも慌てて後を追う。本棚で作られた通路の角を左に曲がり、周囲に視線を巡らせたが、少年の姿は何処にもなかった。

僕は悶々とした気分で帰宅の途に着いた。リックが探し出してくれた本を、しっかりと小脇に抱えて。

少年は一体何者なのだろうか。単純な親切心からなのだろうか、その人よりも感情に敏感な点に僕は着目していた。本当に読心術ではないのだろうか。未だ科学的な証明がなされていない特異能力なんて、信じたくはない。因みに幽霊なんてもっと信じていない。それよりも人を殺したいと迄も憎み、第三者に殺害を依頼する様な存命する人間の方が、僕には怖く思えるのだ。まあ、結果的には本も手に入った訳だし、礼は出来なかったが、謙虚な少年の厚意に感謝し、あまり気にしない事にしよう。

玄関のドアを開けると、クッションフロアで丁度シャワーを浴び終えたであろう川崎と鉢合わせした。長袖の部屋着姿で濡れた頭にバスタオルを被り、僅かに湯気を立たせている。

「ただいま」

僕が声を掛けると、川崎はその場に立ち止まり、此方を正視した。相変わらずの無表情だが、何処か不穏な雰囲気を滲ませている。この感覚は久しぶりだ。湯上がりに僕がドアを開けた事で体が冷えてしまったのだろうか。僕は戦きながらどうしたのか訊ねると、彼は顔を伏せ、長く細い溜め息を吐いてから口を開いた。

「アンタは本当に誰でも連れて来るな」

「え？……！？」

川崎の言葉に、僕は初めて背後に気配を感じ、振り返って驚いた。閉まっただと思われたドアを片手で押さえた少年が、愛らしい笑みを浮かべて立っていたのだ。先程、書店で出会ったリックである。ま

さか、後を着いて来ていたのか？このマンションはオートロック式で、エレベーターは一機しかない。全くその存在に気付かずに行ったなんて有り得ない。それとも、それ程に僕は少年について深く考え込んでいて、注意を払っていなかったただけだろうか。

絶句する僕を余所に、リックは張り付いた様に笑みを崩さない。それが却って不気味にすら思えた。

すると、リックは眉尻を下げ、今にも泣きそうな顔をして俯き出した。

「やっぱり、貴方もボクを不気味だと思っただけですね」

マズイ、既に見抜かれていた。本当に読心術の使い手なのかはともかく、リックを前に取り繕うのは無駄だ。考えれば考える程に深みに嵌まるのだ。

「誰だ」

川崎に訊ねられ、僕は簡潔に経緯を説明した。妹のクリスマスプレゼントに相応する本を、口に出さずとも探し当ててくれた少年だと言うと、彼は一瞬眉間に皺を寄せ、少年を鋭い目付きで睨んだかに見えた。

「そう思われるのには慣れてるんだろう」

川崎の発言に、僕は呆然としてしまった。子供に何て事を言い出すのやら。更に泣く事を助長させてどうする。慌ててリックの方へと向き直ったが、少年は大きな瞳を潤ませるだけで、ただ川崎をジッと見つめていた。シヨックを受けている訳でも、腹を立てている訳でもなさそうだが、今の心情を表すならば、「無」であった。

「とにかく、立ち話もなんだから、上げてやれ」

川崎は心底呆れた口調でそう言うと、踵を返してリビングへと行ってしまった。一瞬見せたあの顔は、何だったのだろうか。彼もまた、得ても確証も知れない少年の能力を警戒しているのだろうか。

リックは目頭を指先で拭いながら、リビングのドアを見つめていた。川崎の了承を得て（とはいえ、此処は僕の家だが）、僕はリックをリビングに通した。不本意とはいえ、少年を泣かせてしまったの

だ。詫びの印に何かジュースでもご馳走してやりたい。が、家には子供が好んで飲む様な物は置いてないという事を、リックをソファに座らせてから思い出した。室内には珈琲の芳ばしい香りが漂っている。川崎の立つキッチンを覗いてみると、彼はトレイに角砂糖の入った小瓶とミルクを乗せ、珈琲が入るのを待っていた。僕も彼もブラック派で、もしもの来客用に常備しているそれらを出しているという事は、リックの為に用意してくれている様だ。案外、気の利く奴である。

僕はリビングに戻り、リックの横に並んで腰を下ろしたが、暫くは言葉を発する事なく黙り込んでいた。男同士とはいえ、相手は子供。恐らくは10歳前後だろうか。あまりの年齢差に話のネタが浮かばないのだ。唐突に何か訊ねて気分を害させてしまわないかと思うと、下手に話題を振れない。そんな心の葛藤でさえ、少年にはお見通しなのかも知れない。大人の威厳も何もない。リックは涙を止め、物珍しげに室内を見渡している。

「あ、そうだ」

僕はソファの脇に置いてあった紙袋を持ち上げ、中からあの本を取り出した。簡素なラッピングを施した小さな本である。

「君がくれた本を買ったんだ。探すのに苦労したと思うけど、読んだ事はある？」

現時点で僕達の共通の話題といえば、先程の本しか思い当たらなかった。僕は努めてゆったりとした口調でリックに話し掛けた。僕の不慣れな英語が通じなかったのかも知れないという配慮の下である。少年は漸く笑顔を取り戻して頷いた。

「フランスを舞台とした吸血鬼の話です」

「吸血鬼……。怖い？」

「そこ迄は怖くないかと……。海外特有のちょっとしたホラーの要素もありますけど、最後は泣けますよ」

海外特有のホラー？泣ける？妹に読ませても大丈夫なのか不安になっっていると、川崎がトレイを手にとって来た。何と無く会話を中

断させ、彼の動向を見守っていると、リックの前に湯気の立ったマグカップと、角砂糖、ミルクを置き、

「熱いから冷まして飲めと伝えてくれ」

と、僕に言った。

「英語は出来ないのか？」

「ヨーロッパの方なら解るんだけどな」

川崎はそう弁解しながら、トレイに乗っていたもうひとつのマグカップを手に、僕達と距離を置く様にダイニングテーブルの椅子に腰掛けた。

「…僕の分はないんだ？」

「飲みたいなら、もうひとつマグカップ買って来い」

「……」

やっぱり気が利かない。この家にはマグカップが2個しかないのだ。普通、来客には勿論、それをもてなす人間に渡さないか？僕は恨めしく思いながら、平然と珈琲を啜る川崎の横顔に冷たい視線をくれてやった。リックが横で淑女の様に上品に指を口許に添え、クスクスと小さく笑っている。

思えばこの少年、喋れずとも日本語を理解している様だ。僕達のやり取りを見て笑っているし、僕の心を読むには、そうでないと解らないのだ。親切に英語で黙考している訳がない。

「日本語は発音が難しく喋れないけど、大体の意味は解ります」

僕は愈々読心術という特異能力を、この身を以て信じざるを得なくなってきた。人の表情や仕種だけで今の疑問を正確に読み取るなんて、読心術でなければ不可能と言えよう。こんな子供相手に、僕はすっかり参ってしまった。

「いつから、その能力を？」

口にせずとも結局はバレてしまうのだ。もう訊きたい事は包み隠さず訊いておこう。僕は最早開き直った気分だ。訊ねた。

「ずっと…、多分、元々です」

砂糖とミルクをありったけ加え、ミルクラテになった珈琲にテイ

「スプーンで円を描きながら答えた少年の顔からは再び笑みが消え、暗い影を落としている。

「ママがボクを嫌いな事も知ってた。心の声を口にしたら、いつも以上に暴力を振るわれた」

過去の古傷を抉られ、リックは沈痛な表情を浮かべ、顔を伏せた。少年にそんな過去があつたなんて、予想だにしなかった。人と違う、それだけで生きる上での障害は計り知れない。恐らく、母親だけではなく、周囲の人間からの白眼視に晒され、今迄生きて来たのだらう。僕は配慮に欠けた質問を投げ掛けてしまった事への自責の念に、閉口した。

「でも、この能力を悪くないと言ってくれる人が居るので、大丈夫です」

僕の心情を察してカリツクはすぐに顔を上げ、子供らしからぬ大人びた表情を浮かべて見せた。何とも敢然とした態度に、僕の方が救われてしまった。

川崎は此方に興味を示す事もなく、新聞を読み耽っている。まあ、英語が通じないのだから聞いていても内容の殆どを理解出来ないのだから。この幼くして精悍な少年の生き様を理解出来ないだなんて、可哀想な男である。ふと気付くと、リックは何やら好奇心に爛々と輝く眼差しで僕を見つめていた。

「何？」

極力穏やかな口調で訊ねると、少年はねだる様に声色を変え、

「さつき、何か欲しい物はないかって言いましたよね」

と、言い出した。何だ、通じていたのか。てつきり聞き取れていないのかと思っていたのだが、そうであればあの時の驚いた顔は何だったのだろうか。まあ、一度口に出した言葉を戻すつもりはない。

男に二言はないのだ。少年に至っては、思っただけでも拾われてしまうのだから。

「ああ、あまり高くない物なら良いよ」

「お金はかかりません」

率直に意見する僕に、リックは頭（かぶり）を振って答えた。金のかからない物？何だろう。家にある物だったら、ちょっと困るな。僕は恐る恐る訊ねた。

「何だい？」

「あのお兄さんの記憶」

ホンの数秒間、時間が止まったかの様な錯覚が訪れた。リックがそう言っ指差したのは川崎であった。少年は至って真面目な顔付きである。冗談を言っている訳でもなさそうさ。

しかし、記憶とは一体どういう事なのだろうか。僕は眉を潜め、少年を凝視した。記憶なんて貰ってどうするのだろうか。否、それ以前に、どうやって記憶を貰うというのか。よくエッセイやドキュメンタリーの本や映画なんかを見たり、人の話を聞いて教養を高めたりするとは聞いた事がある。人生に於いて自分が体験し得ない事を他人の経験を通じて学ぼうという事だ。その年で勤勉だなど感心していたのだが、少年は首を左右に振って見せた。そういうつもりで言った訳ではないらしい。ではどういふつもりなのだろうか。「あのお兄さん、全く心が読めないんです。こんな事、初めて」

「心が、読めない？」

「はい。何も聞こえない。まるで…意思を持たないロボットの様に」
そんな事が有り得るのだろうか。以前の僕なら、川崎は血も涙もない冷酷非道な男だから、確かにロボットみたいに僕も解せないと笑い飛ばしたであろうが、今は違う。僕は彼の不器用な優しさに触れた。義理堅い人情深さを知った。涙を見た。その彼に、感情がない筈がない。ロボットなんかじゃない、人間なのだ。リックに心を見透かされぬ様、常に無心を貫いているというのだろうか。そんな術があるとしたら、是非ご教授願いたい。

「何だい？」

食い入る様な僕達の視線に気付いたのか、川崎が此方を振り返り訊ねて来た。後ろめたくはあったが事情を説明した後、彼は珍しくその表情を変えた。リックの存在や能力を怪訝する様な、疑念を含

んだ眼差しで、少年を注視している。明らかに敵意を向けているのだ。少年とクッションフロアで出会った時と同じ禍々しく不穏な才一ラを纏い、獲物を仕留めようとすする獰猛な獣の様に、今にも飛び付いて来ないかと危惧してしまう程だ。

「要はアンタが表情豊かで、感情を読み取り易い事が証明されただけの事だ」

「それ、褒めてるのか？」

「大方な」

それ以外にはどういう解釈をすれば良いのだろうか。馬鹿にされているのか、感心しているのか、はたまた羨ましく思っているのか。あまり良い見解ではなさそうだが。椅子から立ち上がり、此方へと向き直る川崎を見つめながら、リックは困惑した表情を浮かべ、あからさまに動揺している。

僕や今迄出会った人の心は読めるのに、川崎の心だけが読めないとはどういう事だろうか。人並みに感情と表情が比例して表に出る僕に対し、そうでない川崎との違いとなれば、並外れた洞察力で表面的な部分から感情を予知し、言い当てただけに過ぎなくなってしまう。それはそれで僕には信じ難かった。どう考えあぐねても、心を読んだとしか思えない少年の数々の発言がそれを物語っている。

おまけに、川崎の推測が正しければ、今の彼の表情から窺える感情なんて、手に取る様に解る筈だ。しかし、少年は顔を強張らせ、ぎこちなく首を振っている。彼の心が読めない。そんな嘘を吐く理由もないだろうし、それを演じているとも思えない。今迄は当たり前が出来ていた事が出来ない。その事に対して純粹にショックを受けている様だ。

「そうだな、その能力を証明したいと言うなら…」

川崎は此方へと歩み寄り、リックの前に膝をついた。そして、凄みのある威圧的な目付きで少年を見据えながら、

「見てみるよ、俺の記憶を」

と、挑発的な言葉を放った。

リックは当初、川崎の纏う異様な雰囲気には圧され、怯えた様に表情を曇らせて閉口していたが、やがて音を立てて生唾を飲み込むと、そのあどけない顔に強い意志を秘め、固く唇を結び、澄んだ瞳で彼を見下ろした。川崎もこんな子供相手に大人げないなと引き留めたい気持ちはあったが、このふたりから滲み出る真剣さに、口を挟む勇氣は僕になかった。

リックは細く白い左手の人差し指だけを残して拳を握り締め、その先を川崎の額に当てた。右手は自身の胸元に引き寄せ、集中力を高めるべく、キツく瞼を閉じた。

一方の川崎は目を伏せ、至ってリラックスしている様だ。大人が子供の遊びに付き合っただけでやっている、そんな光景にも見て取れる。これこそファンタジーの世界だ。こんな事で彼の記憶が読めるとでもいうのか。だが、もし仮にそれが出来るとするならば、彼の知られざる過去を僕も知る事が出来るのではないか。期待と不安を胸に、僕は半信半疑でその光景を傍観していた。

そのまま5分は経っただろうか。リックは眉間に皺を寄せ、諦念を含んだ溜め息を漏らし、瞼を開けた。やはり、川崎の記憶を読むなんて神業は出来なかった、そうだった様子である。しかし、その時であった。虚空を見つめていた川崎の灰色の瞳が、真水に着色した液体を垂らしたかの様に、じわじわと紫に変色し始めたのだ。目の錯覚や光の加減、見る角度の問題なんかではない。頭で解明出来る様な現象ではないのだ。少年も驚いてそれを注視している。啞然として眺めている内に、彼の瞳は赤みの強い紫色へと完全に染まり、ゆっくりと少年の瞳を捉えた。

その瞬間、少年は水を打った様に目を剥き、体は小刻みに震え始め、皮膚から大量の汗が噴き出した。半開きになった口の端から唾液が顎を伝う。まるで発作でも起きた様な状態だ。一体、何が起きているというのだろうか。僕はパニックに陥りかねない勢いで慌てふためきながらも、為す術もなく、ただ固唾を飲んでその動向を見守るしかなかった。

愈々リックの体が跳ね上がりそうな程に痙攣が激しさを増している。白目を剥き、滴り落ちる唾液もお構い無しに、まるで失神しているかの様である。川崎は特別手を下すでもなく、瞬きも忘れ、少年を見上げているだけだというのに。流星にこれ以上は危険な気がする。堪らず僕は恐怖と危機感に掻き立てられ、川崎の肩を掴もうと腕を伸ばした。

すると、川崎は素早くリックの左手首を掴み、自身の額から指を引き離れた。途端に痙攣が嘘の様にピタリと治まり、正気に戻った少年には脂汗と乱れた呼吸だけが残った。いつの間にか川崎の瞳も、普段の灰色に戻っていた。

「もう帰らせる。ばあさんが心配してる」

川崎は何事もなかったかの様に立ち上がると、そう言い残して自室へと引っ込んでしまった。彼は一体、リックに何をしたのだろうか。記憶は読めたのだろうか。読心術の真偽の程はどうだったのだろうか。今は沸き上がる疑問に答えを求めている場合ではない。

「大丈夫か、リック」

僕は少年の肩を揺すりながら訊ねた。暫く前屈みになって荒い息を吐いていた少年は、やがて呼吸が整うなりパツと顔を上げ、室内に視線を巡らせた。壁掛けの時計が午後5時を示しているのを見るや、

「いけない、もうこんな時間だ」

と言って、ソファから立ち上がり、慌てた様子で玄関に向かって駆け出した。

「リック？」

後を追って玄関に向かうと、ポールハンガーに掛けてあった自身のダウンコートを取り上げ、忙しくブーツに片足を突っ込む少年の姿があった。

「リック、帰るなら送るよ」

「お祖母ちゃんが迎えに来るんだ」

リックは心底焦った様子でブーツを履き終えると、サヨナラと言

い残して、ドアを開けて去って行ってしまった。僕は暫く茫然とその場に立ち尽くしていた。先程の件などなかったかの様に、そこら辺の普通の子どもと何ら変わらない様子で去って行った事が、とても不可解であった。

不可解と言えば、川崎の言葉もそうだ。僕は妙な胸騒ぎに、彼の自室の方を眺めた。

僕達の会話にも現れなかったのに、どうして川崎は、リックに祖母が居る事を知っていたんだ……。

『今月9日未明、区 町の筒浦メンタルクリニックから失踪した20代の男性は、一週間が過ぎた今日になっても、依然行方が判っておりません。……』

僕はソファに深く腰掛け、テレビのニュース番組を見るでもなく眺めていた。株価の大幅な下落、企業の縮小、幼児虐待、殺人事件、国外の戦争……。最近、世間を賑わせているのは、どれも暗い話題ばかりだ。否応なしに沈んだ溜め息が漏れる。その要因はテレビの画面から溢れんばかりの情報だけに留まらない。僕はキッチンで珈琲を淹れている川崎の背中を一瞥（いちべつ）し、再び息を吐いた。

あれから3日が経っていた。川崎が任務にあたっている間は頻繁に外出していて、顔を合わせる機会が極端に減る。3日前のあの出来事に関する疑問が解消されないまま、日夜ひとりで頭を悩ませているのだ。いつも僕が寝る寸前かその後には帰って来ると、彼の疲労を考慮し、睡眠時間を削らせて迄は訊く気になれないのである。

「何か訊きたそうな顔をしてるな」

湯気の立つマグカップを両手に持ち、川崎は無表情で歩み寄って来た。思い切り胸中を見抜かれてしまった様だ。僕はきまり悪く眉尻を下げ、彼を見つめながらそれを受け取った。川崎は僕の横に並んでソファに座り、テレビの画面を眺めている。

「川崎は、リックの能力をどう思う？」

「そんな事か」

彼はさも意外そうな口調で返してから、少し間を置き、

「真偽の程は定かではないが、俺は本物だと思う」

と言った。予想外の答えであった。彼はリックの能力を初めから信じていないと思っただけに意表を突かれたのだ。科学的根拠のない能力を現実の観点から否定していた3日前にも、そう思っていたとでもいうのだろうか。少年に記憶を読んでみると挑戦的な態度を示したのも、それを証明する為ではなかったのか。

「あの少年の能力については、アンタの方が理解出来てるんじゃないか？」

川崎にそう言われると、確かに正論である。心を読まれる事になった彼に対し、僕の心は筒抜けだったのだ。経験者は語るという事だ。しかし、そんな言い方をされてしまつては身も蓋もない。読心術という特異能力の真偽を知りたくて訊ねたのに、断定的な答えではないのだから。

「リックは、本当に川崎の記憶が読めたのか？」

その問いに、川崎は眉間に縦皺を深く刻み、明らかに機嫌を損ねたと言わんばかりに険悪な表情を浮かべて見せた。訊くな、と無言の圧力を掛けて来ている事は一目瞭然だ。しかし、僕も引き下がるつもりは毛頭ない。それ程にも答えを望んでいるのだ。読心術の真偽も気にはなるが、それ以上に彼のあの時の状況と記憶への関心が強かった。彼の瞳が紫に変化した瞬間、一体何が起きたのか。少年の異常な体の変化、その後の不自然すぎる程の平常ぶり。あの間に川崎がリックとは異なる何らかの特異能力を以て少年の体内に何か施したとしか考えられないのだ。そして、その冷然とした灰色の瞳に映して来た記憶を、僕は知りたかった。

「……アンタになら、話しても良い」

一向に引き下がる気配のない僕に観念したのか、川崎は諦めた様子で顔を伏せた。しかし、その内から滲む禍々しく不穏なオーラが徐々に周囲を取り巻き始め、これから彼の口から放たれる事の深刻さを如実に表している。その位の事を僕に話してくれようとしているのだ。例えば僕が食い下がり続けたとしても、生半可な気持ちで教

えてはくれない事なのであろう。そこには少なからず、信頼されているという自信を持っても良いだろう。僕は内心歓喜に満ち溢れていたが、表面上はいつになく真剣に彼を見据えた。その姿勢に彼も安心したのだろう、小さく頷いて見せてから、薄い唇を開いた。

「アンタも知つての通り、アサシンというのは非法法の職、謂わば殺人そのものだ。捕まれば当然、罰せられる。殺人罪は勿論、住居侵入罪、銃刀法違反、脅迫罪……。クライアントに至っては教唆。万一、捕まったアサシンやクライアントが警察に自白なんてしてしまえば、世界のアサシンの存続も、クライアントの将来も危ぶまれる。そういつた危険を未然に防ぎ、依頼を確実に達成する為、俺達は様々な知恵と能力を得る必要がある」

まるで他人事のような淡々とした口振りに、僕は単純に本を読み聞かされている気にさえなつた。僕が以前、川崎に自身の素性を打ち明けた時、彼もまた同じ事を思つたのだろうか。

「身体的能力は単純に体に叩き込む事で習得出来るものが殆どだが、問題なのは心理的能力だ」

「心理的能力？」

それがどういつたものかが自分では理解出来ず、僕は眉を潜めて反駁した。川崎は珈琲を一口啜つてから、話を進める。

「心理的能力には種類も多々ある。通常、仮に任務遂行中に一般人に目撃された場合にのみ使うんだが……」

川崎は足を組み、両手の指を交差させて膝の上に置くと、此方に冷然とした眼差しを向けた。僕はまさに蛇に睨まれた蛙の様に息を飲み、次ぐ言葉を待った。

「あの少年の、記憶を消した」

川崎の瞳が一瞬、あの時と同じ様に紫に変色した気がした。僕は戦慄しながら凝視したが、その瞳はいつもの灰色のままであった。目の錯覚だつたのだろうか。

記憶を消す……。人の脳や精神を外部から操り、それを行うんだなんて、読心術よりも現実味のない事だ。まさかその瞳から、肉眼で

は確認出来ないレーザー光線を放ち、脳に影響を及ぼしているともいうのだろうか。そんな非現実的な能力、有り得ない。そんな事、昔の小説の中の話でしかないではないか。しかし、この川崎が冗談を言う様な人間ではない事も、理解しているつもりだ。

「そして万一、捕まった場合に内部情報を口外しない為、如何なる打者からの誘惑や心理戦に打ち勝つ為、俺達は洗脳を施されてる。洗濯屋と解体屋の話は知ってるだろ」

「ああ。今、その事を思い出してた」

「その類のものだ。だからあの少年には俺の心や記憶が読めなかったんじゃないかな」

何とも信じ難い話である。実在するかも定かではない集団の話を持ち出して解り易く説明してくれたのであるが、頭は更に整理がつかない。洗脳なんて、宗教や戦争時代の軍人じゃないんだから。

あまりにも馬鹿げた殺人鬼集団の裏事情に、僕は思わず鼻で笑ってしまったが、川崎は至って冷静だ。

「無論、かなり危険を伴う行為だ。要は人間の精神をハッキングする様なもので、一歩間違えれば相手の記憶どころか、精神そのものを破壊し、さながら廃人にさせてしまう恐れもある。習得するにも困難を究め、払う対価も大きい」

「対価？」

僕が聞き返すと、川崎は口を嚙み、瞼を閉じ、頭を垂れてしまった。次第に重苦しく緊迫した空気が肩に伸し掛かる。人間離れた心理的能力を得る為に払わねばならない大きな対価とは一体、何なのだろうか。想像も及ばない事実を聞かされたばかりの僕の思考では、次ぐ言葉を予知する事は出来なかった。

長い沈黙が続いた。川崎は未だに言い淀んでいるのか、項垂れたまま一向に顔をあげる気配はない。それ程に衝撃的な事を口に出さうとしているのは解るが、あまりにも勿体ぶりすぎやしないか。もう8分は待たされている。

「川崎……」

痺れを切らした僕は、少しばかり怖くはあったが、彼の顔を覗き込んでみた。男と女とも見分けのつかない端正な顔が、髪の間から見え隠れしている。僕の呼び掛けに応じる事なく、その目は閉じたまま、ホンの僅かな寝息を立てている。

って、寝てるのかよ!!

僕は心の中で盛大にツツコミを入れた。こんな深刻な話をしている最中に寝るだなんて、どういう神経をしているのだ。危うくブン殴ってでも起こす勢いで右手を振り上げたが、思えば彼は今、任務中である。心身共に疲弊している中、こうして僕に付き合ってくれたのだ。

僕は右手を引っ込め、小さく溜め息を吐きながら立ち上がった。自室のクローゼットに、使っていないブランケットがあった筈だ。ベッドに行く様にと起こすのも忍びないし、万一僕と同様に寝起きが悪かったら最悪だ。手が飛んで来ても可笑しくない。だからといって何も掛けずにこのまま放置していたら風邪を引いてしまうかも知れない。僕は妹の為に買っておいたベビーピンクのブランケットを川崎の肩に被せ、自分も寝る事にした。まだ胸にはモヤモヤとした濃い霧が立ち込めてはいるが、今すぐ知らねばならない事でもない。川崎が明日突然、目の前から居なくなれない限りは、いつかこの霧が晴れる時が来るのだ。

僕はリビングの明かりを消し、足音を忍ばせ、静かに自室のドアを閉めた。その瞬間、川崎が目を開けた事など露知らず……。

学校、図書館、美術館、森林公園。どれをとっても国内随一の規模を誇る施設が軒を連ねる朝比奈ニュータウン。オフィス街から車で約20分程の高級住宅街を取り込んだ其処は、世界的な不況や犯罪沙汰を微塵も感じさせぬ静閑さを持っている。一帯に住む人々は社会的地位を持つ大富豪ばかりで、世帯から金を徴収し、街ぐるみでセキュリティ管理をしているのである。

その中でも一際空高く聳え立つ高層マンションの一室。上層階にもなると街灯の明かりも、外の生活音も届かない静寂に包まれた空間である。広々としたリビングには価格もデザインも一流の家具類が、スタンドライトの淡い明かりに、ぼんやりと照らされている。特に目を引くのは、室内の一帖分を占める大きなオーディオだ。世界で最も支持されているメーカーの新品で、室内の至る箇所にスピーカーを配している。今そこからは一昔前に大流行したバンドの曲が大音量で流れている。聴く者によっては騒音とも捉えかねない程のポリウムだ。室内にスクランブル交差点でも作ったのかというイメージを抱いて頂ければ解り易いであろう。この大音量で隣人が怒り狂って怒鳴り込んで来ないのも、高級マンションと謳う程の防音設備が施されているお陰と言えよう。寧(むし)ろ上質な革張りのソファに身を沈める女の耳には、まるで子守唄の様に心地好く聴こえているのだ。その女は見る者すべてがハッと息を飲む程、魅力的な容貌をしていた。猫の様な大きな目は長い睫毛に縁取られ、鼻筋は高く通り、唇は柔らかくそうにふつくらとした厚みがある。背も高くスレンダーで、モデル並みの抜群なスタイルだ。恐らくこの女の微笑には魔性のものを感じさせ、誰もが惹き付けられ、憧憬の眼差しを向ける事であろう。

女は股を肩幅程に開き、両方の膝に左右それぞれの肘をつき、前屈みの状態である一点を見つめていた。生気を感じられない人形の

様なその姿には、この世を絶望視した喪失感が見て取れる。とても笑顔を見せてくれる様な雰囲気ではない。

室内に流れる割れんばかりの曲が、ラストスパートに向けて演奏が徐々にヒートアップしていく。焦燥感を掻き立てるドラム、高鳴る鼓動を彷彿とさせるベース、絶叫にも似たギター。それをバックに鳥肌の立つ酷く嘎（しわが）れた男の声が、渾身の思いをシャウトする。

女はおもむろに讒言（うわごと）の様に歌詞の一部分を口ずさみながら、それでも眼前の机上に置かれた錠剤を、いつまでも見つめていた。

「お願いします！お金はいくらでも払いますから！」

気迫のある甲高い女の声は、事務所の外側に居ながらも届いて来た。僕はビルの階段の一階と二階の踊り場で、それを聞いた。何やら刑事ドラマか何かで聞いた様な台詞である。身代金目当てで子供を誘拐された金持ちの親が、犯人にそんな事を言うシーンが良くある気がする。まあ、その後に続く台詞が、

「子供の命だけは助けて下さい！」
ではなく、

「彼奴（あいつ）を殺して下さい！」

となるのが、アサシンに殺害の依頼をするクライアントならではの言葉よう。

事務所内に充満する煙草の臭いと、あのむさ苦しい男の顔を思い浮かべるだけでも心底気が滅入るというのに、加えてあんなヒステリックなクライアントが中に居るとなれば、この場で踵を返して帰宅の途にも着きたくなる。何事に於いても相手に不快な思いをさせる程に自我を忘れて取り乱す人間は、僕は嫌いだ。好きという者も中々居ないであろう。あの状況で僕が割って入れば、事態は更に悪い方向へと向かいそうだ。取り敢えず、ほとぼりが冷めるのを待とう。僕は二階へと辿り着くと、事務所のドアの左側の壁に凭れ、入室のタイミングを見計らう事にした。

「もう結構です!!」

何度目かのやり取りの後、一際甲高い声が聞こえたかと思うと、床を蹴る様な荒々しいヒールの音が此方へと近付いて来た。嫌な予感がして、僕は素早く更に左に避けると、案の定ドアが勢い良く開け放たれ、ひとりの女が飛び出して来た。ドアは先程僕が立っていた壁に思い切り叩き付けられ、危うく嵌め殺しの磨り硝子が割れるどころか、僕に激突する寸前であった。女はダークブラウンのロングヘアを靡かせ、鮮やかな赤いピーコート姿で、僕の存在に気付く様子もなく、そのまま足早に階段を駆け降りて行ってしまった。僕は暫く茫然と女の去って行った階段を眺めていた。

「何だ、居たのか」

ドアを閉めに来たのであろう、ウィリアム章大(しょうた)が中から姿を現し、声を掛けて来た。自称・無造作ヘアをすべて後ろに撫で付け、黒いスーツにベージュのネクタイを締めた格好に、僕は面食らってしまった。来客をもてなすに相応する身形(みなり)ではあるが、その口調と険悪な表情からは不機嫌さが見て取れる。そりゃ面と向かってあんなにヒステリックに叫ばれば、誰でも腹が立つだろう。

ウィリアム章大に促され、入った室内は、あの嫌な臭いも然程(さほど)しなかった。窓を開けて換気しているからであろう。が、その矢先に彼はデスクの上にあった煙草の箱に手を伸ばしている。「ったく、マジあの女ムカつくな」

彼はすっかりご立腹らしく、ドカツとチエアに腰を下ろすと、煙草を口に啜え、先端に火を点けた。元々言葉遣いがあまり良い方ではないが、これ程クライアントに直接的な暴言を吐く事も珍しい。「何か気に食わない事でも?」

興味本意で訊ねてみると、彼は背凭れに深く身を沈め、デスクの上で足を組んで乗せてから、紫煙を吐き出した。

「水城透子を殺してくれと依頼して来たんだ」

「水城透子?」

その名は最近、急にメディアで取り上げられる様になり、世間を賑わせているから嫌でも記憶している。

水城透子と言えば、大手芸能プロダクション「F・T・F」が今世紀最強の歌姫として売り出している若手の女性歌手である。腰に届きそうな程のミルクティーブラウンの髪に緩やかなパーマをかけ、奥二重の垂れ目に、小さな可愛らしい唇の、小柄な少女である。少女、といっても年齢はおるか、彼女に関する個人情報は一切公開されておらず、口数の少なさも謎を秘めた存在として人気が高まっている。いつもピンクやパステルカラーの服を着ていて、お姫様と囃し立てられているとか。正直、歌手というよりはアイドル的な位置付けにあり、彼女を支持するファンも20代後半〜40代の男が大多数を占める。彼等の熱狂ぶりはある種の宗教団体で、彼女はまさに教祖だと言う評論家も居る。

たまに発する声と、歌声の違いも世間が注目している点である。普段は小鳥の囀（さえず）りの様に、甘く鼻にかかった様な声だが、歌うとなるとガクツとオクターブが下がるのだ。今世紀最強の歌姫と謳われているだけあって、声域の広さや綺麗なファルセットにビブラート、どれをとっても抜群の歌唱力である。それでいて、聴く者の脳裏に曲全体のストーリーをすんなりと思いつ描かせる、そんな神憑りな声の持ち主なのだ。

……誤解しないで頂きたいが、以上の水城透子に関する情報は僕の予備知識ではない。更に言っておくと、僕はロリコンでもない。これだけの情報は、僕が彼女の名を口にした際、語尾に疑問符を付けた事で、その存在を知らないと思われ、ウィリアム章大が教えてくれた事である。彼は息つく暇もなく知識をひけらかすと、満足げに煙草を口に啞えた。先程吸い終えたばかりだというのに。

まあ、芸能人に詳しくない僕でさえ、先月下旬に発売された彼女のクリスマスソングが4週連続1位を記録し、テレビでも街頭でもそれが流れているのは知っている。

「今の女は松平佳澄とかいう、その水城透子の現場マネージャーら

しいんだが、理由も言わず、ただ殺してくれの一点張りだ」

ウィリアム章大は窮屈そうにネクタイを緩めながら、苦々しい表情を浮かべている。あまりにも理不尽なクライアントの要求に苛立っているのであろう。

彼は来る者拒まず精神で単純にすべての依頼を請け負う訳ではない。ターゲットの喪失により起こり得る公私に渡る損得を考慮した上で、依頼を請けるか否かを見極めるのである。確かに、今回のターゲットは売れっ子の歌手とあって、その損失はかなり大きいであろう。プロダクションだって痛手を負う事になるし、信者（ファン）達の精神的ダメージも計り知れない。それはクライアントとしても、例外ではないのだ。そういった明らかな損失を判断し、彼も依頼を断つたに違いない。

「困るよな、透子ちゃんがこの世から居なくなるだなんて」

「え？」

「もし他の仲介業に依頼されて透子ちゃんが殺られたら、俺そいつ突き止めてアサシンも仲介業もろとも殺しちゃうな」

「……はい？」

至って真顔で話す彼に、僕は呆気に取られ、間の抜けた声で返していた。否、まあ、間違はなく困るんだろうな、関係者は。

で？何故に貴方が困るといのか。万一ターゲットが殺害されたら、何故に貴方が仇討ちをするといのか。僕は事態を把握した途端、敢えてこれ以上の口出しはしない事にした。居たよ、此処にも信者が……。売れっ子は大変だが、お陰で命拾いしたんだろうな。

恐らく彼は今回、水城透子のファンという超個人的な立場で依頼を断つたに違いない。理不尽なのはどっちだ。頭が痛い。

僕は鞆から先日川崎が請けた依頼の事後報告書を提出し、早々に退室した。あのクリスマスソングを口ずさむ信者を残して……。

ビルを出ると、凍てつく冷たい風が剥き出しの肌を刺す。僕は寒さに身震いしながら、不意に空を見上げた。其処には灰色の厚い雲が翼を広げ、更にも上の青空を覆い尽くしている。その無彩色の景色

を眺めていると、この寒さが一層厳しさを増す様である。残り一週間を切ったクリスマスも、こんな曇り空の下で過ごす事になりそうだ。

「おーい！ちょっと待ってくれー」

その時、頭上から聞き慣れた男の声が降り掛かって来た。振り返り、ビルへと向き直ると、開いた窓からウィリアム章大が顔を覗かせていた。その手には、A4サイズの紙が握られている。

「報告書に川崎のサインがないぞー」

彼の言葉はまだ続いていたが、僕は視界の上部にちらつく何か気がなり、更にも上へと焦点を合わせて絶句した。ビルの屋上に、人が立っているのだ。落下防止用の柵を乗り越え、身を乗り出し、地上を見下ろしている様に見える。顔は確認出来ないが、あのダークブラウンのロングヘアに赤いピーコートは、先程事務所を飛び出した女ではないか！

僕は慌ててビルの中へと引き返し、階段を駆け上がった。どうしてこの建物にはエレベーターがないのかと、初めて苛立った。あの女、まさか依頼を断られた事で此処から飛び降り自殺でもしようだなんて……、考えているだろうな、あの様子は。僕は全速力で5階迄を走った。どうか間に合ってくれ！

屋上の扉を開け、急いで周囲を見渡すと、道路に面した柵にしがみつき、顔を伏せて屈み込んでいる女の姿があった。僕は其処に居るといふ事に少し緊張を解しながら駆け寄り、冷風に晒され赤くなつた手に触れた。冷たい。すっかり感覚がなくなっている様だ。

「何やってるんだ！こっちに来い！」

僕が強い口調で呼び掛けると、女はハツとした様子で顔を上げた。細い切れ長の目に低い鼻、薄い唇と、これといって特徴のない顔で、フレームのない楕円形の眼鏡を掛けた30代程の女である。恐怖と驚きと悲愴の入り交じつた複雑な表情を浮かべ、体を小刻みに震わせている。

「……どうして」

「…え？」

女は喉から絞り出す様に、苦し気に呟いた。言葉の意味が解せず、首を傾げる僕を、光に翳したビー玉の様な潤んだ瞳で見つめている。「どうして、止めるの…」

引き留められた事に対して何処か非難する様な口振りである。見ず知らずの人間がこれからなそうとする行為を何故阻止しようとするのか、純粹に訊いている様にも受け取れる。僕は少々躊躇ったが、意を決して本心を打ち明けた。

「赤の他人だろうと何だろうと、目の前で死なれては夢見が悪い」僕は努めて穏やかに、しかし真剣な口調でそう言い切った。自分勝手な理由なのは重々承知している。今日初めて会って、まだまともな会話もしていない人間に、見知った間柄と同様の思いを抱けというのは無理な話である。川崎や妹の危篤に「死ぬな」と言うのでは訳が違うのだ。かといって、素性も知らない人間に対して「お好きにどうぞ」なんて言う程、僕は無神経ではない。偽善者を演じるつもりはない。故に正直な理由ではあった。

女は暫く茫然自失といった様子で僕を正視していたが、やがて眉尻を下げ、唇を固く結び、顔を伏せて嗚咽し始めた。どうやら其処から飛び降りる気は失せた様だ。僕は安堵の溜め息を漏らし、女が泣き止むのを待った。

その後、泣き止んだ女は冷えきった体で何とか柵を上って此方側へと戻って来た。元々化粧は薄い様だが、涙でアイラインが消えてしまい、先程より目が若干小さく見える。極度の寒がりである僕も歯がガタガタと震え出し、彼女が戻って来るや否や、一緒に近くのカフェへと暖を取りに向かった。どうも事務所には引き返し難い雰囲気があったからだ。幸い、道路を挟んで斜め向かいに小さなカフェがあり、僕達は淹れたばかりの熱い珈琲で身も心も落ち着かせた。「どうも、お騒がせしました…」

マグカップを両手に持ち、大事そうに珈琲を少しずつ啜っていた女が、心に余裕が出来たのか、心底申し訳なさそうに肩を竦め、伏

し目がちにポツリと呟いた。先程のヒステリックな態度と、自殺を目論んでいた勢いは、今は全く見受けられない。普段は物静かな性格なのだろう。木製の固い椅子に腰掛け、内心本当だよと思う反面、僕はすっかり安心していた。

「松平さん、だっけ？もう大丈夫なのか？」

「ええ、大方……」

僕の問いに、松平佳澄は此方へと視線を移し、小さく頷いた。酒焼けでもしたかの様な、酷く嘎れた声である。まだ若い（といって僕よりは年上なのだろうが）勿体無い。しかし、彼女の声には何処か聞き覚えがある。

僕は小声で自身が或るアサシンの代理人である事を明かしてから、「どうして、水城透子の殺害を依頼したんだ？」

と、訊ねてみた。先程は感情が昂ってしまい、会話が成り立っていなかった様だが、落ち着きを取り戻した今なら、ターゲットの殺害を依頼した理由を話してくれるかも知れないと思ったのだ。どの道、ウィリアム章大に話した所で、無理だと一蹴されてしまいかねないのだが、僕は本当の第三者という意味では、理解出来るかも知れない。

松平はマグカップの中で小波を立てている珈琲をジッと見つめ、押し黙っている。余程言い難い事なのであろう。相当な頑固者である。そこで僕はターゲットの喪失により起こり得る損得を説いてみた。芸能プロダクション、ファン、松平自身にとっても大きな損害があるのではないかと、持論を述べた。

「それでも、殺して欲しいのか？」

松平は暫く考え込む様に眉間に皺を寄せていたが、何か思い立った様に顔を上げ、僕を見据えた。

「じゃあ、西島をターゲットにすれば良いの？」

「西島？」

松平は神妙な面持ちで頷いて見せてから、

「『F・T・F』の社長で、元『VICE』のボーカルの西島淳也

よ

と、付け加えた。その西島淳也という存在が何故浮上したのか、僕には解らなかった。

「どういう事だ？詳しく聞かせてくれ」

「……え？」

僕が同じ事を訊こうと口を開いたと同時に、横から声が聞こえて来た。顔を上げると、其処には長身の外国人が立っていた。僕と松平は間の抜けた声を揃え、その人物を凝視した。ウィリアム章大である。彼は渋面で険悪な雰囲気を滲ませている。一体、何故此処に？

「西島淳也つて奴と透子ちゃんがどういう関係かと訊いてるんだ」

「特に深い付き合いでは…。今回の透子の新曲を手掛けたのが西島というだけで」

「あ、そ。なら良い」

ウィリアム章大は心底安心した様にホッと胸を撫で下ろし、僕の横に腰を下ろした。何なんだ、唐突に現れおいて。話を聞きに来たのなら、公私混同せず、しっかり仕事をして頂きたい。

松平によると、西島淳也というのは一昔前に大流行した「VIC E」というバンドで一躍人気を博したミュージシャンであり、水城透子の所属する芸能プロダクションの社長でもある。今でも様々なアーティストの楽曲活動に参加したり、バンドのツアーグッズのデザインもしているという、この業界では名の知れた鬼才なのだから。30代後半にしてアスリート並みの引き締まった体躯に、獣の様な危なっかしい顔付きと酷くハスキーな声で世の女性を魅了し、バンドは今でも語り継がれるという。聞けば一度は耳にした事はあるヒット曲を数多く持っているらしい。

しかし、どうしてこの場面で西島の名前が挙がったのだろうか。松平は当初、ヒステリックになる程に水城透子の殺害を依頼して来たのに、この期に及んで西島に変えれば良いのかという発言も変だ。この3人の間にはどういう因果関係があるのだろうか。

「もうこんな時間…。すみません、また日を改めて来ます」

不意に松平は自身の腕時計に視線を落とし、慌てて立ち上がった。バッグから財布を取り出し、珈琲の代金を払おうとしているが、僕も腰を上げ、それを制した。

「僕が払う。ただ、受け取って貰いたい物がある」

怪訝な表情を浮かべ、首を傾げる松平を待たせ、僕は鞆からメモ帳を取り出すと、スーツの胸ポケットに挿してあるボールペンを引き抜き、それに走らせた。僕の携帯電話の番号を走り書きすると、彼女へと手渡す。ウイリアム章大に叱責されるかと思ったが、彼は煙草を口に咥え、ウイイトレスに火種を貰おうと店内を見渡している。恐らく、解つていながら見過ごしてくれているのだろう。

「また時間が出来たら、僕に連絡を」

松平は真剣な顔付きで頷いて見せると、此方に頭を下げ、急いでその場から立ち去って行った。

正直、今回の件についてはウイリアム章大が許可を出さないとはいえず、彼女の話には耳も貸さないとと思う。だが、僕は納得がいかないし、また彼女が身投げでもしたらと思うと、そのまま見送る事は出来なかった。

「代表」

「何だ」

ウイイトレスからマッチを受け取り、煙草の先端に火を点けたウイリアム章大へと、僕は声を掛けた。彼もまた事態を把握したらしく、妙に微笑を浮かべて返答した。

「もしまた彼女が来たら、教えて頂けませんか？」

何故、水城透子を殺して欲しいのか。仮にそれが拒否された場合、何故西島淳也にターゲットを変更したいのか。一体、何の為に殺す必要があるのか。理由もなしに簡単に依頼を請ける訳にはいかない。もしかしたら、松平は別の仲介業に依頼を持ち掛けるかも知れないが、何処かでそれはないという妙な自信があった。僕自身、その理由を訊かれても答えられないのだが。

「…解つたよ」

彼は僅かではあるが、楽しげに頷いて見せた。彼にも気付いているのかも知れない。僕は間接的に、彼女を以前から知っている事にもその夜、テレビの音楽番組に渦中の水城透子が出演していた。チャンネルを変えていたらたまたま映っただけなのだが、日中の一件もあり、僕はそれを見てみる事にした。それ迄は背凭れにダラリと寄り掛かってリモコンを握っていたのだが、気付けば僕は会議に参加しているサラリーマンの様に姿勢を正し、テレビの画面を正視していた。

水城透子はクリスマスを目前に控え、フリルとレースをふんだんにあしらったミニドレス、ベビーピンクの薔薇のコサージュ、パンプスといった姿で、至る箇所にアクセサリーを散りばめ、さながら雪の妖精を模した所だろうか。司会者とのトークの大半は一言で返すだけで、殆ど言葉を発する事なく続いた。当人の個人情報は一切が非公開とあって、自身の素性を明かさぬ様にと口止めされているのかも知れない。終始落ち着きなく目線を泳がせ、その場を取り繕うと、ただ愛想笑いを浮かべているだけの様に感じるのは、僕だけだろうか。まあ、世の信者達はこの悩ましげな表情を見て、今まさにエールとラブコールを送っているのである。スピーカーからも野太い男達の声が聞こえて来ている。もしかしたら、罪のない司会者に野次を飛ばしているのかも知れない。

「アンタ、この歌手のファンなのか」

先程迄、夕飯の時間になっても自室で眠っていた川崎が、起きて来るなりテレビの画面を食い入る様に眺めている僕を見て、ソファの後ろから訊ねて来た。普段はニュースかドキュメンタリー番組しか見ない僕が、と驚くのかと思ったが、案外いつも通りの抑揚のない口調である。寝起きで感覚が鈍っているのであろう。

「知ってるのか？」

「残念ながら成人は超えてる様に見えるが」

「……。飯、温めて食べてろ」

どうやら川崎にとっての僕のイメージは、すっかりロリコンかシ

スコンになっているらしい。違うというのに……。今更訂正する気にもなれず、僕は洪面を浮かべながら、ぶっきらぼうにキツチンを指差した。彼は悪怯れた様子もなく、そちらへと姿を消した。全く、デリカシーのない男である。

そして、愈々（いよいよ）水城透子の歌が始まった。ステージは白と青のライトとスモークで幻想的な雰囲気醸し出している。オーケストラとコーラスを率いて、先月下旬に発売されたクリスマスソングが流れ出す。西島淳也が提供したという、あの曲だ。僕はソファから身を乗り出し、注意深く彼女の動きに目を見張り、耳をそばだててその歌声を聞いた。

素人見解だが、この歌声は本当に素晴らしい。音程の取り難い曲なのに、一分の狂いもなく、難なくこなしている。絶妙な声量の強弱なんて、ミュージカルの様に巧みに表現されているし、何より途切れる事なく綺麗なファルセットのロングトーンが決まっている。ウィリアム章大が言っていた神憑りな声というのも、強（あなが）ちファンの欲目だけでもない。鳥肌さえ立つ程の歌唱力だ。

水城透子の歌が終わると、番組は一旦CMへと移り変わった。僕は知らぬ間に全身に走らせていた緊張を解くべく、背凭れに身を委ねた。自然と大きな溜め息が漏れる。思った通りだ。

「随分と真剣に見入ってたな」

ダイニングテーブルの椅子に腰掛け、遅めの夕飯を口に運びながら、川崎は此方を見ずに声を掛けて来た。

「ああ。予想以上に、演技が下手だなと思って」

僕は肘掛けを使って頬杖をつき、彼の背中をぼんやりと眺めながらそう答えた。

アサシンの心理的能力程ではないが、メディアの洗脳というのはこうも凄まじいものなのかと、今更になって思い知らされた。そこ迄真剣に検証しようと思った人間は居ないのだろうか。否、僕のような素人でさえ判断出来たのだ、知っていながら公表出来ないという圧力を掛けられているのか、知った上でも支持する者の中には居る

であろう。或いはメディアの洗脳にまんまと錯綜され、真実を見る目が失われてしまったか。

あの神憑りな歌声は、水城透子のものではない。テレビの画面を見ながら歌を聞いてみると、彼女の口の動きと流れて来る声とが噛み合っていない場面が目立つのだ。当人は口を閉じているのに声が聞こえた箇所はふたつもあった。彼女が終始自信なさげな表情と態度を見せていたのは、僕みたいな勘繰り深い人間に、その事を知られる事への恐れか、単純に大きなミスをしなにかという焦りか。

まあ、これだけなら極度の上がり症故に、レコーディング中はちやんと歌っているが、人前に出る時はアテレコというスタイルを取っている可能性も考えられる。実際、バックの演奏は大半がそうなのだ。歌にだって同じ事が言えよう。しかし、僕はこの歌声の主を知っている。水城透子の現場マネージャー、松平佳澄だ。

あの腹から出した様な低い声と、普段の声を聞けば、大方合致する。飽く迄これは僕の憶測だが、もし本当なら、彼女が水城透子の殺害を依頼した理由も見当がつく。松平佳澄の歌唱力は誰もが認める程の素晴らしさだが、彼女を売り出すには問題があった。失礼な話だが、彼女はインパクトのある様な容姿ではなく、どちらかといえば地味なタイプだ。メディアに姿を見せずに活動する事も可能だが、どうせなら話題性のある会社の看板が欲しい。そこで白羽の矢が立ったのが、容姿は抜群に良い水城透子だ。松平佳澄の歌声に、水城透子の容姿とあれば、もう虎に翼であると考えた。しかし、松平佳澄としては面白くはないだろう。腹を立てた彼女は、アサシンに殺害の依頼をする…。

西島淳也に関してはどうだろう。彼は芸能プロダクションの社長、差し詰め「虎に翼」作戦を最終的に承認した事が、松平佳澄には納得がいかなかった、といった所だろうか。彼女にしてみれば、自分の手柄を他人に横取りされたも同然なのである。

「川崎」

「何だ」

僕が黙考している間に、川崎は夕飯を済ませ、キッチンで食器を洗っている。キッチンはリビングの隅の奥まった所にあるのだが、ソファがある位置からはシンクに立つ彼の姿が見えるのだ。

「もし、川崎が自分の手柄を他人に横取りされたら……」

言い終えぬ内に、キッチンから硝子の割れる耳障りな音が響いた。驚いてその場で身を乗り出し、キッチンを覗き込むと、川崎がいつになく戦慄してしまう程のオーラを放ち、此方を見据えていた。相変わらず無表情ではあるが、何処か怒気を含んだその顔付きに、僕は粟立ち、硬直した。

「何故、そんな事を訊く？」

「……」

しかし、内から滲み出る黒いオーラとは打って変わり、その声からは心なしか焦りを感じた。表には見せないにして、動揺している様だ。何故？こつちが訊きたいよ。

僕はもしもの話だと前置きしてから、日中に起きた一連の経緯を話した。どうやら誤解が解けたらしい川崎は、深々と溜め息を吐いてから、シンクに散らばったのであろう硝子の破片を拾い始めた。

「済まない、割ってしまった」

「良いよ、明日買って来る」

僕はそう言って再びソファに体を戻してから、先程の彼の言動を真剣に考えた。彼は僕の問い掛けに珍しく動揺していた。まさか、任務達成率100%を誇るアサシンが、他者に仕事を横取りされたなんて事があったのだろうか。否、始めた当初なら考えられなくもない話である。もしかしたら、彼にとって触れられたくない傷を、僕は抉ってしまったのかも知れない。彼に対する好奇心はあるが、あれ程の焦りを見せられては追及し難い。僕にだって人に知られたくない過去の失態はあるのだ。まあ、川崎には思い切り知られてしまったのだが（妹の部屋の事である）。

「…そのクライアント、松平佳澄とか言ったな」

硝子の破片を古新聞紙で包んでいた川崎が、唐突にそう言い出し

た。その口調は既にいつもの様子に戻っている。僕が肯定すると、彼は空（くう）を見つめ、暫く黙り込んでいたが、

「松平……、松平か」

と、独り言の様に呟いた。僕が怪訝な表情で眺めている事に気付くと、うなじに左手を添えて首を鳴らし、

「記憶違いかも知れない。忘れてくれ」

翌朝、僕は家事を済ませてから外出の支度をしていた。川崎が割った食器は、良く使うプレートだった為に、早い所買い足しに行こうと思っていたのだ。その間に何度も携帯電話の待受画面を確認してみたが、未だに着信はない。松平から連絡が来ないかと気になっているのだが、何せ売れっ子歌手のマネージャーである、そんなに自分に費やす時間もないのだろう。

身支度を整え、家を出ようとした矢先、僕は昨日ウィリアム章大から事後報告書を渡された事を思い出した。川崎のサインがなかった為に返されたのだ。こんな寒い中、何度も往復したくはない、用事は纏めて済ませておきたい。僕は鞆から書類を取り出し、川崎の自室のドアをノックした。「何だ」

案外、返事はすぐに来た。寝ている所を起こす覚悟でいたのだが、どうやら起きていたらしい。

「事後報告書にサインがなかったみたいなんだ」

「今出る」

川崎は数秒でドアを開けた。相変わらずの無表情で書類を受け取ると、一旦室内に戻りサインをしている。チラシと中を覗いてみたが、デスクの上にノートパソコンと何かの紙が束ねてあるだけで、他に今迄と変わった所はなかった。

「出掛けるのか？」

ボールペンを机上に残し、此方へと歩み寄りながら、川崎が訊ねて来た。既にトレンチコートを羽織っているのだから、どう見ても外出するのは一目瞭然である。

「ちょっと、買い出しに」

「俺も行って良いか？」

「はいっ？」

昨日貴方が割った皿を補充しますだなんて面と向かって言えず、そう答えると、彼は予想だにしない質問を投げ掛けて来た。川崎と一緒に買い物？ 今日こそは大雪でも降るのだからか。

「ペンのインクが切れそうだから」

「あ、ああ……。解った。じゃあ、待ってるよ」

あからさまに動揺する僕に、川崎は眉を潜めてそう言うと、ドアを閉めてしまった。ペン位、言ってくれば買って来るのに……。

川崎とプライベートで外出するだなんて、考えもしなかった。僕は付き合い始めたばかりの恋人の様に、彼が準備を終えるのを待った。

30分後、僕達は家を出てタクシーでショッピング街へと向かった。其処に行けば生活用品が何でも揃うのだ。衣類、食品、日用品、雑貨、家具家電等といった国内外の品々が売られている。クリスマス時期とあつてか、いつも以上に人が集まっている。

まずは川崎の為に文房具屋へと足を運んだのだが、彼は思ったよりも早く用事を済ませてしまい、僕の買い物付き合いをして貰う羽目となった。先に帰っても良いのにと言ったが、食品を買うなら荷物持ちが必要だろうと返して来た。確かに、大食いの彼との食材を運ぶのは大変なのである。本当に厚意で言ってくれたのか、単なる暇潰しかはさておき、次は食器を取り扱う雑貨屋だ。多種多様な食器が棚に整然と陳列されている中を、互いに思い思いに眺める。

僕は最初に本来の目的であるプレートを見て回った。大体同じ位の大きさのそれを手に取っては、厚さや深さを細かくチェックし、且（か）つデザインにも拘（こだわ）る。実用的なのは勿論の事、長く使うなら気に入ったデザインの物を選びたいのだ。とはいえ、ひとつにプレートといってもこの店には大きさや形、デザイン、素材の異なるものが多数揃っている。自分の気に入る品を発掘するのも時間を要する。黒いリーフ柄の白いプレートに決めた時点で15分は経っていた。

退屈してはいないかと店内を見渡し、川崎を探していると、彼は和風の食器の並ぶ棚の前でそれらを見つめていた。意外とそういう趣（おもむき）のある物の方が好きなのだろうか。当人は和が似合う様な容姿ではないが。否、着物は割と似合いそうだ。ちよつと平べつたいのが難点だが。

僕はその間に、今度はマグカップを物色する事にした。家には2個しか置いておらず、もしもの来客用に買い足しておこうとは前から思っていたのだが、「よし、来客用のマグカップを買いに行こう」というだけで態々（わざわざ）外出したりはしないものだ。こういう時のついでとして、つい後回しにしてしまい、いざという時に後悔するものである。

さて、どんな物が良いだろうか。シンプル過ぎては来客用として味気無いし、派手過ぎては使う側の気が引けてしまう。選ぶ者のセンスが問われる。プレート同様に、マグカップにも数十と種類がある。僕はそれらを見渡し、目を引く物を手当たり次第に持ち上げ、眺めていった。

漸くシルバーとグレーの花柄の洒落たマグカップを2個選んだ所に、川崎がやって来た。その手にはこの店の名前が印刷されたビニール袋を提げている。知らぬ間に会計を済ませていた様だ。僕はマグカップの入った箱を手に取ると、彼の横を擦り抜けてレジへと向かった。代金を支払い、共に店を出る。

「アンタにしては、センスあるな」

「余計なお世話だ」

妹の部屋を見ている川崎は、僕の選ぶ物があまりにも一般向けだった事に驚いている様子である。一応、リビングも川崎の自室も、あの家全体の家具類を揃えたのは僕なのだが……。妹の部屋だけを考えてそう言うのは勘弁して頂きたい。

「この後はどうする」

「後はスーパーに買い出しに行つてから、帰りに事務所に寄るよ」
折角理に叶う良い買い物が出来た事に喜び勇んでいた所での川崎

の心ない発言に気を悪くした僕は、彼の問いにあからさまに不機嫌な口調で返してやった。彼は全く悪気はないといった風で周囲に視線を巡らせ、何かに焦点を合わせると、

「先にもう一件、寄りたい所がある」と言つて、さつさと歩き出した。少しは謝罪の念はないのだろうか。僕は呆気にとられて盛大に溜め息を吐いてから、彼の後を追つた。

デパートのワンフロアに彼の寄りたい場所があつた。CDショップ、楽器屋、本屋が収まつたその場所に辿り着くと、彼は脇目も振らずに大音量で最新曲を流しているCDショップへと入つて行つた。何だ、好きなアーティストの新曲でも発売されたのだろうか。僕は店内を歩き回り、ふと目に付いた水城透子のポスターを眺めた。年末のカウントダウンライブの告知ポスターである。メディアへの出演にライブか、忙しいな。それは松平にとつても同じ事だ。売れっ子の歌手に仕事のオフアールがあれば、必然的にマネージャーも動かねばならないのだ。毎日仕事もせずに家で引きこもっているのも嫌だが、毎日仕事ばかりに忙殺される生活も嫌だな。と、他人事のように黙考していると、川崎が近寄つて来た。何かと思ひ視線を移すと、彼は手に持っていた一枚のCDを差し出して来た。……まさか良い年した大人が買ってくれとせがんでいる訳もなく、況してや彼の方がどう考えても金を持つているのだ。何か特別な意味があるのだろうと思ひ、それを受け取つてジャケットを見てみた。其所には見た事はないが、絵に描いた様な美女の写真があつた。猫の様な大きな目に、高い鼻と柔らかな唇。長い髪を濡らし、グラマーな胸元に見事な曲線美を惜し気もなく晒している。世のスーパームodelにも引けを取らない完璧な容姿の美女ではある。しかし、僕はその名前に見覚えはなかつた。こんな美女をメディアが見過ごす筈がない。

「IZUMI・M……知らないな」

率直にそう答えると、川崎は、そうだろうかと相槌を打つて見せた。今のはどういう意味なのだろうか。僕が芸能界に詳しくない事を察しての事だろうか。何だか馬鹿にされた様な気分である。

「昨夜、調べてみた。本名は松平泉美」

「マツヒラ…って」

川崎の言葉に、僕は驚いて声を上げた。再度ジャケットの美女へと視線を戻す。少し位は写真を加工してはいるだろうが、大体20代半ばといった所か。まさか、松平佳澄の親族なのか。それにしても、失礼だが顔が違い過ぎる。とてもあの地味な松平佳澄と、写真の美女とでは不釣り合いに思えてしまう。

「松平泉美には双子の妹が居るらしい。それがその松平佳澄かはともかく、彼女は2年前にデビューしたが、すぐに自宅で薬の過剰摂取で死んだ。恐らく自殺だろう」

一般的にこのご時世で歌手としての人生を歩む事が出来るだなんて、身に余る思いだと思うのだが。何故デビューして間もなく、自ら命を絶つ事となってしまったのだろうか。もし松平佳澄が双子の妹だとすれば、彼女の死に相当ショックを受けた事であろう。

川崎はこのCDが松平泉美の最初で最後の曲である事を告げると、「試聴してみると良い」

と付け加えた。想像するにこの美女の歌声はそれこそ聖歌の様に清らかで繊細なものである。しかし、この状況下でそんなつもりで彼がそう助言した訳ではない事は解っている。僕は店員に頼んでそのCDを試聴させて貰う事にした。逸る気持ちを抑え、ヘッドホンを耳に当てると、ウッドベースの心地好く鼓膜を震わせる音色が聞こえて来た。次いでオルガンとギター、ドラム、トランペットにサクソと、南国を思わせる軽快なジャジーな音が調和する。自宅で聴いていたら、つい体を揺らしてしまいそうなミディアムナンバーだ。普段好んで聴く曲というのではないが、僕はこういった曲調が好きなのである。

何度目かの小節の終わりに、フェルマータを過ぎた直後、耳に飛び込んで来た歌声に、僕は目を丸くして隣に立っていた川崎を見た。彼は僕の反応を予知していたらしく、此方へと小さく頷いて見せる。ヘッドホンから流れるその歌声は力強い低音から澄み渡る高音迄、

自在に行き来する。ビブライトもロングトーンも難なくこなし、リゾート地の広大な夕暮れの海を容易に想像させる神憑りな歌唱力であった。

僕は曲の途中でヘッドホンを外した。察していた疑問が、歌声を聞いただけで解消されたのだ。

松平泉美の声を実際に聞いた事はないが、それは松平佳澄の歌声そのものであった。彼女は水城透子だけでなく、この美女の声にもなっていたのだろうか。

「お目が高いんですね」

曲を聴き終えた為にCDを入れ替えに来た年配の店員が嬉々とした表情を浮かべて近付いて来た。僕が試聴スペースから少し避けると、店員はCDケースを弄りながら、

「『IZUMI・M』、このCDが発売された時の反響は凄かったですよね。今でいう水城透子に迫る勢いで世間を賑わせてましたから」

と、饒舌に話を進める。

「まあ尤（もつと）も、自殺したってニュースになった時の方が騒がれちゃいましたけどね」

店員は皮肉を込めて笑いながら仕事を終えて立ち去って行った。

芸能界には疎い僕でも、駆け出しの歌手の自殺がニュースになったとなれば一度はメディアを通して見聞きしている筈だ。しかし、僕にはその記憶が欠片も残っていないかった。川崎から聞いて初めて彼女の存在と死を知ったのだ。ついに健忘症にでもなったのだろうか。

「あ、そういえば」

話し足りないのか、手持ち無沙汰なのか、店員は再び此方へと向き直り、声を上げた。

「あの歌手、昔流行ったバンドのボーカルと付き合ってるだなんて噂も立ってましたよね。何だったかな、バンド名……」

「……『VICE』ですか？」

「そうそう！それです。今や大手芸能プロダクションの社長なんですもんね。」

まさかと思い挙げてみた名前に、店員は大きく首を上下に振って更に捲し立てている。その話を半分聞き流しながら、僕は言い知れぬ胸騒ぎに顔をしかめた。松平泉美と西島淳也の交際、自殺、水城透子の殺害を依頼しに来た松平佳澄……。絶対とは言えないが、一連の出来事が何処かで繋がっている様な気がする。過去の事件が今にも尾を引いている。俄（にわ）かな確信があった。

携帯電話に着信があった事に気付いたのは、CDショップを出た後であった。10分前に、知らない同じ番号から2件。僕は松平佳澄ではないかと思い、慌てて掛け直した。何度目かのコール音の後、出たのは何と知らない男であった。酷く嘎れたその声に、僕はつい面食らってしまった。

「もしもし……」

『はい』

「今、そちらからお電話を頂いたのですが」

『失礼ですが、どちら様でしょうか』

そう言われて素直にアサシンの代理人ですとは言えない。単なる間違い電話かも知れないのだ。ここはひとまず切った方が良くかも知れない。そう思った時、突然川崎が横から携帯電話を奪い耳に当て始めた。

「恐れ入ります。此方はサナダ宅配便の田中と申します」

僕は電話口の男よりも、川崎のその言動に啞然とした。いつもは抑揚のない低い声だというのに、人が変わったかの様に明るい営業トークの様なそれに早変わりしたのだ。まるで腹話術でもされているのかと思ってしまういかねない口調に、咎め立てする気力が一瞬にして消えてしまった。

「申し訳御座いません、今のは新人なもので。失礼ですが、松平佳澄様の携帯電話で宜しかったですでしょうか？」

『……そうですが』

まだ彼女の携帯電話かも定かではなかったにも関わらず、川崎の問いに、男はそれを肯定した。その声は僕の耳にも届いている。彼がハンズフリーに切り替えてくれたのだ。

「失礼、彼女が人目を避ける様にして電話してたのを見て、ついそちらに掛けてしまったんです」

男は溜め息混じりにそう言った。それが気になって彼女の携帯電話を勝手に弄るという事は、恋人なのだろうか。浮気相手かと思われたのかも知れない。随分な濡れ衣である。

「そうでしたか。とんでもないです。もしご面倒でなければ、本日お届けに伺った着払いのお荷物、お留守の様でしたので、お時間がある時に掛け直して頂きたいとお伝え願えますか？」

この川崎の口調、笑わずにすんなりと聞けている自分が不思議で仕方無い。相変わらずの無表情でその通販番組の社長の様なそのギャップに、普段なら腹が据れる程に爆笑していたのだったが、流石にそんな状況ではない。絶対、後々思い出し笑いに違いない。『解りました。此方の番号で良いんですか？』

「はい、これは社用なので退勤する時は会社に置いて行きますから、ご安心下さい」

『ええ、伝えておきます』

「あ、失礼ですけど、そちらのお名前をお聞きしても宜しいですか？」

『西島です』

川崎の助言にすっかり本物の宅配便だと信じた男は、苦笑しながらアツサリと名前を覚えてくれた。西島……。水城透子の所属する芸能プロダクションの社長であり、松平泉美と交際関係にあったと噂された、あの西島淳也なのか。僕は簡単に挨拶を済ませ、電話を切った川崎の顔を、神秘的な面持ちで見つめていた。彼は至って平然と携帯電話を返して来る。

何故、西島が松平佳澄の携帯電話を勝手に使っていたのだろうか。此方から掛けたのであれば、彼女が頼んで掛け直したというならば

話は解る。しかし、逆なのだ。いくら自分の会社の社員だからといって他人の私物を勝手に使うというのは、常識ではないだろうか。まさか、本当にふたりは恋人同士なのか。否、とはいえジャイアリズムを正当化する理由にはならない。

全く解らない事だらけだ。僕は混乱する頭を抱えながら、携帯電話をスーツの胸ポケットに戻した。ひとまず、松平佳澄に直接訊いた方が早いだろう。

随分思い詰めた顔付きでもしていたのか、ふと気付くと、川崎は何やら神妙な面持ちで此方を正視していた。相変わらず、感情の読み取れない無表情に、先程の似つかわしくない声色が脳裏を過り、つい口許がにやけてしまう。

「……もつと後先を見据えて行動した方が良い。突発的な行動が最悪な状況を招く事もある」

予想外の叱責に、緩んでいた口許が引き締まる。確かに、川崎があの時、咄嗟に配達員を装ってくれていなければ、西島に疑念を抱かれ、松平佳澄がすっかり問い詰められてしまいかねない状況に陥る所であった。

「……悪かった」

僕は顔を伏せ、素直に謝罪した。川崎は視線を逸らし、細く長い溜め息を吐いて見せると、ゆっくりと何処かに向かい、歩き出そうとする。

「もし、また電話が掛かって来たら、俺が出る」

「え……」

「その方が、西島からまた掛かって来た時にも対応し易い」

「……ああ」

確かにそうだ。相手には荷物の配達員の社用電話として、この番号を伝えているのだ。松平佳澄本人であれば、僕が教えたものだから瞬時に事態を把握してくれるであろう。また西島が掛けて来た場合にも、川崎が出てくれた方がスムーズに会話が進む。

「アンタが何のつもりでクライアントの素性を明かしたいかは知ら

ないが、協力位はする」

此方を振り返らずに、川崎は譚言の様にそう言った。

デパートの地下で食材を買い足した後、僕達はタクシーで帰宅した。リビングに辿り着き、荷物を床に置いたその時、胸ポケットに入っていた携帯電話が振動し、同時に単調な電子音が鳴り響いた。慌ててそれを取りだし、待受画面を見てみると、先程の番号から着信がある。すぐに川崎が事態を察したらしく、背後から携帯電話を奪い取り、それを耳に当てる。

「はい、田中です。……」

またもや偽名を使い、応対した川崎だったが、何やら相手側の声にピクリと眉尻を微動させた後、僕へと携帯電話を返して来た。どうやら西島ではない様だ。僕はそれを受け取り、電話を変わった。「もしもし」

『あ…、松平です』

「松平さん……」

声の主は、松平佳澄本人であった。つい安堵の溜め息が漏れる。

僕はすぐに電話に出られなかった事を詫びてから、「先程、西島という男が貴女の番号から電話を掛けて来た」

『西島が…？』

それを聞いた松平佳澄は、心底驚いた口調で声を上げた。が、まだ近くに人気（ひとけ）があるのか、すぐに音量をぐっと下げ、謝罪して来た。

『すみません、携帯電話を手離していたもので。ご迷惑をお掛けしました』

「否、良いんだ。その様子だと、本人からはまだ何も聞いてない様だな」

『ええ、私は…』

「そうか。電話をくれたという事は、何か言いたい事でも？」

『……』

僕はそう訊ねると、彼女は言い澁んでいるのか、人目を避けてい

るのか、押し黙ってしまった。用もなしに顔見知りでしかない僕に、電話を掛けて来る訳がない。番号を教えた所で、社交辞令として挨拶程度の電話をくれる様な間柄でもないのだから。僕は彼女の返事を待ちながら、率先して食材を冷蔵庫に収めている川崎の背中を眺めていた。

『もうすぐ仕事が終わるので、直接お会い出来ませんか？電話では…お話し出来ないのよ』

遠慮がちな口調でそう言う彼女の願いを断る謂われはなかった。もしかしたら、水城透子や西島を殺害したい理由が聞けるかも知れないのだ。僕は生唾を飲み込んでから、電話越しにも関わらず、頷いてしまっていた。

「解った。じゃあ…場所は」

待ち合わせの約束を決めると、僕は落ち着きなく電話を切った。

川崎は意外にも丁寧に食材を並べていく。電話の内容について、一切追及はしなかった。

「川崎、クライアントと話をして来るよ」

食材を冷蔵庫にすべて収め終え、扉を閉めた川崎に、僕はその声を掛けた。彼はゆっくりと此方を振り返った。心無しか、非難めいた表情にも見て取れる。確かに、クライアントやターゲットの個人情報や素性を知ろうとする事は、アサシン業務に携わる人間としては避けねばならぬ事である。それらのものに感化され、感情が左右され、私情を挟みでもすれば、業務に支障を来しかねないからだ。とはいえ、正直な所、僕はアサシンではない為、松平佳澄の心中を察したとはいえ、最悪な事態を招く事はない様に思えてしまった。寧ろ、僕が何を言っても任務達成率100%を誇るアサシンが、まさか依頼を棄権する訳もなければ、松平佳澄の意思を尊重し、ウィリアム章大が依頼を請けるかも判然としない状況なのだ。無論、僕なんかよりも仲介者の方がよっぽど私情を挟んでいる事は間違いない。

「アンタの言動を咎め立てる謂われはないが……」

そうは言っても、川崎の口調は何処か呆れている様だ。しかし、止めても無駄だと思っているのか、そう前置きをしたのだらう。現に、僕は川崎に何を言われても松平佳澄に話を聞きに行く心積もりであった。

「さっきの電話を考えてみる。ターゲットとなり得る人物が、クライアントの動向を警戒してる。気を付ける」

その然り気無い温かみを含んだ助言に、僕は緊張しながらも、感謝していた。万一、西島が松平佳澄の動向を警戒し、何か仕掛けて来るかも知れない。その事は念頭に入れておこう。

僕を乗せたタクシーは、夜の街を颯爽と駆け抜ける。オフィス街には疎（まば）らながらも人通りがあり、会社や自宅に向かって歩く姿が見受けられる。車道は帰宅ラッシュを過ぎた頃で、特にストレスを感じる事なく目的地へと進む。

松平佳澄が勤める芸能プロダクションのオフィスは、中心部に程近く、一際目を引く自社ビルであった。煌々と明かりが漏れる正面入口に佇む彼女を見つけると、僕は窓を開けて呼び掛けた。

「松平さん」

彼女は此方の姿を捉えると、小走りで近付き、促されるままタクシーに乗り込んだ。周囲に視線を巡らせてみたが、追っ手は居ない様だ。僕達は人目を避け、オフィス街から出たイタリアンレストランで降りる事にした。

店内は広々としていて、白いクロスが掛かった長方形のテーブルが整然と並んでいた。照明は少なく、机上の小さな燭台の蝋燭の火が微かに揺れている。イタリアの工芸品らしき物が所々に配され、メニュー表にはヒエログリフが描かれた拘りのある内装である。僕は壁に掛けられた模写されたヴェーナスの誕生を眺めながら、ウェイターに通されたテラス越しの席に腰を据えた。

突然、異国へとタイムスリップした様な気分になり、互いに気圧されたのか、僕達は食事というよりは話をメインにエスプレッソをオーダーした。

「お呼び立てしてすみません」 開口一番、松平佳澄は心底申し訳なさそうに頭を下げた。あの赤いピーコートを羽織り、ダークブラウンのロングヘアを頭上高く結び上げたその姿は、仕事を終えて少々疲弊している様にも見える。

「否、僕は特に何か用があった訳でもないし、こうして連絡を貰えて良かった」

妙にかしこまっている彼女を宥める様にそう返すと、僕はふたり分のエスプレッソが届いたのを見計らい、早速話を始めた。

「西島が、貴女を自分の恋人だと言ったが、それは事実なのか？」
「とんでもないです。西島はただの会社の上司に過ぎません」

やけに語頭を強めて否定する彼女は、暫時口を噤んだ後、自ら口火を切る。

「西島は、私が透子に何等かのアクションを起こすのではと警戒しています」

「貴女が水城透子の声となり歌わされてる事への不満があつて？」
「いいえ」

裏事情をズバリ言い当てた事で、驚かせてしまふかとも思ったが、意外にも彼女は冷静にそれを否定した。僕はそれが最大の要因であると見当していただけに、面食らって彼女を注視した。カップに入った薄茶色の液体を眺め、彼女は沈痛な顔付きを見せた。

「透子の声としても、私は多くの人に歌を聴いて貰える機会があるだけ幸運だと思ってるので」

それが本心かどうかは、現時点での彼女の様子からは窺い知れなかった。その表情から見え透いた嘘とも捉えられるが、その話題とはもっと別の部分を思い起こし、気分が沈んでしまったのかも知れないとも言いかねない。

「そりゃ正直、自分の手柄を人に取られたという気持ちもありますけど、何も今回が初めてではないんです」

「松平泉美……？」

その名を挙げた途端、彼女は水を打った様に顔を上げ、此方を凝

視したが、すぐに何かを理解したかの様に、悲しげに眉尻を下げる。

「ご存知でしたか」

「偶然だけど。その松平泉美というのは、貴女の……」

「姉です、双子の。といっても、二卵性ですけど」

それから彼女は、自身の素性をポツリポツリと語り始めた。

松平姉妹はごく普通の家庭に生まれたが、ふたりの容姿の違いから、妹はクラスメイトから酷い嫌がらせを受けていた。

「ブス」

「本当に双子？」

「橋の下で拾われたんじゃないか」

謂われのない嫌がらせを受ける度に、助けてくれたのは姉だった。幼い頃から誰もがハツと息を飲む様な可愛らしさで、妹思いの姉は周囲からの人気も高かった。

「見た目なんてさした問題じゃない。佳澄はお姉ちゃんの大切な妹だよ。何があっても、お姉ちゃんが側に居るからね」

嫌がらせを受けて泣いている妹に、姉はいつもそう言って慰めていた。

大学を卒業し、妹は現在の芸能プロダクションへの就職が決まったが、姉は進路を決めかねていた。聞けば彼女は歌手になりたいとの事だったが、妹は困惑した。容姿は文句なしに売れそうだし、国立大学に通う優秀さでスポーツも万能。だが、姉には唯一の欠点があった。どうにも音痴が直らない事である。昔から歌手になりたいと漏らしてはいたものの、その歌声は聞くに耐えないものであったそう。それは大学に入学してからバイトで稼いだ金でボイストレーニングに通っても改善されず、トレーナーも匙を投げた程である。それでも、胸に抱く幼い頃からの夢を捨てきれないでいたのだ。ふたりでひとりの歌手として勝負してみようと決めたのは、妹であった。彼女は自身の歌声が唯一他者に自慢出来るものであり、それは姉も認めていた。

「最初はお姉ちゃんの歌声としてレコード会社にデモを送るの。もし、相手の目に止まったら、素直に明かしてみる。メディアには当然内緒」

「そんな事、出来るのかな」

「漫画家にもひとりの名前で、兄弟やグループで活動してる人達が居るんだもの。口パク歌手って言ったら聞こえは悪いけど、きつとそんな人、結構居ると思う」

いつも自身を助けてくれた姉への、責めてもの恩返しのもつもりであった。もし、姉の長年の夢をこの声で叶える事が出来れば。そして、この声がどんな形であれ、人の耳に届く手段があれば。妹もまた、容姿を理由に歌手の道を諦めようと思っていた時であった。

妹の作戦は見事に成功した。姉の履歴書と妹の歌声を吹き込んだデモを、まず職場である芸能プロダクションの西島に渡した所、上手い事食い付いて来たのだ。自身等の方針を話すと、何と二つ返事です承されたのである。突然、ふたりの前に歌手としての道が切り開かれ、手を取り合い喜んだそうだ。これが現在に尾を引く憎悪と悲愴を生む事となるうとは、その時の彼女達には想像も及ばなかった。

デビュー曲の発売に向けて、作業は順調に進んでいった。妹はポイストレーニングにレコーディング、姉はジャケットの撮影やプロモーション活動にと躍起になっていた。プロデューサーでもあった西島は盛大に姉妹を売り出すべく、自ら楽曲作りに勤しんだ。そして何もかもが順調に運び、冬にはCDが発売され、本当の意味で歌手としての道を歩み始めたふたり。しかし、事態は急変した。

姉妹はそれぞれレコーディングとジャケット撮影を終え、満を持してCDは発売された。盛大なプロモーション活動と西島の力でそれは飛ぶ様に売れ、リスナーからの反響や様々なメディアからのオファーが殺到した。新人歌手としては好調な滑り出しであった。その日の翌日には、初となる音楽番組の収録が待ち構えいた。無論、出演するのは姉だけで、歌はアテレコとなるが、妹は姉のメディア

での活躍を大いに期待していた。多くの人々に囲まれ、名だたる有名人を前に、スポットを浴びるその姿を、この目に焼き付けたかったのだ。逸る気持ちを胸に、西島が用意してくれた姉と住む高級住宅街の高層マンションへと帰宅した。この高まる感情を姉とふたりで分かち合いたかった。しかし、それが叶わないという妙な空気を彼女は瞬時に察知した。間接照明が煌々と点いた薄暗いリビングのソファに凭れ、項垂れた姉。慣れない忙殺の日々に疲弊し、自室のベッドに辿り着く前に眠ってしまったのかとも思えたが、違った。妹は何かに導かれる様に姉の側へと歩み寄り、テーブルの上に置かれていた物へと視線を落とす。其処には聞き覚えのない名前の大量の薬の箱と、空のコップがあった。その箱のひとつを手にとって見ると、それは単なる鎮痛剤であった。恐らく市販の物だろうが、珍しい名前の薬である。姉がここ最近、何処かが痛むなどと言っていた記憶はない。痛むにしても、こんな珍しい名前の薬を選ぶだろうか。しかも、こんなに大量に。

念の為、中身を確認してみた。中には錠剤を収めたアルミのシートが入っていたが、それに薬はひとつもなかった。他のもそうだが、空っぽの薬の箱が大量に積まれていたのだ。

妹の脳裏に嫌な予感が走り、慌てて姉の方へと向き直り、名前を呼んだ。返事はない。肩を掴んで揺さぶってみたが、駄目だ。妹は全身から血の気が引いた。最早狂った様に強く体を揺らし、何度も呼び掛けたが、姉が一度たりとも返事をする事はなかった。姉は死んでいたのだ。

解剖の結果、姉はあの薬の多量摂取による自殺と診断された。あの薬に含まれる或る成分により、中枢神経が抑制され、意識を失い、そのまま死んだそうだった。

内々で営まれる予定であった葬儀には多くの人々が参列した。親族は勿論、プロダクションの関係者やファン、様々なメディアの記者が押し寄せ、姉の突然の死を悼み、報道された。若すぎる新人歌手の死に、深い悲しみが周囲を覆い尽くす中、記者に囲まれた西島

がカメラを前にこう言っていた。「彼女はとても真面目で利発で、どんな時でも周囲への気遣いを忘れない優しい女性でした。今でも信じられません。何故、こんな事になってしまったのか……。とても居た堪れない残念な気持ちでいっぱいです」

沈痛な表情を浮かべ、心底苦悶の声でコメントする西島を見つめる妹の目には、憎悪と怨恨の念が宿っていた。

メディアには公表せず、内々にしか知らされる事はなかったが、姉は妊娠して22週目を過ぎていたのだ。悪阻（つわり）は軽く、元々細身でタイトな服装を好まなかった為か、妹は全く気付かなかった。姉は必死にその事実を隠していたのだろう。誰との間に出来た子であったのか、それは妹だけが知っていた。否、正確にはふたり。彼女と西島であった。

姉は妹宛てに遺書を遺していた。其処にはデビューが決まって間もなく西島と交際を始めた事、妊娠が発覚すると墮ろす様に迫られ、彼との事を他言すれば契約を打ち切ると脅された事、それでも中絶を拒み続け、悩んだ末に死を選んだ事。そして、自身のせいで折角の妹の厚意を無下にはしたくない、だから西島の事は公言しなかった。ふたりの夢を、自身のせいで潰えさせてしまう事への謝罪の気持ち、震えた文字で綴られていた。

こうして人前であたかも第三者を気取り、平然と振る舞う西島のせいで、姉は死んだのだ。歌手としての道を踏み外さざるを得なくなったのだ。姉を、ふたりの長年の夢を壊したのは、あの男なのだ。こうして妹の胸中で、西島への復讐心が芽生えたのであった。

「西島は舞い込んで来た上質な商品を手離すまいと姉を誑かしていたと思います」

苦味の強いエスプレッソはすっかり温んで来ていた。松平佳澄は、話の終わりを示すかの様にそれを喉に流し込む。イタリアの風習に倣ってか、砂糖を多量に溶かしたものである。今迄独りで抱えて来た重荷を漸く下ろしたといった様子で、彼女は深々と息を吐く。

「復讐、というのなら、何故水城透子をターゲットに？彼女もお姉

さんの件に関与してるのか？」

「あの仲介者という方の手前、言えませんでしたか……」

松平佳澄はそう前置きしてから、「西島と透子が恋人同士なんです」

「ああ、だからあの仲介者の前では言えなかった訳だ」

それを聞いて妙に納得してしまった。あの熱狂的な信者に教祖の恋愛事情を暴露すれば面倒な事態になりかねない。彼女の配慮には恐れ入る。僕から後で当人を咎めておかねば。

「私はたったひとりの、大切な姉を……自らの意思とはいえ、あの男に奪われたんです。だからこそ、あの男から最も大切なものを奪いたい」

西島の思惑にもゾツとさせられたが、彼女のその言葉にも、僕は戦慄した。敢えて本人ではなく、その人の大切な者の命を奪う事で彼女の味わった痛みを知らしめようという事なのだろう。全く、人間というものは時に何とも酷く恐ろしい考えに及ぶ残忍な生き物だ。「何と言うか、貴女の意見も一理あるが、もし本当にアサシンに依頼をしたいのなら、水城透子よりは西島をターゲットにした方が、あの仲介者も……言い方は悪いが、容易に依頼を請けてくれたと思う」

「そうです、ね……。もう少し、考えてみます」

人に自身の素性を明かした事で心に余裕が生まれたのか、松平佳澄はそう頷いた。

出来れば殺害の依頼なんて願い出て欲しくはない。相手がどんな冷酷非道な人物であっても、だ。その場の感情に身を任せ、此方に依頼を持ち掛け、いざそれを遂行された後に、自身が殺害を教唆した事への罪悪感に苛まれ、気が狂ってしまうクライアントも少なくないと聞く。その情景を想像するだけで、胸が苦しくなる。願わくば、彼女が考え直し、依頼を棄却してくれればと僕は心底思った。

僕達は珈琲を飲み干すと、簡単に挨拶を交わし、それぞれ帰宅の途に着いた。

「そうか……。透子ちゃんが……」

昨夜の松平佳澄の話の聞かせてやると、ウィリアム章大はすっかり意気消沈し、机上に突っ伏してしまった。万一彼女が考えた末にそれでも依頼をしたいという場合の為に、話を通しておこうと思っただが、予想以上にシヨックを受けた様だ。30分程、煙草も吸わずに謔言を漏らしている。本当にこの男は信者の模範だ。

「という事なので、万一の時に備えて考えておいて下さい」

このまま此処に居ても仕方無い。別段これ以上の用はないのだ。僕は帰ろうと席を立った。

「……失礼します」

一心声を掛けてみたが、彼は未だに唸っている。一体、いつになったら復活するのやら。僕が事務所のドアを開けた音で、彼は突然顔を上げた。

「でもさ！」

「はいっ？」

唐突にそう言われ、僕は驚いて室内へと視線を向けた。先程はこの世の終わりとも言いたげな声だったのに対し、急に何やら嬉々としたものへと変わっていた。瞳を輝かせ、口許には笑みを浮かべている。

「あの透子ちゃんが西島つてのと付き合ってるんだぜ？俺よりも年上のオッサンとだけ？それって、俺にもチャンスがあるって事だよな！」

「……頑張つて下さい」

僕は声を発するのも億劫になる程の彼のポジティブな思考に、気のない返事をして、ドアを閉めた。

以後、松平佳澄から依頼を請ける事はなかった。否、正確には請ける術がなかった。それから2日後、彼女は死んだ。自宅のマンションから飛び降り、即死。遺書等は見つかっていないらしい。室内にはビールの空き缶が散乱し、彼女は携帯電話を手に身を投げている事から、警察は酔っ払って誤ってベランダから落ちたものとの見

方もしている様だ。

僕はテレビの画面を愕然と見つめていた。自然と全身が震え、言い知れぬ焦燥感に襲われた。携帯電話は落ちた拍子で壊れてしまった為、データの復元は不可能と言われているが、着信履歴は調べれば残っているだろう。もしかしたら僕にも連絡が来るかも知れない。そうなれば、何て言い訳をしようか。アサシンの存在が明るみになる事のない様に、細心の注意を払わねば。

「軽率な行動が、時に自身を窮地に立たせ、自らを滅ぼす事もある」
ダイニングテーブルに据えた椅子に腰掛けていた川崎が、ポツリと呟いた。僕は彼の方へと視線を移した。彼は無表情で此方を見据えている。僕の行動を非難しているのか、哀れんでいるのか、その表情からは窺い知れない。川崎の言う通りだ。僕は視線を戻し、顔を伏せて両手で覆った。自責の念が胸中を渦巻く。

「代表が通信会社に手を回してくれてるだろう。着信履歴は抹消されてる」

「……」

この時ばかりは、生理的に好まないウィリアム章大に心底感謝した。こうしてアサシンの存亡の危機は日々回避されているのだろう。しかし、僕にはそれとはまた違った思いが胸を締め付けていた。

もしかしたら松平佳澄は自殺したのかも知れない。最後に会った彼女は、とても自ら命を絶つ様には見受けられなかった。だが、その胸の内にこの結果を見据えていたのかも知れない。もし僕の何気無い言動が、それを助長していたとするなら……。そうではなく、もつと前から自殺を考えていたとしても、気付いてやれなかった事を悔いた。

不意に僕はすぐ近くに人の気配を感じて両手を顔から離し、顔を上げた。川崎が此方へと歩み寄り、僕の隣に腰を下ろした所であった。灰色の瞳に僕の姿が写る。僕は言葉も出さずに見つめ返すしかなかった。非難されても、罵倒されても仕方無い。それだけの事をしってしまったかも知れないのだから。いくらウィリアム章大があらゆる

る業界に太いパイプを巡らせているとはいえ、世界中のアサシンを脅かす最悪な事態を招きかねない行動を起こしてしまった事は、彼としても赦してはおけないだろう。言葉の槍は勿論、殴られても文句の言えない立場なのだ。

「悪かった……」

許しを乞うつもりではないが、謝罪の気持ちは伝えたかった。僕はそう言って頭を下げ、覚悟を決めて歯を食いしばった。拳が飛んで来る事は間違いない。そう思っていた。

「アンタは、きつと悪くない」

しかし、頭上から聞こえて来たのは拍子抜けする程に温かみのある声であった。普段の川崎からは想像も及ばないそれに顔を上げたその時、彼は突然、僕に抱き着いて来たのである。

「えっ、ちよっ……」

僕は慌てて引き離そうとした。今迄は全く気付かなかったが、川崎はまさか、そういう性癖の持ち主なのか？否、それ以前にこの状況で？僕の意に反し、彼は抱き着いたまま離れようとはしない。その内に僕も何故か、本当にどういう訳か、悪い気がしなくなって来た。そして、何故か急激な睡魔が襲い掛かって来たのだ。先程迄は全く眠気もしなかったのに、どうして急に。考える余地はなかった。体が次第に重くなり、思考回路が停止する。僕は川崎に身を委ねる様にして、深い眠りへと落ちていった。

一度眠ったせいかわりに目覚めた時には、胸中を渦巻いていた自責の念はいくらか和らいでいた。あの急激な睡魔は何だったのか、川崎は何を以て抱き着いて来たのか。その理由は判然としないまま、僕は電話越しに松平佳澄が別の仲介業のアサシンによって命を狙われていた事を、ウィリアム章大から聞いた。クライアントは、彼女の動向を警戒し、自身や恋人である水城透子の身を案じていた西島だという事も……。

「うちもこの時期位は連休にしようかな」

ウィリアム章大（しょうた）はそう言いながら物憂げな表情を浮かべ、啜内から紫煙を吐き出した。何かを痛嘆する様な気落ちした口調は、いつもの快活で特徴的な間延びしたものは明らかに違う。彼の見つめる窓の向こうでは、音を立てて寒風が吹き荒れている。

人々はクリスマスと年末年始を控え、すっかりお祭り騒ぎだ。依然として空には灰色の厚い雲が鎮座し、地上の温度は日に日に低下の一途を辿っているにも関わらず、皆一様に浮き足立っている。冬の寒さも何のそのだ。

そんな世界的なイベントも、アサシンの業務に携わる者にとっては無縁のもの。仲介業は年中無休、アサシンも休まず任務にあたっているのだ。寧（むし）ろ一年を通して最も依頼件数が多いのはこの月だという。クライアントにとっては心の大掃除をしたい時期なのかも知れない。新年は晴れやかな気持ちで迎えたいと願う者が、人生の再スタートを切る為に元凶を断ち切りたい。そういう思いで依頼をしに来るのだらう。

しかし、ターゲットの遺族を思うと、何とも嘆かわしい事だらう。一年の終わりが訪れる度に、被害者の死を思い起こし、彼等は涙に暮れるに違いない。周囲の幸福感に満ち溢れた空気に晒され、何度も何度も、忘れたくても忘れられない過去に悲愴するのだらう。アサシン側の僕がそう思うのも遺族にとっては柵上げと非難されそうだが、しかし、居た堪れない気持ちになる。

とはいえ、彼がそんな遺族に対して沈痛な思いを抱き、クライアントの非情さを嘆き、そう言ったのではない事は皆目見当がつく。僕は室内の中央に構えるデスクの脇にあるマガジンラックを冷ややかな目付きで一瞥した。其処には旅行のパンフレットが山積みに乗せられているのだ。思わず溜め息が漏れる。僕は追及する気にもな

れず、手に持った依頼書の内容を目で追った。

今回のターゲットは年金生活を送る高齢者、クライアントはその娘の様だ。最近、こうした家族間の依頼が後を絶たない。悲しい事だ。ターゲットは認知症であったり、介護認定を受けていたりといった理由から、それを疎ましく思つて依頼されたのかも知れない。両親を介護するという状況は、謂わば子育ての逆ではないかと僕は思う。幼い頃に親がやってくれた事を今度は子がしてあげる、そうは思わないのだろうか。それを放棄し、拳げ句こうしてアサシンに殺害の依頼をするという者を理解する事は、僕には出来ない。それとはまた違う理由もあるのかも知れないのだが、それはウィリアム章大にしか判らない事である。

僕は書類を鞆に収めると、彼の方へと視線を向けた。未だに偽善者を装い、悲観的な顔付きを見せているが、僕が帰った後にはまたパンフレットを眺めながら、旅行先に思いを馳せる事であろう。実際に旅行が出来る可能性は、ほぼ皆無に近いというのに。

「そういえばお前、クリスマスは誰と過ごすつもりだ？」

突然、彼は思い出した様にいつもの調子でそう訊ねて来た。クリスマスか。言われてみれば、今日はクリスマスイブだ。まだまだ先の事だと思つていたが、年のせいか時の経つのは早い。

「特に誰と過ごすという約束はありません。妹と細やかながら祝うつもりです」

僕がそう答えると、彼は心底興味なさげに小さく頷いて見せた。

その顔は僕の返答が不正解だとしても言いたげである。何て返せば正解なのかは判然としないが、そんな顔をされてしまえば、此方としては面白くない。が、恐らく彼はその問いを自身に返して欲しいのだろう。ただそれだけの為であつて、僕の答えなど、実際必要はないのだ。

「代表はどなたと？」

「否、俺も大した約束つてのはないんだが……」

僕が問い返すと、彼は歯切れ悪く言葉を濁してから、「彼奴（あ

いつの事を思うと、な」

「彼奴…、川崎ですか？」

突然、川崎の名が浮上した事に、僕は思わず語調を強めた。彼は洗面を浮かべて小さく頷く。

「奴には身寄りが居なくてさ。もしお前が良かったら、どうだ、明日皆で妹のバーにでも行かないか？」

ウィリアム章大は至って川崎を気に掛けている様であった。上司としての気遣いなのだろう。僕が川崎の代理として従事して来た中で、彼からそんな誘いを受けたのは初めてである。先日、僕はウィリアム章大に大変世話になっているのだ、断る訳にはいかない。

しかし、川崎に身寄りが居ないというのは初耳だった。自身の素性を語るのを避けている様にも見える彼の新たな情報に、僕は眉を寄せた。可哀想に。僕やウィリアム章大には身近な場所に家族が居る。その事に彼はどんな思いを抱いているのだろうか。

「解りました。川崎が良ければ、僕は構いません」

出来る事なら、クリスマス位は気心知れた間柄で祝いたいものだ。川崎もきつと、内心喜ぶに違いない。ウィリアム章大が安堵の表情を浮かべたのを見てから、僕は席を立ち、軽く頭を下げ、事務所を後にした。

早速川崎に明日の予定を直接訊いてみようと思つた僕は、玄関に辿り着くなり言い知れぬ緊張感に苛まれた。玄関に見慣れない靴が置いてあるのだ。男物だろうか、かなりサイズの大きなスニーカーである。随分と使い古し、薄汚れたそれは、脱いだままの状態で置かれている。

まさか、泥棒？靴を脱いでの侵入だなんて、何とも律儀なものだ。僕は音を立てぬ様にドアを閉めると、その場で神経を研ぎ澄ませた。クッションフロアを抜けたドアの先にあるリビングからは小さな物音がする。その手前の浴室からはシャワーから流れる水の音。これは川崎の入浴中に、何者かが侵入したと考えるのが妥当だろう。大胆な泥棒も居るものだ。

僕は緊張に全身から汗を滲ませ、不安に足を震わせながらも、傘立ての中から一本の傘をそっと抜き取った。サイズの大きな靴に、住人の意識がある内に侵入する大胆さは、余程腕っぷしに自信のある人物といえよう。そんな相手に、素手で対抗出来る力は、僕にはない。

僕は静かに深呼吸をすると、音を立てぬ様に靴を脱ぎ、クッションフロアへと足を忍ばせた。非力な僕だけで泥棒を捕まえる自信はない。まずは浴室に居る川崎に声を掛けよう。恐る恐る前へと足を運ぶ。目の前にはリビングに通じるドアが待ち構えている。散々室内を物色し終えた泥棒と鉢合わせでもしたらと思つたと、気が気でない。尋常でない程に心拍数が上昇している。恐怖と焦燥感に逸る気持ちをグツと堪え、何とか浴室のドアへと辿り着いた。僕は震える手を伸ばし、ドアノブに触れた。その瞬間、

「っ！！」

指し示したかの様に浴室のドアが開き、中から見知らぬ大男が姿を現したのだ。僕よりも頭ひとつ分も違う長身の白人は、突如現れた僕を見下ろし、目を見開いている。かくいう僕も、其処に川崎が居るものと思ひ込んでいただけに、驚愕し、硬直した。

「う、うわっ……！！」

が、一瞬後にはその人物こそ侵入者であると気付き、僕は反射的に持っていた傘を頭上高く振り上げていた。

「止める」

しかし、傘は頭上でピタリと止まった。聞き慣れた声に視線を横に移すと、リビングのドアの前に川崎が相変わらずの無表情で立っていた。この状況に全く動揺している様子が窺えない。

彼は此方に非があるとも言いたげに、傘を押さえ付けているのだ。僕の眼前に立つ白人を侵入者という認識で見ている訳ではなさそう。事実、白人には一切の悪意や戦意といったものが窺えないのである。

「…知り合いか？」

緊張感が一気に解かれた僕は、深々と溜め息を吐き、傘を下ろした。まさか見ず知らずの泥棒の味方をする訳がない。

「ネコだ」

「……はいつ？」

しかし、川崎はあまりにも奇妙な事を言うから、僕は驚いて間の抜けた声を上げてしまった。ネコだって？ネコと言えば、あの小柄で華奢な尻尾の長い小動物である。僕の目の前に居るのは、鮮やかなブロンドの髪を肩先迄垂らし、エメラルドグリーンの瞳をした190cm程はある体格の良い男だ。とてもネコと表現出来る様な容姿ではない。

「ネコって……」

「拾った」

「拾った!？」

え、捨てネコですか!？貴方の目には人間が動物に見えるんですか!？寧ろこの白人がネコなら、僕はネズミ位の差があるんですけど!?!

どんな人間であれ、ネコと比喻したとしても、こんな大人を拾って来るだなんて、人の良さにも程がある。川崎の知り合いというのならまだしも、赤の他人を、僕の断りもなく家に上げるだなんて、此方への配慮に欠けてはいないだろうか。一体、どういっつもりでこんな事を。

「スラム街のあの地下通路で躓ってたから、連れて来た」

川崎は事の経緯を簡潔に説明してくれた。其処は以前、彼が住処としていた場所である。

見るとこの白人、湯気の立つ裸体はすっかり痩せ細り、文字通りの骨と皮だけの状態である。どうやら長い事まともな食事を摂っていないホームレスとも捉えられる。そんな姿を見せられれば、無下に追い出すには良心が痛む。

「……。何か、食べる物でも作るよ」

最早戦意も喪失し、呆れ返った僕は傘を元の位置に戻しながらそ

う言った。全く、見掛けによらないこのお人好しには心底恐れ入る。ふたりの前をすり抜け、リビングへと向かう僕に、川崎は一言「済まない」と呟いた。有り合わせで作った夕飯は、瞬く間に川崎と見知らぬ白人の胃の中へと収まっていった。目の前で凄まじい速さで食べ物が減っていくのだ。川崎が大食いなのはかねてから知っていたが、この白人も負けてはいない。胃が空っぽだった何日間を補う勢いである。互いにその細い体の何処にそれだけの量を詰め込むスペースがあるのだろうか。後片付けをしながら、僕は頭を悩ませた。

「君、名前は？」

僕はソファに横たわり、膨らんだ腹を擦りながら満足げな表情を浮かべている白人へと声を掛けた。こんな寒い時期に、すぐさま追いつくなんて無情な事はしたくないが、素性も知らない赤の他人を、何も訊かずに家に置いておくのも不安ではあった。

僕の貸した服を着込み、窮屈そうに襟を指先で摘まんでいる白人は、穏やかな微笑を浮かべ、ゆっくりと口を開いた。

「ネコ」

「……」

その張り付いた様に微動だにしない笑顔の裏では、僕を揶揄（やゆ）し、嘲笑っているのだろうか。子供が覚えてたの言葉を言う様なたどたどしい口調で返って来た答えに、僕は隠す事なく怒りを表情に見せた。

「うちじゃあこんなデカイネコは飼えないぞ、川崎」

僕はダイニングテーブルの椅子に座り、テレビの画面を見つめている川崎へと、皮肉を込めて毒付いた。まるで傍観者でも気取っているかの様な態度に、少し腹を立てていたのだ。彼は悪びれた様子もなく、此方へと視線を移すと、「名はジョナサン・ローズ」と、唐突に言い出した。

「やっぱり、知り合いじゃないか」

何故、先に言わないのか。僕の胸中で沸々と怒気が込み上げる。

ふたり揃って僕を馬鹿にしているのだろうか。

『続いてのニュースです。今月9日未明から行方が判らなくなっている、筒浦メンタルクリニックの入院患者について、警察は公開捜査に踏み出す事を発表しました』

ふと、ニュースキャスターの声に僕は無意識にテレビの画面へと目を向けた。連日報道されている精神病患者の失踪事件のニュースである。

『行方が判らなくなっているのは、区に住むアメリカ国籍の無職、ジョナサン・ローズさん、29歳……』

僕は画面に映った行方不明者の顔写真を見るや絶句した。正面を向き、薄笑みを浮かべるその人物は、紛れもなく目の前に居るこの白人であった。彼もまた、この報道に少々驚いた様で、目を丸くし、画面を正視している。自身の事がこれ程盛大に取り上げられている事を初めて知ったのだろう。

「まさか、匿えつて事か？」

僕は妙な胸騒ぎがした。嫌な予感がする。まさかとは思うが、念の為、そのまま訊ねてみた。

「結果的にはな」

川崎は何ともアツサリと肯定し出した。寧ろ願い出る手間が省けたと思っっているに違いない。

冗談じゃない！僕は思わずそう絶叫する寸前であった。何も無しに入院患者が病院から失踪する訳がないのだ。何等かの事件性を視野に入れてしまうのはごく自然な流れである。そんな匂いを漂わせる人間を側に置いておけば、もし本当に事件が起きた場合に真っ先に関与を疑われてしまう。

それに、万一警察が居場所を嗅ぎ付けたら、僕達が職務質問を受け、家宅捜査をされるだろう。家には証拠は残していない筈だが、最悪アサシンの情報が漏れでもすれば、僕達だってただでは済まされない。この患者のお陰で、僕達の将来も危ぶまれる危険性を孕んでいるのだ。もし僕が捕まってしまえば、妹の世話を誰が見るんだ。

莫大な治療費を誰が払うんだ。

そう簡単に匿えと言われて、解りましたただなんて二つ返事は出来ない。

「そういえば、」

僕の心配を余所に、川崎は不意に思い出したかの様に唇を薄く開き、此方を見据えた。

「代表に呼ばれてただろう。依頼か？」

「！馬鹿っ……！！」

川崎の言葉に、僕は肝が冷え、怒気を含めて声を上げた。何も知らない赤の他人を前に、依頼の話を持ち出すだなんて、どういう神経をしているのだろうか。アサシンとしての危機感はないのだろうか。

「そう心配しなくても、ネコは俺の同期だ」

「え……」

次ぐ川崎の言葉に、僕は驚いて白人を見下ろした。彼が川崎の同期……。という事は、彼もまたアサシンなのか。彼は相変わらず笑みを絶やさず、正（まさ）しくネコのように此方をジッと見つめている。「俊敏で卓越した柔軟な身体能力を誇り、かねてからネコと呼ばれている。俺もすっかり本名を忘れてた」

「それ、ちよつと酷いよ」

ネコと呼ばれる白人は、愉快げに喉の奥を鳴らして笑う。何とも対照的な同期だ。柔和そうな垂れ目に長い睫毛、瘦けた頬、大きな口。報道では30代手前との事だったが、もう少し齢を重ねている様にも見えるその容姿に、片言の日本語。アサシンと呼ぶには少々抵抗がある。僕のイメージするアサシンは、川崎の様な物静かで冷然とした人物であるが故のギャップなのだろうか。

僕は川崎に促され、鞆から依頼書を取り出して渡すと、彼はそれを受け取り、書類に目を通し始めた。アサシンの血が騒ぐのか、ネコも立ち上がり、川崎の背後からそれを眺めている。

ふたりは随分と親密な関係にある様にも見えるが、どちらかとい

うと、ネコの方が川崎にぞつこんといった風である。

川崎は手早く承諾書にサインを済ますと、此方に書類を戻して来た。

「今年最後のクエストかな。盛大に血祭りに上げて来てよ。」

その穏やかな笑みと雰囲気からは想像もつかない様な、何とも残酷な発言である。心なしか、僕が見て来た中で、一番楽しそうな様子に、思わず戦慄してしまう。一方の川崎は、至って気にも留めていない様だが。

全く、川崎の代理人として日々至る所に神経を費やしている上に、病院を抜け出した患者を匿う事になるだなんて。先行きが不安である。おまけにネコが居る内はエンゲル係数もかなり上がりそうだ。

その後、彼等は思い出話に花を咲かせていた様だが、僕は精神的な疲労感に打ち負け、リビングに飛び交う会話をBGMに、一足先に眠りに就いた。

翌朝、僕は家事を済ませてから家を出た。昨夜の夕飯だけで冷蔵庫の中身が底を尽きかけたのである。正直、あのふたりの胃袋を満足させられるだけの食材をひとりで持ち帰るのは不可能に近いかも知れない。川崎でも連行しようかと思っただが、僕が外出する時にはまだふたりとも眠っていた。

しかし、僕にとって彼等と外出しなかった事は逆に好都合かも知れない。僕は買い出しに行く前に事務所へと向かうつもりでいたのだ。承諾書を提出する為でもあったが、本来の目的は違う。

「ネコが？」

昨日の出来事を話すと、ウィリアム章大は眉を寄せ、目を細めた。かつての教え子の健在に喜んでいるという風には見えない。過去に良くない事でもあったのか、明らかに不穏な顔付きで押し黙ってしまった。一体、ネコは何者なのか。僕が再三しつこく食い下がっていると、彼は漸く仕方無しといった様子で口を開いた。

「ネコは川崎にも匹敵する程の腕利きのアサシンだった。今は療養に専念していると、人伝（ひとづて）に聞いてたが……」

彼は空（くう）を見つめ、口許を片手で覆い、黙考している素振りを見せた。

ネコが腕利きのアサシンというのは意外だ。あの穏やかな笑みが印象深い男が、川崎に匹敵する実力と実績を持つていた事に、多少の驚きは隠せない。精神科での療養か。それだけアサシンとしての精神的ダメージが大きいという事なのだろうか。あの人の良さそうな笑顔の裏では、未だに癒えない深い傷を抱えているに違いない。

「ネコは何故、病院を抜け出したんでしょうか」

「さあな。病院食が不味かつたんじゃないか？」

それはないだろう。確かに病院食は不味い、僕にも経験がある。

しかし、良い年した大人が、そんな理由で病院を抜け出すなんて事はないだろう。何か、そう迄して成し得ねばならない事でもあったのだろうか。

「まあ、義理堅すぎるだけで根は良い奴だ。川崎に任せておけば良いだろう」

そうは言うものの、彼の表情には暗い影が射している。しかし、川崎に任せておけば良いと言われれば、確かにそうだと思えて来た。川崎の同期なのだから、妙な真似はしないであろう。

僕は不安を解消された事でホッと胸を撫で下ろし、承諾書を提出すると、シヨップング街のスーパーへと向かった。

帰宅したのは正午を過ぎた頃だった。スーパーにある一番サイズの大きいビニール袋にありつただけの食材を詰めたにも関わらず、結局は3枚も使う羽目になった。マンションの入口でタクシーを降り、エレベーターに乗って自宅へと入るのは重労働であった。何とも心が折れそうになる。大家族の母親はこんな事を毎日行っているのだろうかと思うと恐れ入る。

何とか自宅のドアを開けて中に入ると、僕はクッションフロアに袋を下ろした。これだけで随分と体力を消費してしまった。今日はゆっくりと湯船に浸かりたい気分である。

しかし、今夜はウィリアム章大から誘いを受けている。湯船に浸

かる余裕はなさそうだ。僕は靴を脱いでまた袋を持ち上げる。乱れた呼吸が落ち着く暇もない。

まっすぐキッチンにある冷蔵庫の前に辿り着くも、流石にすぐ腰を下ろして食材を詰め込む気にはなれなかった。まずは少し休憩しよう。僕はそう思っただけで溜め息を吐きながらリビングのソファの方へと視線を移した。まだあのふたりは眠っている様だ。室内はひっそりと静まり返っている。

僕はソファに深く腰掛け、全身を委ねた。一気に疲労感が押し寄せる。出来る事なら、少し一眠りしてしまいたい。が、今この家には大食いがふたりも居るのだ。そろそろ腹を減らして揃って起きて来るに違いない。昼食位は用意しておかねば。

「……よし」

僕は敢えて声を出して自身を鼓舞し、立ち上がった。

と、その時であった。川崎の自室のドアが荒々しい音を立てて勢良く開いた。そちらへと視線を向けると、川崎が顔を伏せた状態で立っていた。何やら様子が可笑しい。

彼は全速力で走った直後の様に荒い息を吐き、肩で呼吸をしている。ドアについた手で体を支え、立っているのもやっとといった有り様であった。

「……川崎？」

不審に思っただけで声を掛けると、彼はゆっくりと顔を上げた。その表情は苦しげに歪み、皮膚からは大量の汗を掻いていた。まるで痛みを耐えている様である。

「……」

「え……？川崎……!？」 川崎は何かを呟いた様だが、その声は虫の息に掻き消され、一瞬後、彼の体が大きく揺れ、力なく床へと崩れた。僕は慌てて駆け寄り、身を屈めて彼を抱き上げた。

「川崎！おい、川崎っ！」

僕は言い知れぬ焦燥感に声を張り上げて名を呼んだ。しかし、彼は胸元の衣服を握り締め、焦点の定まらない目で虚空を見つめてい

た。息をするのも辛そうだ。

僕の声に、ネコが川崎の自室から姿を現した。その光景を見るや、動転し、暫く閉口してしまっていた。とはいえ、僕もひたすら川崎の体を揺さぶり叫ぶだけで、まずやらねばならない事は何か、すっかり機転が回っていなかったのだ。

「あ、救急車……！」

その単語が浮かんだのはあまりに唐突で、何故真つ先に思い出せなかったのかと自責の念が襲う。僕は対峙して座り込むネコを見た。「川崎を頼む。今、119番するから……」

「No！」

しかし、僕の提案に突然ネコが鋭い口調でそれを制した。危機迫る様な語調に、一瞬怯んでしまった。

「病院ダメ」

「……何だつて？」

僕はネコの言う言葉の意味が解せず、怪訝な表情を浮かべた。この緊急事態に、まさか自身の身を案じている訳ではあるまいな。川崎はまるで心臓が痛そうに顔を歪めている。僕達の手に見える状態ではない。専門家に診て貰うのが最善策ではないのだろうか。

「ウィリアムに電話を」

ネコは懇願する様な眼差しを向けてそう言った。一体どういうつもりなのだろうか。ウィリアム章大は医者じゃない。彼に電話を掛けたところで、川崎の容態が回復する訳がないのだ。

しかし、ネコのあまりの剣幕に、僕は不満を抑え、ジーンズのポケットから携帯電話を取り出すと、事務所へと電話を掛けた。彼が出る迄のたった数秒の間にも川崎がこのまま息を引き取ってしまいはしないかと、逸る気持ちに手が震える。

「川崎が……」

ウィリアム章大は事態を聞くと、いつになく緊迫した声で呟いた。彼の次ぐ言葉を待ちながら、もしかしたらあらゆる業界に精通するその太いパイプを以て川崎を適切な病院へと搬送してくれるのかと

も思っていた。

『駄目だな。一帯の病院はネコの件で警察が目光らせてる。とにかく安静にして、様子を見てくれ』

様子を見るだなんて、誰でも容易に想定し得る回答を求めて電話を掛けた訳ではない。僕は怒り心頭に発する思いで電話を切ると、ネコを睨み付け、危うく心ない誹謗を浴びせる場所であつた。が、その感情も抑えるしかなかった。

ネコは自身の口に人差し指だけを伸ばした左手を寄せていた。見下ろすと、川崎は先程に比べて呼吸も落ち着き、失神した様であつた。

僕達は川崎をベッドに寝かせ、様子を見る事にした。彼の衣服は大量の汗で湿っていた。相当苦しかったのだろう。

ふたりに手を合わせて着替えさせる事となり、僕は川崎の自室のタンスから適当に服を取り出し、ベッドの横に移動した川崎の方を振り返つた。ネコは慣れない手付きで長袖の部屋着を脱がせている。意識を失つた人間を動かすのは容易な事ではない。手を貸そうと近付いた僕は、思わず目を見開き、その場に立ち尽くしてしまった。全身からすうっと血の気が引いていくのがはつきりと判つた。

川崎の両腕には、無数の切り傷が隙間なく引かれてあつたのだ。それは古い傷から最近出来たであろう傷迄、所狭しと描かれてある。腕だけではない。衣服を脱がされ露になった腹部や腰、太股にも長さの違う傷痕が残っていた。不注意で負つた傷とは思えない……そう、躊躇い傷の様な線が、体中に刻まれているのだ。

自傷行為。不意にその単語が脳裏を過つた。僕は戦慄した。川崎がそんな事をする様な人柄だとは思えない。しかし、もしネコがアサシンとして生きて来た上で精神的ダメージを受け、入院するに至つたというのなら、川崎だって例外ではない。何に對してそれ程の苦痛を強いているかは判然としないが、こうして日々独りで感情を押し殺して来たのかと思うと、胸を締め付けられる思いだ。

僕はネコの手前、必死に泣きそうな気持ちを堪え、何とか川崎に服を着せると、ネコがその体を軽々と持ち上げ、ベッドに寝かせた。「さっき言ってた…、病院が駄目というのは、どういう意味だ？」

僕は未だ胸中に燻る怒りを噛み殺し、ネコに訊ねた。内心、ネコが居なければ川崎を病院に連れて行けたかも知れないのだ。本当に自身の身を案じて病院への搬送を拒否したとなれば、僕は心を鬼にして追い出すつもりでいた。

ネコはベッドの脇に腰を下ろし、憔悴した表情を浮かべ、此方を見上げた。

「アサシン、病院ダメ」

「アサシンが？」

僕は眉を寄せて首を傾げた。相手は力なく小さく頷くと、川崎の方へと視線を移す。

「アサシン、セーゾンケンない」

そのたどたどしい口調から、意味を理解するのに少し時間を要した。セーゾンケン…。

「生存権がない？」

漸く理解出来たものの、それはあまりにも信じ難い事であった。アサシンとはいえ、こうして生存している人間としての権利がないだなんて、そんな事有り得るのだろうか。

ネコは何か言いたげに口ごもる。時折、英単語を呟いている所を見ると、どうやら日本語での説明が彼には難しい様だ。僕が英語が通じる事を伝えると、安心した様子で僅かに顔を綻ばせてみせた。

「アサシンは常人には理解し難い心理面のスキルを要する。もしかしたら、それは川崎から聞いた事があるかも知れないけど」

「ああ。川崎は洗脳だとか記憶を消すだとか言ってた」

そういった特異能力を習得するには、大きな対価を払わねばならないらしい。が、それが何なのかを聞く前に、当人は眠ってしまい、今迄知らずにいたのだ。

ネコは力強い目付きで此方を見据えると、重苦しげに口を開いた。「それを習得する為に……、否、アサシンになる為には生存権を放棄する事が絶対条件なんだ」

「そんな……！」

予想だにしていなかった衝撃の事実にも、僕は愕然とし、声を上げた。目の前で眠っている川崎は、アサシンというだけで生きている事を公的には証明出来ないのだ。任務達成率100%を誇る優秀な彼が家を持たないのも、そういった理由からなのだろうか。

「待てよ……。それじゃあ川崎の死亡届が出てるって事か？死亡届は医者から死亡診断書が必要な筈だよな？無理だろ……。現実的に、可笑しいよ」

僕は予備知識を引っ張り出して抗議した。生きている人間の死亡診断書なんて、どうやって発行するとうんだ。しかし、感情的になつて声を荒げる僕に反して、ネコは真剣な態度で此方を正視している。

「ウィリアムは様々な業界に精通してる。書類の改竄（かいざん）位、洗脳するよりも容易い」

そう言われてしまうと、言葉も出ない。僕はアサシンを甘く見ていたのだ。非合法の殺人集団、その裏事情は予想以上に複雑で、恐ろしいものであった。個人情報提示する術のない人間は、何処に行っても怪しまれてしまう。病院で診て貰うのも難しいに違いない。自身を自ら他者や外界と遮断し、生きるのは、こういった気分なのだろうか。想像にも及ばない。

川崎はどんな思いでアサシンとして生きているのだろうか。あらゆる制限を設けられ、表立って歩めぬ現実と引き換えに、何を守りたいのだろうか。

僕は顔を伏せ、眉間に皺を寄せて唇を噛み締めた。身近に居ながら、僕は川崎の何一つも知らないのだ。自責の念が込み上げる。もし、もっと早く彼の心の叫びに気付いてやれていれば、これ程に体の傷が増える事もなかったかも知れないのに。

「公共施設街の総合病院に、川崎の主治医が居る」

「…主治医？」

ネコの言葉に、僕はゆっくりと顔を上げた。主治医？それは川崎が何等かの病を患っている事を示しているのだ。ネコは目を伏せ、苦しそうに声を絞り出した。

「突発性心筋症。川崎の持病だよ」

「突発性…、心筋症？」

「原因不明の難病。前触れもなしに、突然発作を起こすんだ」

先程の川崎は、持病から来る発作が起こったという事か。だから心臓の部分を押さえていたのだらう。ネコはその主治医がもぐりでアサシンの治療を行っているのだと教えてくれた。総合病院と言えば、僕の妹が入院している場所だ。川崎と同居する事となった初日、其処で彼と居合わせたのは、受診の為だったのだらうか。

アサシンとは頭を体を駆使して任務をこなす。僕なんか以上に神経を研ぎ澄まし、心身共に尋常でなく疲弊するであらう。加えて病を抱えているとなると、その負担は計り知れない。その体で、今日迄生きて来たのだ。

僕には彼の安否を危惧するしか術がない。僕は医者でもなければ、川崎の代わりに任務にあたる勇気もないのだ。僕は自身の不甲斐なさに頭を抱えた。

「川崎は筋金入りの秘密主義だからね。きつと君の事を思っただけは語らなかつたのかも知れない」

ネコは僅かに顔を綻ばせ、穏やかな声色でそう言った。それは救いとなって僕の沈んだ気持ちに染み込む。「川崎はさ、最初こそ裏の世界に於いてあまりにも無知で、純粹な男だった」

ネコはそう言いながら川崎の額に張り付いた前髪を、指先でそつと摘み上げ、サイドに流す。

「ボクが精神的に参ってしまった時、アサシンを辞めて療養に専念する様に言ってくれたのも、川崎だった。表面には見せないだけで、

彼はそういう男だよ」

懐古する様な落ち着き払った口調に、暖かな眼差しを川崎に向けるネコ。同期として、絶大な信頼や憧憬を以て行動を共にして来たのだろう。脳裏にその情景がぼんやりと浮かぶ。

僕は川崎の方へと視線を移した。胸元の微かな動きだけで漸く生存が確認出来る。寝返りも打たず、鼾（いびき）も掻かず、ただ静かに寝息を立てる姿に、僕は知らぬ間に涙を流していた。ほんの少し目を離れた隙に、彼の呼吸が、心臓が、脳が止まり、このまま還らぬ人となってしまいそうな気にさえなる。世界を脅かすアサシンではなく、川崎という唯一無二の人間に迫り来るあまりにも悲しすぎる死を思うと、これ以上感情を殺す事は出来なかった。

「……ボクはもう、病院に戻るよ」

僕の心情を察してか、ネコも今にも泣き出しそうな顔付きでそう言った。それが本意ではない事は解っていた。本当は川崎の意識が戻る瞬間を、その目で見たい。しかし、万一このまま彼の容態が悪化してしまうのではと考え、病院への搬送を優先したのだろう。ネコが入院先の病院に戻れば一帯の病院に目を光らせている警察も退散し、彼を安全に診て貰う事が出来る。

「君の思う通り、不本意ではあるけど、ボクは君みたく無垢に人を苦しめる事はしたくないからね」

「……どういう、事だ？」

ネコの口調は語尾に向かうにつれて先程の穏やかなものから、憎悪を含んだものへと変わっていく。見るとその目には怨恨の念を宿し、獲物を狙う獰猛な獣の様に、此方を見据えている。今にも飛び掛からんとする勢いで、敵意を剥き出しにしているのだ。

僕はネコの言葉の意味が理解出来ず、身を強張らせ、彼を凝視した。

「川崎は本来、この世界に在るべき存在ではない。君のせいで、川崎の人生が狂ったんだ」

僕が川崎の人生を狂わせただと？一体、何の話をしているんだ。

僕達はまだたった数ヶ月を共にしたただけの付き合いである。その当初から川崎はアサシンだったのだ。この浅い関係で、どうやって人生を狂わせる事が出来るかというのだろうか。

「君は憶えてないんだね。自分がどうやって川崎を窮地に追い込み、今迄苦しませて来たのかを」

ネコはゆっくりと立ち上がり、此方へと向き直った。その殺気立つたただならぬ雰囲気、僕は物怖じ後退った。

憶えていないも何も、先程からネコの言葉の意味が全く解らない。まるで僕達が過ごして来た数ヶ月を側で見ていたかの様な口振りである。

そう思った直後、ネコは自身の頭部を指差して見せた。暫くどういふつもりなのか解せず眺めていたが、僕は突然弾かれた様な感覚に襲われた。まさか、読心術……？

ネコは片方の口角を上げ、不敵な笑みを浮かべた。読心術に良い思い出はないが、こうしてまたそれを用いる人物と遭遇するだなんて、思ってもみなかった。

「君は己の罪を忘れ、何食わぬ顔で川崎と接触する非情な男だ。川崎の安否を心底案じる優しい代理人を演じれば演じる程、ボクは虫酸が走る」

ネコの存在そのものが鋭利な凶器となり、僕へと向けられている。背筋に悪寒が走り、脳が逃げろと警告している。しかし、それに反して僕は金縛りにでも遭ったかの様に、身動きが取れないでいた。ゆっくりと僕達の距離が縮んでいく。

殺される。僕はそう直感した。逃げねば、殺される。混乱する思考回路では、体に完全な指令を送る事が出来なかった。

「ん……」

「っ……！」

その時、ベッドから衣擦れの音がした。ネコは振り返り、背後へと視線を移す。川崎が寝心地悪そうに眉を寄せ、身悶えしてはいる

が、目を覚ます気配はなかった。

僕は咄嗟に踵を返し、部屋を飛び出した。体がネコの間を窺っていたのかも知れない。逃げねば、殺される。

しかし、リビングへと出てすぐに背後から着ていた衣服を掴まれ、歩みを阻まれてしまった。振り払おうと右側に上体を捻ったのが間違っていた。左手で衣服を掴んでいたネコの右手が、僕の頬を目掛けて飛んで来たのだ。まともにそれを受けた僕は、痛みに顔を歪め、目を瞑ってしまう。一瞬、遮られた視界を狙ってか、ネコは衣服を掴んでいた手を離すと、すかさず背中を突き飛ばして来た。

「うっ……！」

固い物同士がぶつかり合う鈍い音が周囲に響く。僕は勢い余って壁に頭と肩を打ち付けてしまった。目の前で雷が落ちた様な錯覚に陥る程の閃光が視界を掠める。

それでもネコへと向き直り、次ぐ危険に備えようとするも、交わす程の瞬発力など、僕にはなかった。

僕が対峙する形で向き直ると、ネコはすぐに腹へと拳を沈めた。日本人よりも大きなそれを、腹筋に力を加える事なく受け止めた事で、強烈な痛みが押し寄せ、胃から何かが込み上げそうになる。

「ぐ……、う……」

僕は腹を抱えてその場に踞った。胃酸が食道迄上がって来ている。何とか嘔吐は避けたいが、そんな事を考慮する暇もなく、ネコの足がこめかみを激しく蹴る。

「うあっ……！」

痛む部分を交互に押さえ、唾液を飲み込みながら、何故こんな状況になったのかを必死に考える。僕が川崎の人生を狂わせた決定的な何かがあるのだ。それは当人やネコが知っている。このたった数ヶ月の間に、僕は何をしたのか。全く思い出せない。元よりそんな記憶が僕にはないのだ。

僕が何をしたというのか。思い当たらない以上、精神科に通う程のメンタルが不安定なネコの虚言ではないのか。

そう思った途端、ネコは僕の肩を掴んで無理矢理上体を上げさせた。その顔は怒りに紅潮し、鬼の様に目尻が吊り上がっていた。

「そうやって自分の罪を他人に擦（なす）り付けるしか能がないのか。その身を以て、償う気持ちはないのか」

ネコの声は怒気を含み震えていた。すっかり神経を逆撫でしてしまつたらしい。思うだけで僕の感情は筒抜けなのだ。まともな人間なら、当然腹を立てても仕方無い事を僕は考えたのである。

しかし、理由も解らぬままこうしてネコから暴行を受ける事に対して、僕は腑に落ちなかつた。話し合いで何とかならないものなのか。ネコの様子から、そんな悠長に構えられる程の問題ではなさそうだが。とはいえ、その理由を親切に教えてくれそうな状況でもない。

ネコは肩を掴んでいた手を首へと移した。しまつた、と思つたが、もう遅い。骨張つた両手が、僕の首を締め付ける。

「くっ……!？」

痛みに堪えるだけに消耗した力を振り絞り、その手を引き離そうにも、まるで接着剤を塗つたかの様に微動だにしない。気道が遮られ、徐々に体が酸素の不足を訴え、代わりに全身から大量の汗が噴き出す。ネコの腕を掴む手にも、力が入らない。

「君の罪は死でしか償えない。その身を以て、川崎の痛みを知れ」

ネコの目が妖しく光を放つ。首を締め付ける手の力が、次第に強まっていく。僕は顔を歪め、滲んでいくネコの殺意に満ちた表情を見つめた。苦しくて呻く事も出来ない。

どうして？何も知らないまま、僕はネコに殺されるのか？全身が意に反して痙攣を起こし始める。呼吸と思考回路が低下の一途を辿っている。

僕は薄れ行く意識の中で、ただただ苦しくて、怖くて、痛みが逃れたかつた。どうせ死ぬのなら……、早く殺してくれ。そう思えていた。

その瞬間、何か物凄い速度で風を切る様な音が聞こえた。同時に、首を締め付けていた手の力が緩む。

一気に空気を吸い込んだ体に、強烈な吐き気が込み上げる。僕は頭を振ってネコの手を振り払い、顔を伏せて咽び返した。暴行を受けた際に歯で噛み切った口内から、床に血が飛び散る。目線を上げると、驚いた様に見える目を見開き茫然とするネコの姿があった。突然の事態に、状況を把握出来ていないといった様子である。その首には腕が巻かれ、彼の背後には、見慣れた蒼白い顔の青年が冷然とした様子で立っていた。

「川崎……」

僕は喉から絞り出す様に情けない声を出した。意識を取り戻した川崎が、僕を助けてくれたのだ。その顔色はまだ不調を表しているが、ネコに向けられた蔑む様な眼差しには、ハッキリと生気が宿っている。

ネコは悔しそうに小さく舌打ちをすると、僕の首から手を離れた。川崎の腕を払い、立ち上がる。

「大丈夫か？」

川崎はネコを押し退ける様に屈み込むと、僕の背中を擦った。その表情に、思わず息を飲む。眉尻を下げ、今にも泣き出しそうな顔付きと焦燥感を滲ませる声。本気で心配してくれているのだ。こんな顔、見た事がない。僕は慌てて視線を逸らし、首に片手を添え、呼吸を整えながら何とか頷いて見せた。

「どうして、彼を庇う？」 頭上から憎悪と困惑とが入り交じった声が出た。ネコは眉間に深く縦皺を刻み、背筋の凍る様な恐ろしい目で僕を睨み付けている。それでいて、時折川崎に同情する様な視線も送っている。未だネコを取り囲む殺意に気圧され、僕は肩を竦めた。

川崎は腰を上げ、僕の眼前に庇う様にしてネコと向き合つと、あの禍々しく不穏なオーラを滲ませた。

「リックを俺の所に寄越したのは、やはりアンタだったんだな」
「リックを…？」

川崎の言葉に、僕は驚嘆した。読心術の使い手というあの謎の少年と、ネコが繋がっていたなんて、思ってもみなかった。

「本名はエリック・ローズ。アンタに息子が居るとは聞いてたが、まさかと思いだ代表に調べて貰った」

リックはネコの息子だったのか。以前、少年が自身の能力を悪く言わない人物が居ると言っていたが、それが父親だったのだろうか。「記憶を読む能力は、四国に配属されたアサシンに多い心理的能力だ。そつちに飛ばされたアンタが絡む子供だという事はすぐに解った。何も知らない子供にあんな危険な思いをさせるのも、アンタの悪い癖だ」

ネコは目的の為なら手段を選ばない性分らしい。川崎と接触をさせた事で、リックは小さな体で、あんな方法で記憶を消されてしまったのだ。僕が川崎の名を想像したが故でもあるのだが。

「何の為に、リックを川崎と接触させたんだ？」

息子に危険な思いをさせて迄、川崎を探し出さねばならない理由があったのは明白だ。そして、病院から抜け出した理由もそこにあるのだろう。僕は節々の痛みに堪えながらも、好奇心から訊ねてみた。

すると、川崎は此方をチラツと見下ろした。心無しかその目付きは寂しげである。が、すぐにネコの方へと視線を戻す。

「アンタは俺の側に、この人が居ると確信していた。リックには俺ではなく、この人を探す様に仕向けていたんだろう」

「……僕を？」

川崎の言葉に、僕は目を丸くし、頓狂な声を発した。どうして僕を探していたのだろうか。ネコとは全く面識がなかった筈なのに。それもネコの言う川崎の人生を狂わせた事に原因があるのか。

「リックを使ったのは、四国から戻ってから所在が掴めない川崎を探す為の、苦肉の策だった」

ネコは諦めた様に溜め息を吐き、眉尻を下げて心底申し訳なさそうに弁解した。しかし、すぐに恨みがましく僕を睨む。

「彼は己の罪をすっかり忘れてる。偽りの記憶に塗り替えて、第三者気取りでノウノウと生きてるんだ」

ネコは鋭い口調で僕を責め立てる。同時に、川崎に対する非難めいた感情も、その口調から窺える。どうしてこんな僕の味方をするのかとも言いたげである。

自身の罪を偽りの記憶に塗り替えているだと？ どのような事だ？ 僕の記憶に偽りなどない。15歳で他界した両親、病床に伏す妹、体に鞭打って働いた日々、入院、そして川崎の代理人としての今…。この記憶の何処が偽りだというのだろうか。

「考えるな」

ネコの言う言葉の意味を必死に考えようとする僕に、川崎は此方を振り返らずに言った。何故だろう。その言葉を聞いただけで、胸中に渦巻く焦りも不安も、一瞬にして潮を引いた様に治まっていくのだ。癩癩を起こして泣き叫ぶ赤ん坊が、母親に抱かれ宥められる内に落ち着きを取り戻す様な感覚である。何とも不思議な瞬間だった。

「そつやって記憶を閉ざしても、己の罪から逃れる術はない。沸き上がる疑問に不安を煽るだけさ」

一度は戦意喪失していたネコの目が、再び悪意で満たされ、僕へと注がれる。今度こそ殺される勢いで向けられた敵意に、僕は情けなくも川崎の背後に身を寄せ、血の混じった唾液を飲み込む。

しかし、川崎がそれを赦さないとも言っ様に、威圧的なオーラを更に放つ。同期を相手に殺意すら含んだそれに晒され、僕もネコも戦慄した。押し潰されそうな程の強力なオーラに、全身が震える。「俺から何を奪おうとしているか考える。これ以上この人に手を出せば、俺はアンタを殺す」

低く掠れた抑揚のない口調が、更なる恐怖心を掻き立てる。僕が

これ程怖じ気付き、硬直してしまっているのだから、標的のネコはその何倍もの恐怖を感じている事だろう。彼は怯えた様に目を剥き、唇を固く結っている。暫時、周囲をただならぬ緊張が張り詰め、それぞれの息遣いさえ鮮明に聞こえて来る程であった。

やがて、その空気に耐え兼ねたのか、ネコは口惜しそうに渾身の思いをぶつけるかの様に僕を鋭い目付きで睨み付けた。しかし、これ以上は手を出そうとせず、一步後退りすると、足早に家を飛び出していった。

川崎が放っていた黒いオーラも引き、辺りはしんと静まり返った。全身を物凄い速さで疲労感と痛みが駆け抜け、僕は顔を歪めて身を屈めた。

「痛いかな？」

顔を上げると、川崎は僕の正面に腰を下ろし、此方を不安げな表情で見つめている。

「……大丈夫。それより、川崎こそ動いて平気なのか？」

先程迄、発作を起こして寝込んでいたのだ。僕は自身の外傷よりも、川崎の容態を案じてそう言った。すると、彼は少々驚いた様子を丸くしてから頭（こごべ）を垂れた。

「済まない」

「え、否……」

唐突にそう言われ、僕は困惑した。確かに川崎とネコの関係に巻き込まれたとも捉えられる件に、彼が謝るのも解る。が、そんな素直に謝られると何て返せば良いのやら。

「重くなかったか？」

「……え？」

あまりにも脈絡のない問いに、僕は眉を寄せて首を傾げた。長い前髪の隙間から、沈んだ顔が覗く。重いとは、ネコのパンチの事なのか？言葉の意味が理解出来ないで悟った彼は、居心地悪そうに目を逸らし、「俺が」

「……。ああ、否、僕が運んだ訳じゃないから」

どうやら自分が倒れた際、ベッドに運んでくれた事に対する謝意だった様だ。その時はネコが運んだのだから、僕に川崎の重さは判らないが。

「知らなかったよ。川崎に持病があるなんて」

その言葉には少し非難を含んでいた。最初から知っていれば、普段から気に掛ける事も出来たし、もっと早く適切な対応が出来たかも知れないのだ。

川崎は瞼を閉じ、細く長い溜め息を吐いた。

「迷惑を掛けた」

「迷惑はしてない」

自責する様な口調で言う川崎の言葉に被せ、僕は語調を強めた。

「心配はしたけど……」

本心を付け加えると、川崎は顔を上げ、暫く互いに見つめ合った。彼は子供の様に澄んだ瞳に僕を映している。この時、僕達はもうアサシンと代理人という浅い関係ではなく、友情ともいえる関係へと移り変わっていくのを感じた。

時が経つにつれて室内は次第に薄暗くなっていく。川崎は立ち上がり、リビングの明かりを点けると、「待っていてくれ」と言って一度自室へと入って行った。中から物を漁る音が聞こえたが、やがて小さなプラスチック製の箱を手に戻って来た。

「簡単な応急措置しか取れないが、何もしないよりはマシだろう」

CDボックス程の箱には絆創膏や消毒液、包帯や湿布等がぎっしりと詰まっていた。救急箱だ。川崎は其処から長方形の脱脂綿を取り出し、消毒液を掛けて僕の額に当てた。痛みが歪む。ネコに背中を突き飛ばされた際に、壁に擦って傷が出来てしまったのだろう。今迄気付かなかった。

川崎は驚く程の慣れた手付きで患部に応急措置を施してくれた。肩に貼った湿布のツンとした臭いが鼻腔を擽る。

「散々なクリスマスだな」

「ああ、お互い……」

川崎が箱を整理しながら苦々しい声で言った事に、何の気なしに同意したのも束の間、僕はハツとした。そうだ、今日はクリスマスだ。

僕は慌てて立ち上がるつもりだったが、ネコに暴行を受けたお陰で体の至る所が悲鳴を上げた。つい口からもそれが飛び出る寸前であった。

「痛っ……」

僕は腹を抱えて悶絶した。心配そうに顔を覗き込む川崎に、辛うじて平気だと伝えるも、機敏な動きは暫く控えねばならないだろう。

「そうか、妹にプレゼントでも渡すつもりだったか」

「ああ。それと、代表から今夜誘いを受けてたんだ」

病院で僕の見舞いを待ち侘びる妹の姿が脳裏を掠める。きっと不貞腐れているに違いない。早く会いに行つてやらねば。最悪、ウィリアム章大からの誘いは後日改める事にしよう。

僕は川崎にウィリアム章大から今夜片岡リオのバーで飲む約束をしていた事を告げた。

「僕はこの体だし、難しいと思う。川崎も病み上がりだし、断るかな」

「そうだな。アンタは妹の所に行つて、それからでも休んだ方が良い」

弱音を吐く僕に、川崎は肯定的な意見をくれた。彼に礼を言うと、僕は痛む体に鞭を打つて妹の待つ病院へと向かう事にした。沸き上がる疑問は、今は後回しだ。

僕は先にシヨッピング街でタクシーを降り、最近巷で有名な洋菓子店へと立ち寄つた。やはりクリスマスとあつて、大勢の客が店頭には並んでいる。面会時間の終わりが迫っている事は解っているが、僕は此処のフルーツタルトが妹の好物だと記憶していた。クリスマスにはそれを差し入れしようと決めていたのである。

周りはカップルや家族連れ、仕事帰りのサラリーマンで賑わっている。デイナーのデザートとして持ち帰るつもりらしい。

僕は人混みから顔を覗かせ、ショーケースにあのフルーツタルトがあるかを確かめた。色とりどりの品が陳列する中に、それが若干数残っているのが見え、安堵の溜め息を吐く。

10分も掛かって漸く辿り着いたカウンターで愛想笑いを浮かべる店員に、早口で目当てのタルトと、適当にガトーショコラを注文する。アルバイトの高校生だろうか、おっとりとした丁寧な対応につい焦りを隠せなかった。釣り銭も保冷剤も要らないから、早く寄越してくれだなんて、無理難題を言い出しそうにもなる。

やっとの思いでケーキの入った白い箱を受け取ると、僕は足早に自動ドアを潜ってタクシーを探した。後はこのまま病院へと向かうつもりだった。賑わう街並みの中、客待ちのタクシーはすぐに見つかった。道路の脇に立ち、掴まえようと片手を挙げようとした。

「……あ」

しかし、ふとある事に気付き、思い留まって時刻を確認する。午後6時半を過ぎた頃だ。僕は一瞬迷いはしたが、やがて再びショッピング街へと戻った。

30分後、僕はタクシーに乗り、妹の待つ総合病院へと向かった。面会時間の終了が刻一刻と迫る。僕は逸る気持ちに院内を小走りに進んでいた。関係者が見れば注意されたであろう速度だが、幸い擦れ違ったのは誰もが入院患者やその家族の様であった。

自動販売機で緑茶と珈琲を買ってから、漸く妹の病室へと行き着いた。

この病室は妹と同年代の患者ばかりで、室内には小振りなクリスマスツリーが綺麗に飾り付けられていた。サンタクロースや円形のエナメルのオーナメントに混じって、何故か短冊が掲げている。

妹は窓側の右のベッドを使っている。他のベッドでは患者の家族らしき者との会話が聞こえて来る。こんな世界的なイベントの日に、妹を遅く迄独りにしてしまった事に罪悪感を覚えながら、閉められ

ていたカーテンを開けた。

「遅くなって御免……」

僕は開口一番で謝罪しようと思ったが、すぐに口を噤んだ。妹は天使の様な穏やかな寝顔を浮かべ、眠っていたのだ。不貞腐れているか、泣いているのではないかと心配していたが、どうやら杞憂だった様だ。念の為、近くに寄ってその顔をじっくりと観察してみたが、涙を流した跡も見当たらない。

僕はベッドの脇に据えたパイプ椅子に腰を下ろし、暫く妹の寝顔を眺めていた。きつと起きていたら額に貼った大きな絆創膏を見て心配するに違いない。寧ろこの状況に感謝すべきかも知れない。病床に伏す妹に、余計な心配は掛けたくない。

僕は面会時間が終わる迄、飽きる事なく妹の寝顔を見つめていた。思うのは先程のネコの言葉だ。僕が川崎の人生を狂わせた、ネコはそう言っていた。しかし、その様な事をした記憶は、少なからず僕にはない。が、自分の意思に反して相手を傷付けてしまうというのは良くある事だ。何気無い一言でも、聞く側の受け止め方では鉛の様に重く感じる事もある。川崎なんて、普段は顔に出さないから僕の言動に対してどんな感情を抱いているのかは、判然としない。そう言ってしまうえば、必ずしも自分に非がないとは決して断言は出来ないのだ。

僕は川崎に何をしたのか知りたかった。死でしか償えない程の事とは何なのか。帰宅した後、川崎に訊くつもりでいた。

しかし、と思い留まるのには理由がある。妹の存在と、後の川崎の態度だ。もし本当に僕が川崎を窮地に追い込み、苦しめているとなれば、僕は彼の側に居るべきではないかも知れない。そうなれば、代理人としての座を退く事になるだろうが、それでは妹の多額の治療費を払う資源も潰えるのだ。まともな仕事の収入では賄える額じゃない。僕はこの為に川崎の代理人としてアサシンの業務に従事しているのだから。

それに、川崎は先程僕をネコから庇ってくれたり、心底心配して

くれていた。自分の人生を狂わせた元凶に、無償の情を投げ掛ける人間など居るだろうか。ネコに加勢しても可笑しくない状況だったにも関わらずだ。少なからず、僕には出来ない。側に居る事さえ苦痛に感じるだろう。

やはり、あれは単なるネコの虚言だったのではないかとも思う。子供は注目を浴びたくて様々な行動を起こす事がある。例えば泣いてみたり、怒ってみたり、甘えてみたり。学校ではあたかも虐めにあっているかの様に振る舞ってみせる事だつてあるのだ。川崎にぞっこんだつたネコが、自分の気を引く為に僕を悪者扱いたとしても、不思議ではない。

僕はゆっくりと腰を上げると、ケーキの入った箱を冷蔵庫に、以前買ったプレゼントをサイドテーブルに置いた。折角気持ち良さそうに眠っているのに、起こすのは申し訳ない。目が覚めた時、妹は喜んでくれるだろうか。可愛らしい寝顔を脳裏に焼き付ける様に見つめてから、音を立てぬ様、カーテンを閉めた。

常に暖かな病院から出た途端、底冷えする寒さに晒され、僕は身震いした。外はすっかり闇に覆われ、街灯が周囲を照らしている。

時刻は午後8時を過ぎようとしていた。クリスマスとはいえ、この周辺はひっそりと静まり返っている。

僕は道路沿いに出てタクシーを拾うと、後部座席に腰を据え、溜め息を吐いた。冷気に触れると、全身の痛みが更に増す様である。無意識に眉間に皺が寄る。運転手に行き先を告げると、車体はゆっくりとその方向へと進み始めた。

車窓の景色は不規則な速度で移り変わる。無彩色の街が、今日限りのイルミネーションで鮮やかに彩られ、僕の網膜に容赦なく飛び込んで来る。建ち並ぶどの家々でも、家族や恋人とこの世界的なイベントに乗じて盛り上がっている事だろう。僕は背凭れに身を委ね、煌々と漏れる家の明かりを眺めながら、身寄りのない川崎を思った。タクシーはゆっくりと指定場所の前に停車した。精算を終えてマシヨンのエントランスに入る迄の僅かな外の寒さにも、身が縮ん

でしまう。

オートロックを解錠し、エレベーターに乗り込むと、全身を程よい緊張が包み込んだ。心なしか、それは身体中を駆け巡ると、袋を提げた左手に行き着く様な気がする。目的の階に辿り着き、通路を歩きながら窓に映る自分の顔を確認してみる。いつもと変わらぬ顔をしているだろうか。自分では判断しかねる。

玄関のドアを開けると、隙間からモワツとした暖かな空気が漏れ出し、たちまち全身を包み込んだ。寒さと緊張で強張っていた体の筋肉が俄かに弛緩する。クッションフロアの奥のリビングに通じるドアに嵌め込まれた磨り硝子からは明かりが見え、テレビの音らしきものも僅かながらに聞こえて来る。

靴を脱いでリビングのドアまではメートルほどしかないにも関わらず、やけに遠く長く感じた。その先に川崎が居る。そう思うだけで弛緩したばかりの緊張がまた高まるのだ。慣れない事をするとなれば、つい意気込んでしまうものである。僕は気を落ち着かせるべく深呼吸をしてから、やっとリビングのドアを開けた。其処にはソファに腰を据え、テレビを眺めるでもなく眺める川崎の姿があった。テレビでは拡大する日本のスラム化について、評論家が熱弁を奮っている。

「妹は喜んでくれたか」

川崎は此方を振り返る事なく訊ねて来た。病み上がりにはしつかりとした口調だ。とても暫く病床に伏していた人間とは思えない。

「否、寝てたよ。待たせ過ぎたかな。プレゼントは置いて来たけど、起きるのは明日かな。また明日行って来るよ」

僕の返答に、川崎は漸く此方に顔を向けた。相変わらずの無表情ではあるが、しかし、それでも何やら感付いた様な印象を受ける。それもその筈、僕は思い切り声の上擦り、早口になってしまっていたからだ。異変に気付かない訳がない。しかも、彼が此方を見た途端に僕は咄嗟に左手を背中の方へと回し、袋を隠したのがバレたか

も知れない。明らかに不審な言動に彼が疑念を抱かない訳がない。
「そうか」

しかし、川崎はそれ以上追及する事もなく、首を戻し、またテレビへと視線を移した。この無頓着さが時には有り難く思う。

妙な沈黙が続いた。否、こうして同じ屋根の下に暮らしていないが互いに口を利かないのは珍しい事ではない。今日に限ってそれを妙だと思うのは、この左手に提げた袋のお陰である。

このまま立ち尽くしては川崎の疑念を煽るだけだ。まずは熱い珈琲でも啜って体を温め、気を落ち着かせよう。それからタイミングを見計らい、これを渡そう。僕は左半身を壁際に寄せ、袋を覆う様にコートを脱いで手に持ち、自室へと足を向けた。が、川崎の背後を横切ろうとしたその瞬間、何か腹部にぶつかった。結構硬い。僕は反射的にその部分を見下ろした。川崎の手が背後に伸び、僕の腹部にあつた。その手には小振りの箱が乗っている。シンプルな水色の包装紙に包まれた10センチメートル四方ほどの箱だ。

「え……」

僕は最初、それが何であつて、わざわざ僕の前に差し出した真意が掴めなかつた。川崎は此方を見てはいない。目を丸くし、口を半開きにした頓狂な顔でそれを見下ろすばかりでいた僕に、川崎は堪りかねた様子で腰を捻って此方に上体を向けて見上げて来た。受け取れ、という意味だろうか。僕はコートを袋ごと床に置いてから箱を受け取った。その爽やかな配色とは裏腹に割と重みがある。

包装紙を剥がしたのは自然な動作であり、殆ど無意識であつた。とはいえ、何か得体の知れない期待に手先が覚束なく、紙を破いてしまふようになりながら、僕は逸る気持ちを抑え切れなかつた。徐々にその全貌が露になる様を、川崎は真顔で見つめている。

箱から出て来たのは口径5センチメートルほどのマグカップだつた。光沢のない高級感を漂わせる陶器製のそれは、包装紙に包まれていた時よりもずっしりと重く感じた。相反してそれをじっくりと眺める僕の瞳は少女漫画に登場する少女の様に星空や宝石を彷彿と

させるキラキラとした輝きを放っていたに違いない。僕は感動に打ちひしがれ、体が熱くなつていくのを感じていた。漸くそれが僕へのクリスマスプレゼントである事に気付いたのだ。きっと珈琲好きの僕の為に、川崎が吟味し、選び抜いた逸品なのだろう。彼らしいシンプルでありながら存在感のある洒落たデザインだ。

「良かったら使ってくれ」

素っ気ない声にも、どこかいつもとは違う感情が入り雑じっている様に思えた。気のせいかも知れないが、僕にはまるで地上に伸びる薄日と共に発せられた神の声にすら感じたのである。

「有り難う……」

僕はそう言いながら身を屈め、空いた手でコートを退いて袋を掴むと、川崎の眼前に差し出した。彼はそれを見るや無表情で小首を傾げている。先程の僕とさして変わらぬ困惑の行動だ。何も言わずにゆっくりとそれを受け取り、中を覗き込む。袋から取り出した箱の包装紙を至極丁寧に外していく姿を、僕は両手でマグカップを包み込みながら見つめていた。まさか僕がこんなものを用意していただなんて、予想だにしていなかっただろう。と思いながらも、その無表情を見ているとそうでもなさそうな気にさえなる。感情の起伏に乏しい彼からは、今の所別段変わった様子は窺えない。

川崎の手にウール素材の真っ白なマフラーが広げられた。病院に行く途中にふと思ひ立ち、急遽彼のクリスマスプレゼントにと買って来たのだ。

「あの、ほら、川崎って任務でこんな寒い中に外出する事が多いだろ？だから、その、少しでも温かくと思って……。色々探してはみたけど、好みとか全然判らないし、もしかしたら気に入らないかも知れないけど……」

無言で物珍しげにマフラーを眺めたり、質感を確かめているらしい川崎に、照れ隠しと言わんばかりに捲し立てると、彼はまた驚いているかも喜んでいるかも判然としない無表情で此方を見上げて来た。暫しの沈黙がふたりを包む。

「……何？」

「否……」

堪らず訊ねると、川崎は目を伏せて含みを持たせて一度言葉を切った。それから妙に畏まった口振りで、「アンタにしては、無難なセンスだな」

「……返せよ」

川崎の憎たらしい感想に、僕はすっかり臍（へそ）を曲げ、あからさまに不機嫌な顔付きでマフラーの端を掴んで引っ張ろうとしたが、彼はそれを制し、

「有り難う」

と、言った。その時の川崎の顔を、僕は一生忘れないだろう。冷酷な印象を受ける切れ長の目を細め、口角を緩やかに吊り上げた、初めて見せた笑顔を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5209m/>

Fragments of the necessity.

2011年1月3日13時54分発行